

曾根遺跡第1次発掘調査報告書

平成 23 年（2011 年）3 月
曾根遺跡調査団

序 文

曾根遺跡は、昭和10年頃に藤澤一夫氏によって発見された集落遺跡です。そのきっかけは、曾根西町2丁目における住宅建築に際して、弥生時代後期の土器が出土したことに求められます。しかし、曾根遺跡における集落の実態が明らかにされたのは、本書で報告する第1次発掘調査が行われた昭和61年、すなわち発見から半世紀がすぎた後のことでした。

この調査では、当初予想された弥生時代の集落のほかに、その当時摂津では例をみない規模を誇る平安時代の大型建物や道路状遺構が確認されました。特に、この大型建物群については、古代豪族の館あるいは寺院の一部、さらには豊島郡衙と様々な推論が浮上したように、その成果には大いに関心が寄せられました。

曾根遺跡では、この調査の後も引き続き住宅開発などに伴って発掘調査が実施され、第1次調査で確認された大型建物群の規模は、南北140m、東西100mほどに広がることが明らかにされ、建物群の性格も豊島郡衙の系譜を引く施設とみる説が最も有力な候補とされるようになっています。

このように、曾根遺跡は豊中市の歴史を語る上で、非常に重要な遺跡として位置付けられます。そして、その重要性を明らかにする契機になったのが、今回の調査であったと言えるでしょう。本報告書は、そうした調査成果を余す事なく提示し、将来における歴史叙述あるいはその研究に資することを目的に刊行するものです。

調査にあたっては、株式会社リクルート・コスモス大阪支社ならびに大阪府教育委員会、豊中市教育委員会をはじめとする関係者の方々に、種々のご協力を賜りました。ここに記して、厚く謝意を申し上げます。

平成23年（2011年）3月31日

曾根遺跡調査団
団長 亥野 強

例　　言

1. 本報告は、株式会社リクルートコスモス大阪支社による共同住宅建築に伴って実施した曾根遺跡第1次発掘調査の報告書である。
2. 本調査は、曾根遺跡調査団（団長　亥野　彌）が株式会社リクルートコスモス大阪支社の依頼を受けて、実施したものである。調査は、山元健と岡村勝行が担当した。なお、調査団の構成は、本文に掲載したとおりである。
3. 本調査は、豊中市曾根西町2丁目43他5筆のうち、2,200 m²を調査範囲とした。調査期間は、昭和61年（1986年）7月28日から平成元年（1989年）3月31日である。
4. 今回の調査では、弥生時代後期から平安時代中期にかけての遺構・遺物を検出したが、これらは大きく2時期に区分できる。ここでは、弥生時代後期から古墳時代を第1期とし、奈良時代から平安時代を第2期とした上で、各時期の遺構・遺物について報告する。
5. 調査区中央部の一帯は大きく搅乱されているため、この部分をもとに調査区を北部・東部・西部の3地区に分割した。本報告では、この区分に従って遺構の位置を示した。
6. 本報告で示した挿図中の北位は磁北で、座標北から西へ約9°傾いている。また、本文中に挙げた建物の主軸方向は、座標北（旧国土地標第VI系）からの偏差を表記した。
7. 本報告で表記した土層色は、調査時の所見に従っており、標準土色帖に準拠するものではない。
8. 本報告の執筆・編集は、豊中市教育委員会 地域教育振興課 文化財保護係 橋田 正徳が行った。

目 次

第Ⅰ章 調査にいたる経緯と経過

1. 調査にいたる経緯と経過	1
2. 曽根遺跡調査団の構成	1

第Ⅱ章 遺跡の環境

1. 地理的環境	3
2. 歴史的環境	3

第Ⅲ章 発掘調査の成果

1. 基本層序	9
2. 調査区の概要	9
3. 第1期の遺構と遺物	14
4. 第2期の遺構と遺物	36

第Ⅳ章 まとめ

1. 遺構の変遷	59
(1) 第1期の遺構	59
(2) 第2期の遺構	60
2. 超大型建物群について	61
(1) 超大型建物群の推定範囲	61
(2) 超大型建物群の性格	62

挿図・表目次

第1図 調査地位置図	2
第2図 調査範囲図	2
第3図 市内遺跡分布図	5
第4図 調査地点と周辺の地形	7
第5図 調査区西壁断面図	9
第6図 調査区東部平面図	9
第7図 調査区全体図	10
第8図 調査区西部平面図	11
第9図 調査区北部（東半部）平面図	12
第10図 調査区北部（西半部）平面図	13
第11図 竪穴住居1平面・断面図	14
第12図 竪穴住居1出土遺物	15
第13図 竪穴住居2平面図	15
第14図 竪穴住居2 SP259 遺物出土状況	16
第15図 SP259 出土遺物	16
第16図 建物1平面図	17
第17図 建物2平面図	17
第18図 建物3・柱穴列1平面図	17
第19図 建物4平面・断面図	18
第20図 建物4～6平面図	18
第21図 建物5平面・断面図	19
第22図 柱穴1平面・断面図	20
第23図 土坑1平面・断面図	21
第24図 土坑1出土遺物	22
第25図 土坑2平面・断面図	24
第26図 土坑2出土遺物	25
第27図 土坑3平面・断面図	26
第28図 土坑3出土遺物	27
第29図 土坑4平面・断面図	28
第30図 土坑4出土遺物	28
第31図 土坑5平面・断面図	29
第32図 土坑5出土遺物	30
第33図 土坑6平面・断面図	31
第34図 土坑6出土遺物	31
第35図 溝1～5平面・断面図	32

第36図	溝2～5出土遺物	34
第37図	建物5・7・16出土遺物	36
第38図	建物7・8平面・断面図	37
第39図	建物9平面・断面図	38
第40図	建物10平面図	39
第41図	建物11・12平面・断面図	40
第42図	建物13・17平面・断面図	41
第43図	建物9・10～14・柱穴列2出土遺物	43
第44図	柱穴列2平面・断面図	44
第45図	建物14平面図	44
第46図	建物15・16平面図	45
第47図	土坑7平面・断面図	46
第48図	土坑7出土遺物	47
第49図	土坑8平面・断面図	49
第50図	土坑8出土遺物	49
第51図	土坑9平面・断面図	50
第52図	土坑9出土遺物	51
第53図	溝6平面・断面図	52
第54図	溝6出土遺物	53
第55図	溝7・8平面・断面図	54
第56図	溝7・8出土遺物	55
第57図	柱穴出土遺物	57
第58図	弥生時代中期の遺構	59
第59図	弥生時代後期～古墳時代中期の遺構	60
第60図	古墳時代後期～終末期の遺構	60
第61図	第2期前半の遺構	61
第62図	第2期後半の遺構	61
第63図	超大型建物群の範囲	63
第1表	掘立柱建物一覧	62

図版目次

- 図版1 (1) 調査区全景
(2) 調査区全景(東部)
- 図版2 (1) 調査区全景(西部北側)
(2) 調査区全景(西部南側)
- 図版3 (1) 調査区全景(北部東側)
(2) 調査区全景(北部西側)
- 図版4 (1) 建物1全景
(2) 建物4・5全景
- 図版5 (1) 建物8柱痕検出状況
(2) 建物8全景
- 図版6 (1) 建物7・8全景
(2) 建物9全景
- 図版7 (1) 建物11・12柱痕検出状況
(2) 建物11・12全景
- 図版8 (1) 土坑1遺物出土状況
(2) 土坑2遺物出土状況
- 図版9 (1) 土坑3遺物出土状況
(2) 土坑4遺物出土状況
- 図版10 (1) 土坑5遺物出土状況
(2) 土坑6遺物出土状況
- 図版11 (1) 土坑7遺物出土状況
(2) 土坑8遺物出土状況
- 図版12 (1) 溝1～4全景
(2) 溝2・3・5
- 図版13 (1) 溝4遺物出土状況
(2) 溝6・竪穴住居1全景1
- 図版14 (1) 溝6・竪穴住居1全景2
(2) 溝7・8全景
- 図版15 (1) 土坑1出土遺物1(第24図1)
(2) 土坑1出土遺物2(第24図2)
- 図版16 (1) 土坑1出土遺物3(第24図5)
(2) 土坑1出土遺物4(第24図9)
- 図版17 (1) 土坑1出土遺物5(第24図7)
(2) 土坑1出土遺物6(第24図14)
- 図版18 (1) 土坑2出土遺物(第26図1)
(2) 土坑2出土遺物1(第28図2)
- 図版19 (1) 土坑3出土遺物2(第28図3)
(2) 土坑3出土遺物3(第28図4)
- 図版20 (1) 土坑3出土遺物4(第28図5)
(2) 土坑3出土遺物5(第28図6)
- 図版21 (1) 土坑7出土遺物1(第48図7)
(2) 土坑7出土遺物2(第48図8)
(3) 土坑7出土遺物3(第48図9)
- 図版22 (1) 土坑7出土遺物4(第48図10)
(2) 土坑7出土遺物5(第48図11)
(3) 土坑7出土遺物6(第48図17)
- 図版23 (1) 溝7出土遺物(第56図3)
(2) 竪穴住居1出土遺物(第12図1)
(3) 溝8出土遺物(第56図12)
(4) 建物13出土遺物(第43図5)

第Ⅰ章 調査にいたる経緯と経過

1. 調査にいたる経緯と経過

曾根遺跡は、昭和 10 年（1935 年）頃に藤澤一夫氏（元豊中市文化財保護審議委員・四天王寺国際仏教 名誉大学教授）が発見した遺跡である。しかし、発見時の所見からは、当遺跡は弥生時代の集落遺跡と推定される以外に、その実態は知られていなかった。そうした中、昭和 61 年（1986 年）3 月に曾根西町 2 丁目 43 における共同住宅建築に伴う事前協議が、豊中市教育委員会と事業主の間で行われ、埋蔵文化財発掘の届出が提出された。これをうけて、同年 3 月 13 日に豊中市教育委員会が建築予定地で確認調査を実施した結果、現地表下 50 ~ 60 cm のところで柱穴や溝などの遺構が検出され、当遺跡が弥生時代の集落遺跡であることを追認した。

一方、計画中の建物は、鉄筋コンクリート造 9 階建ての共同住宅であり、建築に伴って遺構が損壊されることは避けられないと判断された。よって、豊中市教育委員会と事業者は、埋蔵文化財の記録保存を行う必要から、発掘調査の実施について協議した。その結果、下記に記す曾根遺跡調査団（団長 亥野 強）が発掘調査の主体になることを依頼され、これをもって曾根遺跡第 1 次発掘調査が行なわれることになった。

発掘調査は、当初の建築予定地である 1800 m²について、昭和 61 年（1986 年）7 月 28 日から 11 月 31 日の期間で実施したが、その後に事業主から建築計画の変更手続きがなされ、これに基づいて調査対象範囲を 400 m²ほど拡張し、期間も昭和 62 年（1987 年）1 月 17 日まで延長することになった。また、昭和 61 年（1986 年）12 月 14 日には調査成果を広く公開するために、現地説明会が実施された。市民の遺跡に対する関心は高く、現地説明当日は小雨が降ったものの、多くの見学者が訪れた。

発掘調査が完了したあと、平成元年（1988 年）3 月 31 日まで出土遺物整理作業を行い、ここに発掘調査報告書を刊行することになった。

2. 曾根遺跡調査団の構成

団長 亥野 強（奈良県立橿原考古学研究所 研究員）

調査委員 藤澤 一夫（四天王寺国際仏教大学 教授）

都出 比呂志（大阪大学 助教授）

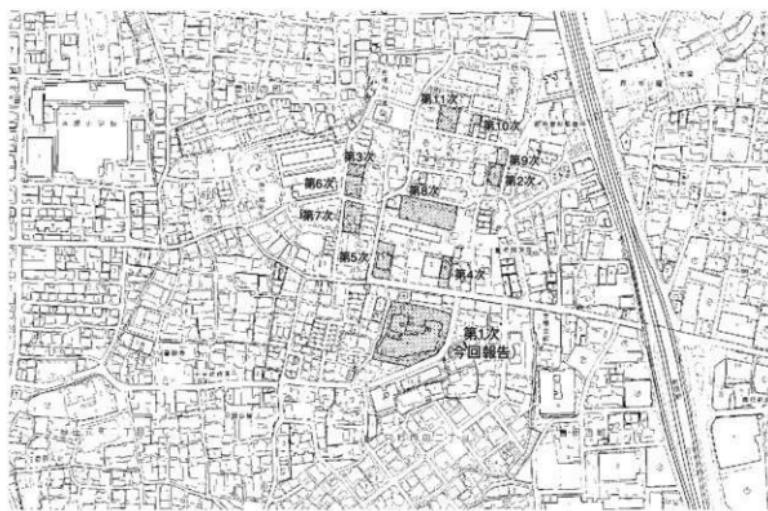
富田 好久（大阪青山短期大学 専任講師）

調査員 山元 健（豊中市教育委員会 社会教育課 文化財担当嘱託職員）

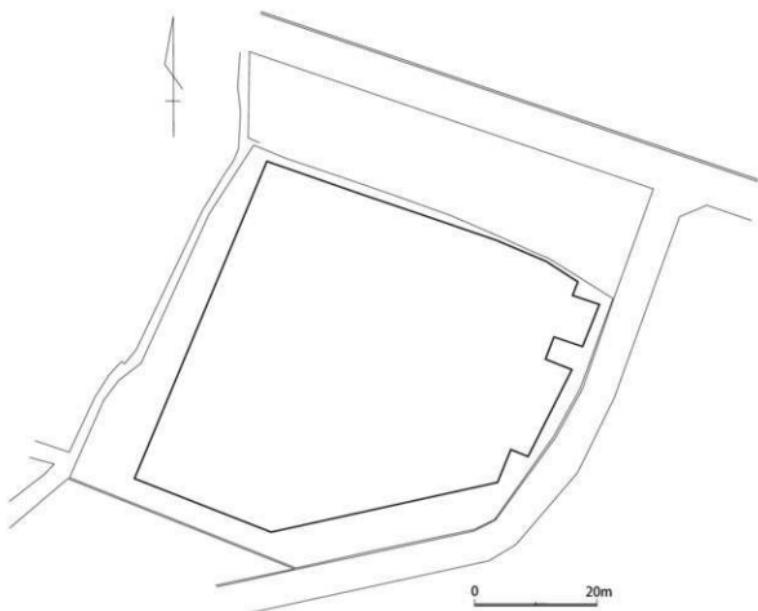
岡村 勝行（大阪大学 文学部 卒業生）

事務局 豊中市教育委員会 社会教育課

2. 曾根遺跡調査団の構成



第1図 調査地位置図（1：5,000）



第2図 調査範囲図（1：800）

第Ⅱ章 遺跡の環境

1. 地理的環境

豊中市は旧国では摂津国に属し、西は猪名川を挟んで兵庫県と、また南は神崎川を挟んで大阪市に接する。その市域の西と南を画する二つの河川は豊中市南西端で合流し、そして大阪湾へと注ぎ込む。そうした神崎川河口一帯は、古くより瀬戸内水運と神崎川・淀川水運が交接する流通上の要衝となり、その後背部に位置する豊中市はその恩恵を受けて発展してきた。また、豊中市の南北を縦断するように能勢街道が、猪名川流域の上津島から豊中台地中央付近に向かっては桜塚街道などが通るように、陸上交通も十分発達していたことも発展の背景にあったと想定される。

17世紀以降は都市大坂の近郊という環境のもと、市域の村落は商品作物の栽培を行うことで極めて安定的に展開する。そして、明治43年（1910年）の箕面有馬電気軌道（現在の阪急電鉄宝塚線）開通を契機に宅地化が進み、現在では約37㎢の市域に約40万人が暮らす北摂有数の住宅都市となっている。その一方で、商業都市大阪の近代化とともに、その玄関口にあたる本市には名神高速道路や阪神高速道路といった幹線道路や大阪国際空港など、陸空の交通機関が整備された。関西国際空港へ国際線が移転された現在においても、なお近代交通網における要衝の位置にあると言えよう。

一方、豊中市域の地形的特徴をみると、北から南に向かって標高が低くなること、起伏の乏しい穏やかな地形が指摘できる。市内北部の最高地点である島熊山（海拔約100m）から最も低い大島町付近（海拔1m以下）にかけての高低差は、およそ100mにとどまる。市域の北部には千里丘陵と刀根山丘陵と呼ばれる2つの丘陵（高～中位段丘）が、中部は主に千里丘陵から派生する中～低位段丘からなる豊中台地、南西部は神崎川・猪名川、その支流である天竺川などの小河川の沖積作用によって形成された平野部が広がるとおり、巨視的にみて三つの地形に区分できる。

こうした豊中市域にあって、曾根遺跡は豊中台地の南西端部から南へ舌状に伸びる丘陵上に立地する。遺跡の南側は段丘崖となり、これを下ると沖積地となるように、市域の南北を二分する地形境界付近に位置し、南方の眺望に優れた立地となっている。遺跡の周辺をみると、南方に広がる沖積地には豊島北遺跡・曾根南遺跡が、当遺跡が位置する舌状丘陵の西側には原田城北城跡が、その裾野に広がる最低位段丘には原田遺跡・原田城南城跡が、東側の丘陵南端部の斜面には桜塚古墳群との関連が考えられる曾根埴輪窯跡が展開する。また、曾根遺跡の南北を縦断するように桜塚街道が通るが、この街道は神崎川・猪名川合流点付近に展開し、難波津に比定される古代の流通拠点である上津島遺跡が位置する上津島と、中世には牛頭天王社であった原田神社を結び、能勢街道に合流する。現在の街道は、今回報告する第1次調査区から西に約50mのところを通る。

2. 歴史的環境

曾根遺跡は弥生時代中期後半から中世にかけての集落遺跡であるが、その性格は時代によって大きく変わる。このような当遺跡の歴史的環境を、水系という地域区分に基づいて復元するのも、ある程度までは有効である。しかし、曾根遺跡の地理的環境をふまえると、さらに周辺の地形や交通などの条件も加味する必要があろう。よって、ここでは遺跡の環境について、豊中台地南部を中心

に猪名川と天竺川に挟まれた平野部を何がしかの影響を及ぼし得る空間として認識し、当地域に人類が活動をはじめる旧石器時代より概観する。

旧石器時代 曾根遺跡において明確な旧石器時代の文化層は確認されていない。しかし、広く豊中台地全体を見渡すと、大塚古墳の墳丘からナイフ形石器が出土しており^{※1}、当台上地において人類が活動したと想定できる。ただし、千里川を挟んで豊中台地の北側に広がる待兼山丘陵とその周辺では10点を超えるナイフ形石器や翼状剥片が出土しているのと比べて、その活動は低調であった可能性が指摘できる。

縄文時代 当遺跡に限らず、豊中台地一帯では、当該期に展開する本格的な集落は確認されていない。しかし、服部遺跡第2次調査^{※2}で北白川下層式の縄文土器片が採集されていることから、豊中台地縁辺部に縄文時代前期の集落が展開した可能性は否定できない。

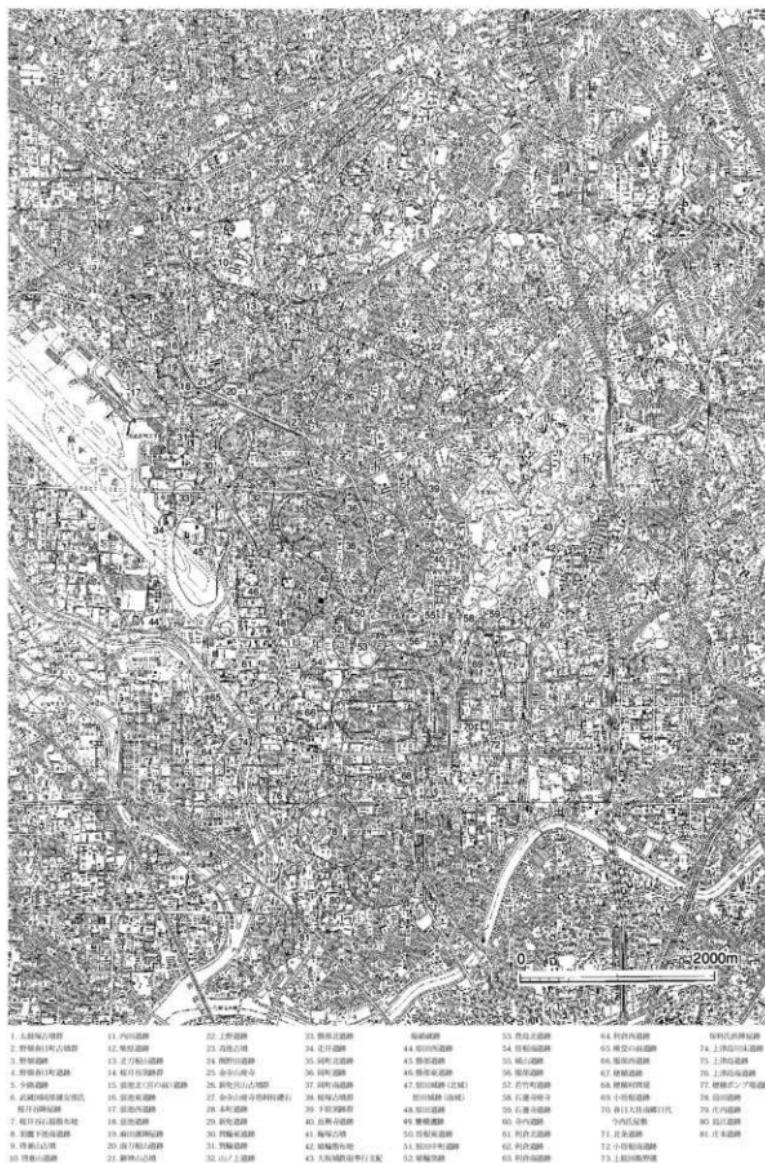
弥生時代 市域における弥生時代前期の集落は、小曾根遺跡・勝部遺跡など沖積地を中心に展開するが、勝部遺跡北東方に位置する山ノ上遺跡第6次調査^{※3}では弥生時代前期の土坑が確認されており、この時期に人々の活動領域は豊中台地縁辺部まで拡大している。ただし、曾根遺跡ではまだこの時期の遺物が確認されていない。段丘平坦部において集落が本格的に展開するのは、新免遺跡が出現する中期からとなる。

弥生時代中期になると、当遺跡の北方に位置する新免遺跡において集落が出現する。新免遺跡では、これまで住宅建設に伴う発掘調査が継続的に行われ、多数の住居跡と方形周溝墓が発見されている。その集落は市内でも有数の規模を誇ることが判明しており、当地域における拠点的な集落となる可能性が指摘されている。原田神社境内からは、中期前半と考えられる外縁付紐式銅鐸2口が出土したが^{※4}、そうした遺物もこの集落との関連が想定される。そして、第Ⅲ様式から第Ⅳ様式にかけて、新免遺跡の集落は拡大の一途をたどる。一方、第Ⅳ様式の段階で本町遺跡や岡町北遺跡において小規模な集落が出現する^{※5}。これら的小集落は、新免集落の周辺に位置することから、その分村となる可能性がある。中期後半に小集落が出現し、集落数が増加する現象は、このあと後期から終末期にかけて継続する。今回報告する曾根遺跡も、西側に隣接する原田遺跡と共に第Ⅳ様式後半に出現する。豊中台地に近い沖積地でも、服部遺跡^{※6}や豊島北遺跡^{※7}のように、第Ⅴ様式までには小集落が出現する。

終末期になると、平野部では穂積遺跡や上津島遺跡、利倉西遺跡などが新たに出現するほか、これまでに出現した集落は、その規模を急速に拡大する。曾根遺跡でも、この時期に集落の範囲を北方に広げるとともに、多数の掘立柱建物が建築されるようになる。また、服部遺跡では前方後円形の周溝墓が、豊島北遺跡でも円形周溝墓群が造られ、古墳出現前夜の様相を帯びるようになる。しかし、こうした集落数の増加や集落そのものの拡大傾向は、古墳時代には見られなくなる。

古墳時代 曾根遺跡では、第6次調査区において古墳時代前期の遺構が確認されているとおり^{※8}、この時期に集落が継続することは間違いない。しかし、弥生時代終末期に比べると、明らかに遺構数は著しく減少している。こうした状況は、新免遺跡や穂積遺跡でも確認できる。その一方で、上津島遺跡などの神崎川・猪名川合流域に展開する遺跡は、この時期も拡大する傾向が認められ、平野部の遺跡といつても合流域と内陸部では全く異なるあり方を示しはじめる。

ところで、この時期には五月山山系に池田市娘三堂古墳・池田茶臼山古墳が、また待兼山丘陵に



第3図 市内遺跡分布図

待兼山古墳・御神山古墳がつくられる。これらの前期古墳は箕面川左右岸の首長墳とされるが、いずれも単独で存在し、水系を単位とした首長墳の系譜は中期に継続しないことが指摘されている。

中期になんでも集落は散漫な様相を呈し、その具体像は未だ判然としない。しかし、この時期から当地域一帯に大きな動きがみられるようになる。当遺跡北方の桜塚古墳群において、前期末に西群の大石塚・小石塚古墳が築造されたが、中期には大塚古墳・御獅子塚古墳からなる東群へ移行するように、この時期を境に首長層が交代したと考えられている。また、待兼山丘陵から派生する低位段丘上に位置する蟻池東遺跡では、6棟以上からなる大型倉庫群が展開しており、卓越した権力が存在したと推定されている⁹。

中期には、豊中市北部の桜井谷窯跡群が操業はじめ、新免遺跡・本町遺跡が須恵器集散地として繁栄するようになる。これに伴って、千里川沿いの段丘にも内田遺跡や柴原遺跡といった集落が出現し、須恵器工人の集落と目される羽鷹下池遺跡も出現する。

後期になって、桜井谷窯跡群における須恵器生産が本格化すると、新免遺跡・本町遺跡では遺構が急増し、盛況をみせる。本町遺跡第29次調査区でこの時期の居館が確認されるように、豪族を頂点とする須恵器集散地の様相が解明されつつある。その一方で、周辺に位置する山ノ上遺跡・岡町北遺跡・岡町南遺跡でも、この時期から本格的な集落が展開するようになる。曾根遺跡においても、この時期の建物群が確認されているが、散漫な状況は中期とあまり変わらない。

奈良時代 奈良時代前半のうちに桜井谷窯跡群の操業はほぼ停止すると考えられているが、これに伴って新免遺跡・本町遺跡も衰退はじめ、8世紀末には本町遺跡第29次調査区の居館も廃絶する。また、その周辺に展開した柴原遺跡や内田遺跡も解体するようで、これらの遺跡では、この時期の遺構はほとんど確認されていない。一方、猪名川流域をみると、この時期も引き続き活況を呈している。島田遺跡では第6次調査区¹⁰に3間四方の大型倉庫が建てられ、また第1次調査区からは重弧文軒平瓦や三彩小壺が出土し、上津島遺跡第6次調査区¹¹では難波宮6013形式の重圓文軒丸瓦が出土した3間四方の大型倉庫が確認されるとおり、難波津に比定される流通拠点の様相は明確になる。豊中市内の遺跡のうち、難波津としての発展する神崎川・猪名川合流域の集落以外は、奈良時代末から平安時代初めにかけて廃絶し、単独の建物群が散漫に展開する散村へと変容する。

そうした中で、当遺跡では特殊な建物群が出現することになるが、このことは本報告で述べるところである。なお、曾根という地名は大同三年（808年）に作成された『大同類聚』（伝本）に「攝津國豊島郡曾根宮内乃方」とあり、古代に遡る可能性がある¹²。

平安時代 豊中市内では、この時期における集落の様相は、まだ十分に解明されていない。ただし、穗積遺跡や豊島北遺跡では、9世紀後半から単独で展開する建物群が確認されている。そうした状況は、蟻池北遺跡でも確認されていることから、段丘・冲積地という地形上の違いにかかわらず、難波津に比定される港湾集落と曾根遺跡以外では、散村が展開したと考えられる。この時期までに、当遺跡では本書で報告する超大型建物群に先行する大型建物群が出現し、その周囲にはこれに関わると考えられる建物群が展開する。こうした大型建物群の周囲に展開した建物群の一つに、岡町南遺跡第3次調査区が挙げられる¹³。ここでは、9世紀前半に出現する建物群の一部が検出されたが、これを構成する土坑1からは帶金具が、また建物3の柱穴SP115からは平瓦片が出土しており、



この大型建物群に關係した官人層の住まいと想定される。

曾根遺跡における古代集落の廃絶時期は十分に把握されていないが、11世紀前半の遺構はごく少数にとどまることから、この時期に衰退すると考えられる。一方、豊中市南部でも、この時期に単独の建物群のほとんどが廃絶する。そうした中で、例外的に継続する建物群が穗積遺跡第23次調査区^{※14}や山ノ上遺跡第12次調査区^{※15}で確認されている。これらの建物群は、11世紀後半にはじまる中世的集落の形成において、中心的な役割を果たすことになる。なお、この後の展開については、本報告書で扱う遺構とあまり関わるところがないので、ここでは割愛する。

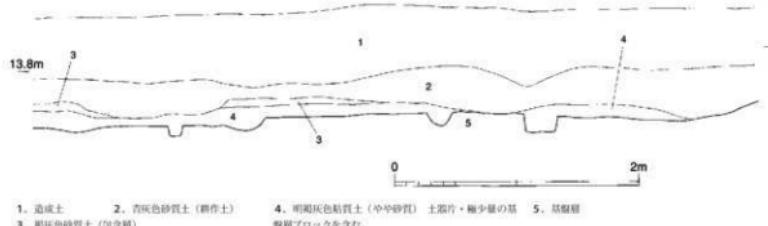
参考文献・資料等

- ※1 豊中市教育委員会『摂津豊中 大塚古墳』1987年
- ※2 豊中市教育委員会『豊中市埋蔵文化財発掘調査概要 1993(平成5)年度』1994年
- ※3 豊中市教育委員会『豊中市埋蔵文化財発掘調査概要 1985年度』1986年
- ※4 豊中市『豊中市史』第1巻 1961年
- ※5 六甲山麓遺跡調査会『豊中市 岡町北遺跡－第3次調査－』1993年
豊中市教育委員会『豊中市埋蔵文化財発掘調査概要 平成17年度(2005年度)』2006年ほか
- ※6 六甲山麓遺跡調査会『豊中市 服部遺跡－第5次調査－』1996年
- ※7 豊中市教育委員会『豊中市埋蔵文化財発掘調査概要 平成19年度(2007年度)』2008年
- ※8 豊中市教育委員会『豊中市埋蔵文化財発掘調査概要 平成9年度(1997年度)』1998年
- ※9 (財)大阪文化財センター『宮の前遺跡・螢池東遺跡・螢池遺跡・螢池西遺跡 1992・1993年度発掘調査報告書』1994年
豊中市教育委員会『螢池東遺跡第9次調査の概要』『豊中市埋蔵文化財発掘調査概要－阪神淡路大震災復旧・復興事業に伴う発掘調査－平成7(1995)年度－』1997年
- ※10 豊中市教育委員会『豊中市埋蔵文化財発掘調査概要 1989年度』1990年
- ※11 豊中市教育委員会『豊中市埋蔵文化財年報 vol. 6』1999年
- ※12 豊中市『豊中市域を中心とする古代史料(上)』1991年
- ※13 豊中市教育委員会『豊中市埋蔵文化財発掘調査概要 平成18年度(2006年度)』2007年
- ※14 橘田正徳『摂津国豊島郡 垂水西牧梗坂郷西部における中世的集落の動態』『大阪府指定史跡 春日大社南郷目代 今西氏屋敷』豊中市教育委員会 2005年
- ※15 豊中市教育委員会『豊中市埋蔵文化財年報 vol. 6』1999年

第Ⅲ章 発掘調査の成果

1. 基本層序

当調査区は、通称「豊中台地」から派生する舌状丘陵の頂部に立地するとおり、開発による削平をうけて自然堆積層は顕著に認められない。第5図に示すように、地表から下に戦前・戦後の宅地造成土、旧耕作土、遺構埋土あるいは遺物包含層となる褐色細粒砂層の順に堆積し、当調査区の基盤層となる黄褐色極細粒砂層に至る。このように、当調査区における基本層の構成は単純で、地形に伴う変化はほとんどみられない。



第5図 調査区西壁断面図（1:40）

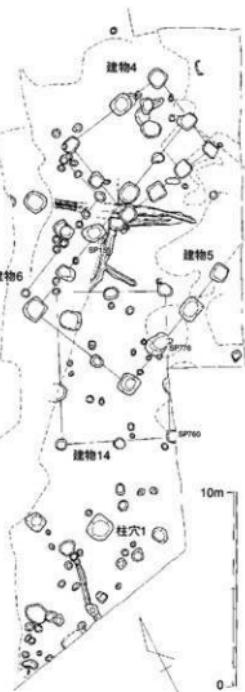
2. 調査区の概要

例言でも述べたとおり、当調査区の中央部は大きく攪乱されているため、その周囲の遺構が残存する部分を対象に調査を行った。こうした攪乱の影響もあるためか、遺構面も削平されており、遺構の保存状態はあまり良いとは言えない。しかし、残存する部分では、多くの遺構が確認されている。

これらの遺構は、弥生時代から平安時代中期にかけての所産となる。検出した遺構は、竪穴住居・掘立柱建物・廃棄土坑・落込み・溝などと多様であり、多数の柱穴からは長期にわたって集落が展開した状況がうかがわれる。

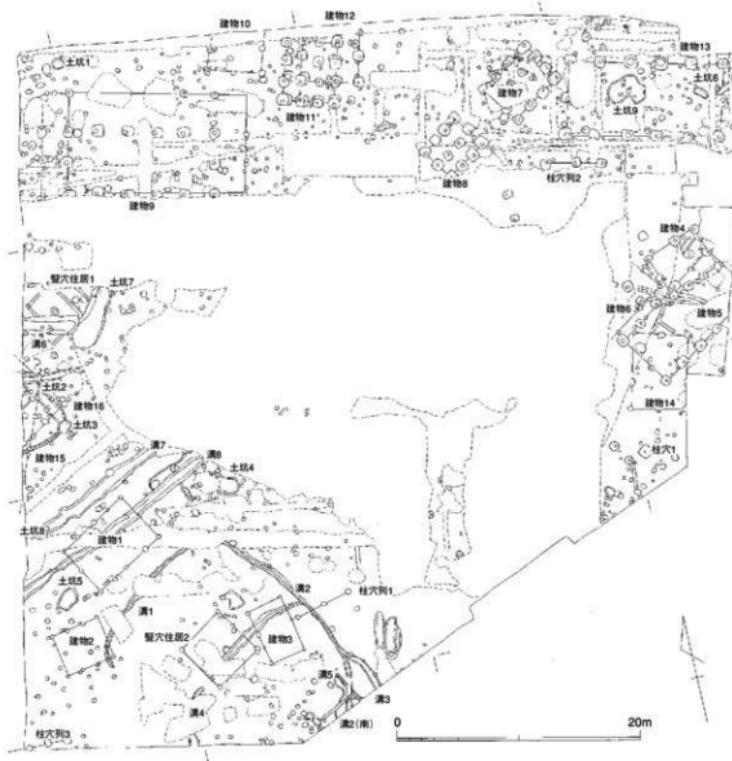
そうした遺構のうち、特に掘立柱建物の主軸方向をみると、平安時代中期を境に大きく変わることが観察された。また、この時期を境に集落遺跡から都衙遺跡にも匹敵する規模の超大型建物群へと、遺跡の内容も変わる。このことから、平安時代を境にそれ以前を第1期、それ以後を第2期とした。

なお、今回の発掘調査の成果については、この時期区分にしたがって報告する。

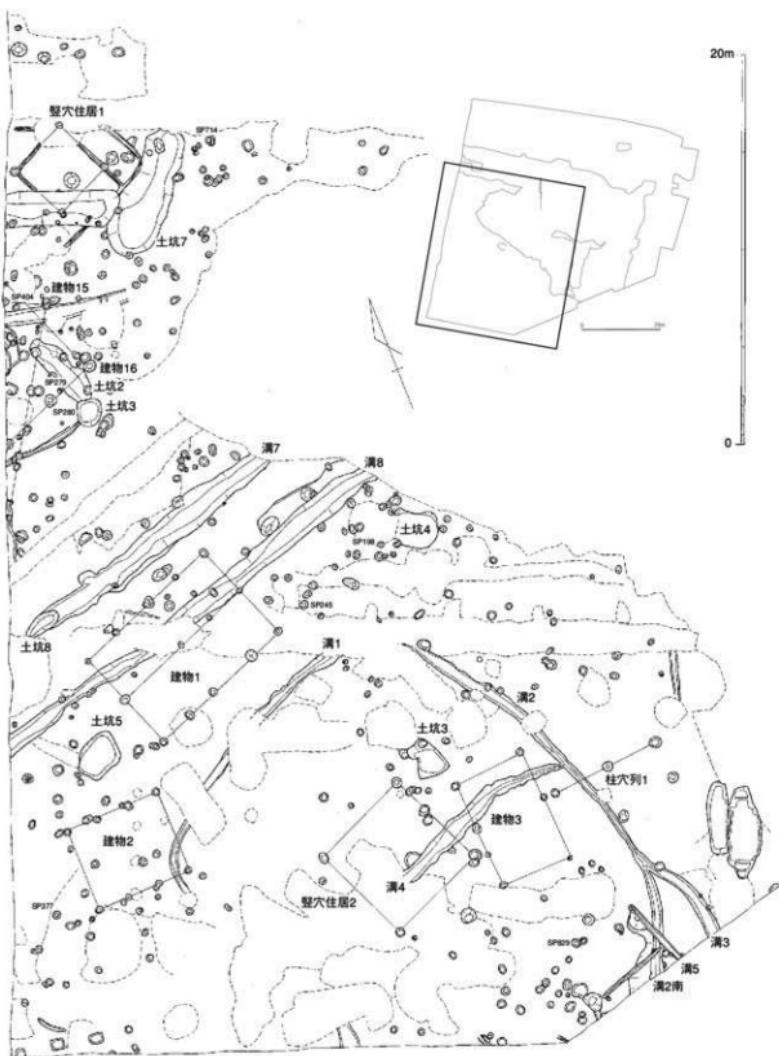


第6図 調査区東部平面図（1/160）▶

2. 調査区の概要

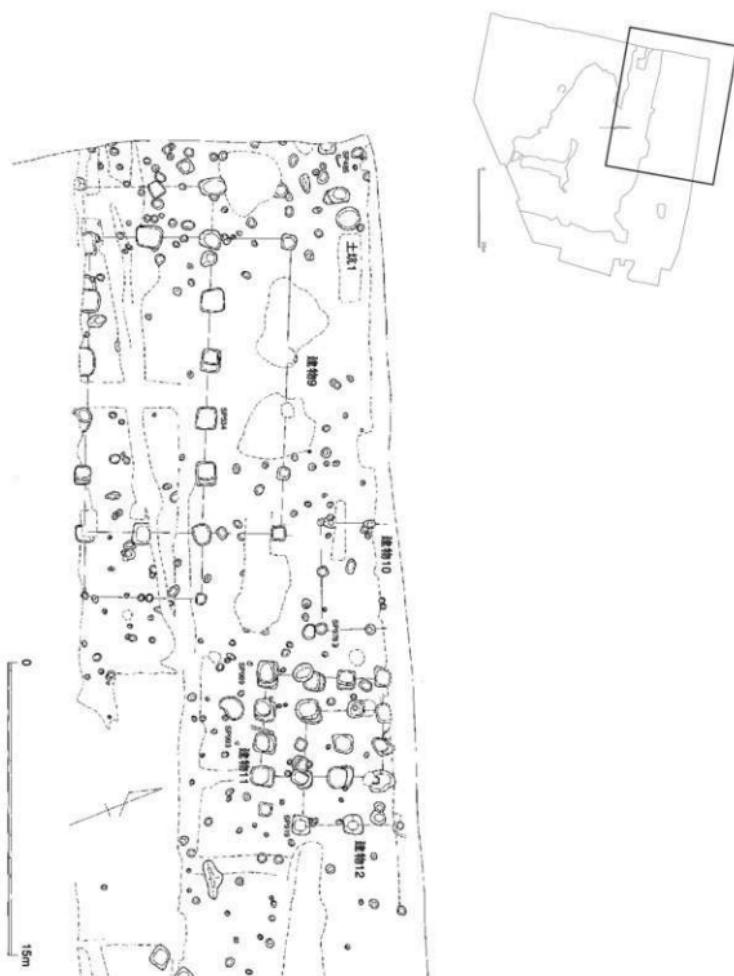


第7図 調査区全体図 (1/400)

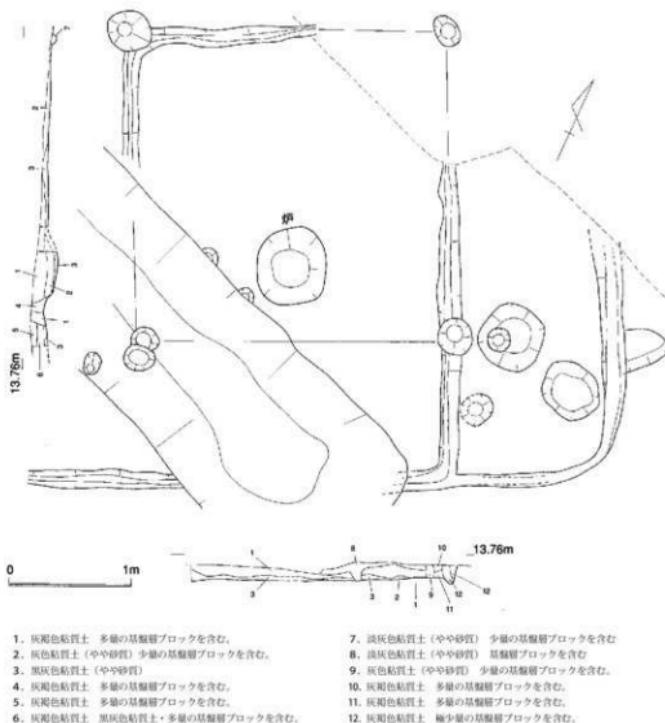


第8図 調査区西部平面図（1/160）





第10図 調査区北部（西半部）平面図（1/160）



第11図 穫穴住居1平面・断面図 (1/40)

3. 第1期の遺構と遺物

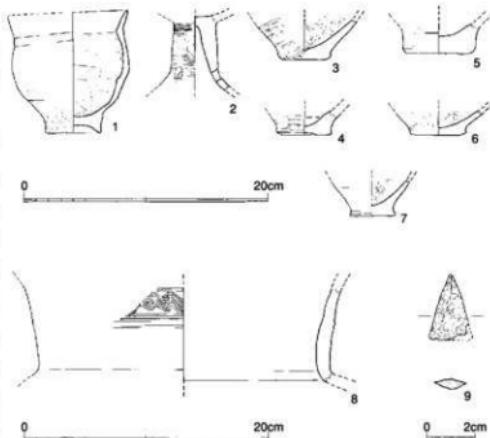
竪穴住居1 調査区西部で検出した竪穴住居である。検出した壁溝から、南北3.8m、東西5m以上の規模となる。壁溝は炉を中心左右対称に掘削されていると考えた場合、東西長は5.5mに復元される。また、北側の主柱穴は、壁溝内に掘削されていることから、南北長は現状よりさらに広がると考えられるが、住居の南北は後世の遺構などによって削平されているため、本来の規模は不明である。住居の方向は、N-45°-Wである。

住居の東側には、壁溝で仕切られた幅1.5mのベット状遺構が認められる。壁溝の幅は10cm前後で、貼り床の上面から掘削されている。壁溝の断面をみると、厚さ4cm前後の板材の痕跡が確認できる。主柱穴は4基で、東西・南北それぞれ2.5mの間隔で配している。主柱穴は直径20~35cmの円形状の平面形を呈し、深さ60cm前後をはかる。南側にある2基の主柱穴の中間に、炉が配置されている。炉は長軸長0.63m、短軸長0.55mをはかり、楕円形状の平面形を呈する。炉の深さは8cmと浅く、地床炉の形態をなす。埋土には焼土・炭化物を多く含むが、周囲の基盤層には被

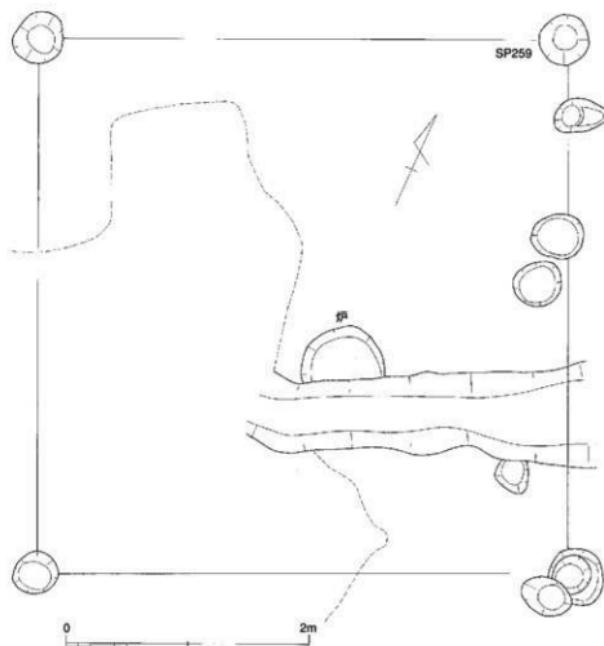
熱による変色はみられない。

竪穴住居1の貼り床直上および埋土下層からは、第12図に挙げる遺物が出土している。

1は弥生土器のミニチュア鉢で、器高10.0cm、口径9.8cmをはかる。外面のうち、口縁部から体部にかけてはナデを、底部には押圧が施される。内面のうち口縁部は横方向のナデを、体部は横方向のハケを施す。あまり肩が張らない体部から上方へ、口縁部が立ち上がる。また、底部の中央付近を押圧することで、外周部分を張り出させ、高台状に成形する。

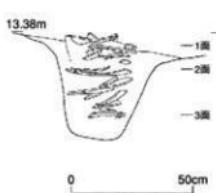
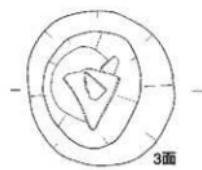
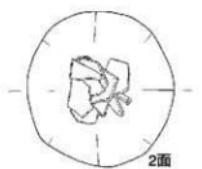
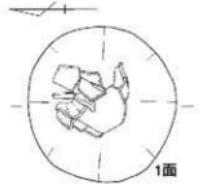


第12図 竪穴住居1出土遺物 (1~8: 1/4 9: 1/2)



第13図 竪穴住居2平面図 (1/40)

2は中空の高杯脚部で、脚部の直径は3.6cmをはかる。裾部との境界付近の3カ所に、円形のスカシが施される。全面にヘラミガキを施した後、スカシから上と杯部との接合部付近に、横方向の櫛描き文が施文される。杯部とは、挿入付加法で接合されていることが、その痕跡から推定できる。



第14図 壺穴住居2-SP259
遺物出土状況(1/20)

3・4は、弥生土器甕の底部である。3の底部径は4.4cm、残存高3.4cmをはかる。3の内面には、不定方向のハケが施される。4の底部径は4.8cm、残存高2.0cmをはかる。4の内面は風化しているため、調整は不明である。どちらも、外面にタタキ痕が残る。

5・6は、弥生土器甕の底部である。5の底部径は6.0cm、残存高2.5cmをはかる。内外面は風化しているため、調整は不明である。6は底部径4.8cm、残存高2.2cmをはかる。外面にはハケ調整を施すが、外面の一部にタタキ痕が残る。

7は、弥生土器鉢の底部である。底部径4.0cm、残存高3.0cmをはかる。外面にはナデを、内面には縦方向のミガキを施す。これらの遺物のうち、出土した甕・甌の底部はまだ退化していないことから、壺穴住居1は弥生時代終末期の所産と言える。

8・9は混入品と考えられるが、参考までに掲載した。8は須恵器甕の頸部である。頸部径24.0cm、残存高8.0cmをはかる。頸部中位に波状文と凹線文3条を施文する。8は、遺構の上面から出土しており、また他の遺物と時期的に大きく乖離していることから、混入品と考えられる。9は、平基無茎式の打製石鏃である。長さ2.2cmをはかる。逆刺の一部が欠損するが、幅は1.8cmと推定でき、二等辺三角形の形状を呈する。これも、弥生時代中期の所産となることから、混入品と考えられる。

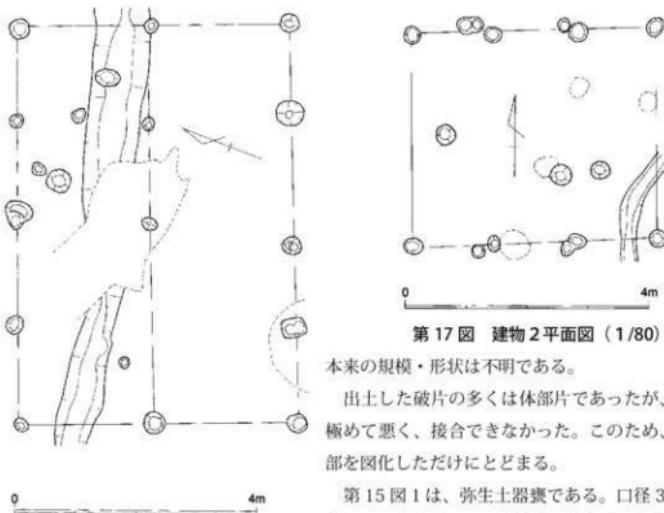
壺穴住居2 調査区西部で検出した壺穴住居である。南北4.5m、東西4.2mの間隔で4基の主柱穴を配している。その中央には、直径0.7m、深さ10cmをはかる平面円形状の炉が掘削されている。住居の方向は、N-23°-Wである。

主柱穴は、円形の平面形を呈し、直径30cm前後をはかる。埋土の状況から、使用された柱は直径20cm前後と考えられる。主柱穴のうちSP259からは、甕の破片が重なった状態で出土した。破片は、すべて同質の胎土で調整手法も同じことから、同一

個体と判断した。これらは、すべて柱痕の部分から出土したので、柱を抜き取った後に詰め込まれたと言える。なお、壺穴住居2は炉と主柱穴が検出されただけにとどまり、壁溝などは検出されなかった。このため、



第15図 SP259出土遺物(1/4)

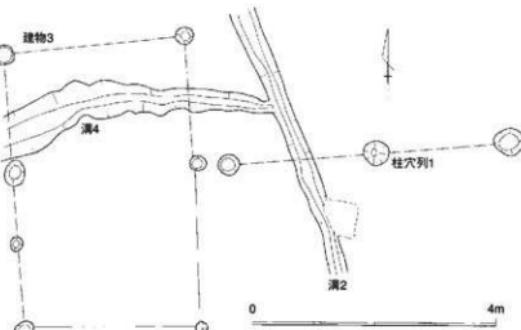


第16図 建物1平面図（1/80）

方向のハケを、外面はナデを施す。また、体部外面には縦方向のハケ、内面には横方向のハケを施す。第IV様式の所産と言える。

建物1 調査区西部で検出した掘立柱建物である。桁行4間（6.5m）、梁行2間（4.5m）、建築面積にして29.25 m²をはかる。建物の主軸方向は、N-68°-Eである。柱のうち、中央西寄りの東柱は検出されなかったものの、総柱構造の範疇に含まれる。柱穴の直径は30 cm前後であるが、深さは20～40 cmと一定ではない。また、柱穴の間隔は、桁行で1.3～2.0 mと不規則である。柱穴からは、土器片がわずかに出土しただけにとどまるが、これらの遺物から弥生時代終末期か、あるいは古墳時代前期の所産と考えられる。

建物2 調査区西部で検出した側柱建物である。桁行3間（4.0m）、梁行1間（3.5m）で、建築面積にして14 m²をはかる。建物の主軸方向は、E-1°-Nである。柱穴の直径は30 cm前後、深さ10～20 cmをはかる。また、柱穴の間隔は、桁行で1.3



本来の規模・形状は不明である。

出土した破片の多くは体部片であったが、保存状態は極めて悪く、接合できなかった。このため、口頭部の一部を図化しただけにとどまる。

第15図1は、弥生土器甕である。口径31.0 cm、残高3.5 cmをはかる。口縁端部は断面三角形状に肥厚し、

端面には2条の四線文が施される。口縁部の内面には横

方向のハケを、外面はナデを施す。また、体部外面には縦方向のハケ、内面には横方向のハケを施す。

第IV様式の所産と言える。

建物3 検出された柱穴列1（柱穴列1）を示す。柱穴列1は、建物3の北側に位置する。柱穴列1は、建物3の北側に位置する。柱穴列1は、建物3の北側に位置する。

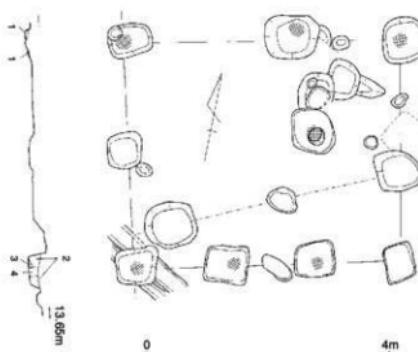
柱穴列1は、建物3の北側に位置する。柱穴列1は、建物3の北側に位置する。柱穴列1は、建物3の北側に位置する。

柱穴列1は、建物3の北側に位置する。柱穴列1は、建物3の北側に位置する。柱穴列1は、建物3の北側に位置する。

柱穴列1は、建物3の北側に位置する。柱穴列1は、建物3の北側に位置する。柱穴列1は、建物3の北側に位置する。

柱穴列1は、建物3の北側に位置する。柱穴列1は、建物3の北側に位置する。柱穴列1は、建物3の北側に位置する。

3. 第1期の遺構と遺物



1. 暗黄茶灰色粘質土（やや砂質）・灰褐色粘質土・暗褐色粘質土・直径40cm大の基盤層ブロックなどを含む。
2. 暗茶灰色粘質土（やや砂質）・暗褐色粘質土・灰褐色粘質土・少量の基盤層ブロック・少量の土器片を含む。
3. 暗黄茶灰色粘質土（やや砂質）・基盤層ブロック・灰褐色粘質土・暗褐色粘質土を含む。
4. 黒褐色粘質土（やや砂質）・灰褐色粘質土・暗褐色粘質土・極少量の土器片・礫石を含む

第19図 建物4平面・断面図（1/80）

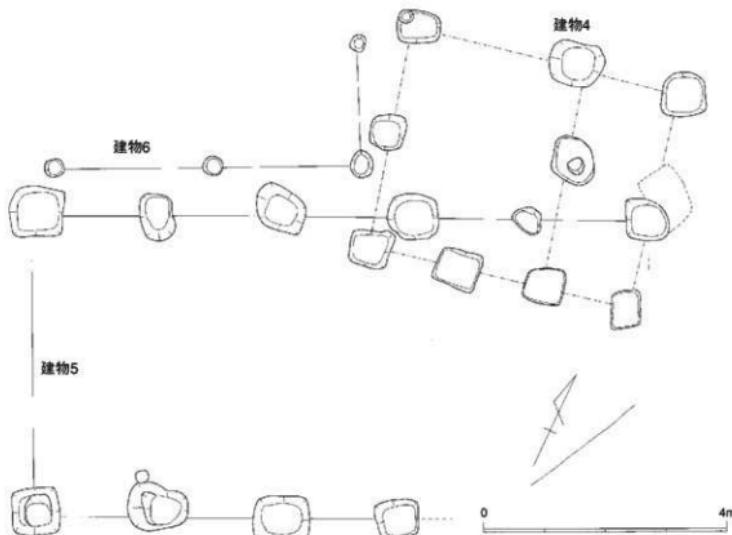
に対応する柱穴は検出されなかったので、建物になる可能性は極めて乏しい。柱穴列の主軸方向はE-15°-Nで、建物3とほぼ同じ方向となる。柱穴は、一辺40～55cmをはかる開丸方形状の平

～1.4mとほぼ均等に配置されている。出土遺物が少ないため、時期は明確にできないが、建物の特徴から弥生時代終末期頃と考えられる。

建物3 調査区西部で検出した掘立柱建物である。梁行1間(3.0m)、桁行2間(4.9m)で、建築面積は14.7m²をはかる。柱穴の間隔は、桁行で2.1～2.8mと不規則である。柱穴は、直径20～40cmの円形状の平面形を呈する。建物の主軸方向は、N-13°-Wである。

出土した遺物に図化できたものはなかったが、7世紀前半の須恵器环片があることから、この時期の所産と考えられる。

柱穴列1 調査区西部の建物3の東側で検出した。3基の柱穴からなる柱穴列で、全長4.6mをはかる。柱穴列の南北



第20図 建物4～6平面図（1/80）

面形を呈する。柱芯間の間隔は 2.2m・2.4m と、規則性は認めにくい。

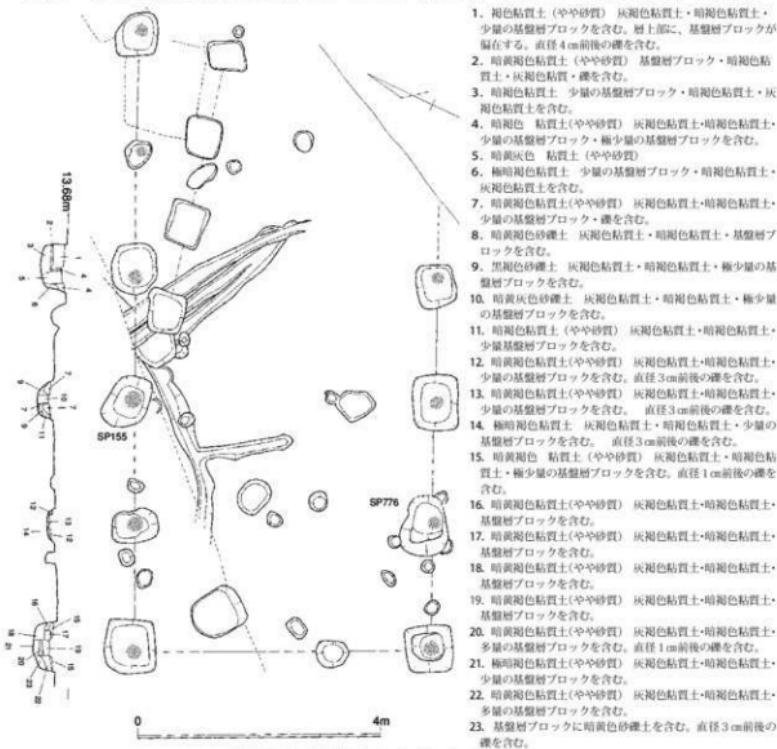
柱穴からは、須恵器甕体部の破片が出土している。遺物の特徴から、古墳時代後期以降の所産と考えられる。また、柱穴列と建物 3 の主軸方向は同じであり、出土遺物からも同時期の所産となる可能性がある。

建物 4 調査区東部で検出した梁行 2 間 (3.7m)、桁行 3 間 (4.4m) の側柱建物で、建築面積は 16.3 m² はかかる。建物 5 と重複するが、柱穴同士が切り合わないため、前後関係は不明である。建物の主軸方向は、N-66°-E である。

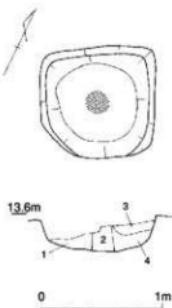
柱穴は 1 辻 70 cm 前後をはかり、方形状の平面形を呈する。埋土の状況から、使用された柱の直径は 20 cm 前後と推定される。桁行側の柱穴における柱芯の間隔は 1.4 ~ 1.6m、梁行側で 1.8 ~ 2.0m と、規則性はあまり認められない。

柱穴から出土した遺物に図化できるものはなかったが、6 世紀後半の須恵器环片など、古墳時代後期の遺物が出土しているので、この時期の所産と考えられる。

建物 5 調査区東部で検出した梁行 1 間 (4.9m)、桁行 5 間 (10.2m) の側柱建物で、建築面積



第 21 図 建物 5 平面・断面図 (1/80)



第22図 柱穴1平面・断面図（1/40）

に復元され、残存高 2.0 cm をはかる。天井部の外側には自然軸が付着しているため、調整は確認できない。それ以外は、回転ナデで仕上げられている。4 は須恵器高杯の脚部で、裾部径は 12.4 cm に復元され、残存高 2.8 cm をはかる。内外面は、ともに回転ナデで仕上げられている。裾部端部は強いナデにより、側面が凹線状になる。5 は、須恵器壺の口縁部である。口径は 17.4 cm に復元され、残存高 5.0 cm をはかる。内外面は、ともに回転ナデが施されるが、頸部には工具痕が残る。これらは古墳時代終末期の所産となる。また、これ以外に、6世紀後半の須恵器环片が出土している。以上の遺物から、建物 5 は建物 4 が解体されて間もない時期に建てられた可能性がある。

建物 6 調査区東部で検出した梁行 1 間 (2.0m)、桁行 2 間 (5.0m) の側柱建物である。西側は搅乱によって削平されているため、建築面積は確定できないが、20 m²をはかると考えられる。建物の主軸方向は建物 5 と同じであり、その位置も近い。しかし、柱穴は直徑 30 cm 前後をはかり、円形状の平面形を呈する。

建物 6 は柱穴の形状から、建物 4・5 と同じ時期の所産となる可能性は乏しいと考えられる。ただし、出土遺物は土器細片にとどまるため、時期は不明である。

柱穴 1 調査区東部で検出した、1 辺 0.95m 前後をはかる丸円形状の柱穴である。柱痕から、使用された柱は直徑 30 cm 前後と言える。柱穴 1 の周間に、同じ大きさの柱穴は検出されていないことから、単独の柱穴と考えられる。この柱穴に、どのような機能があったのかはわからない。図化できる遺物はなかったが、6世紀後半頃の須恵器环片が出土している。また、周囲の柱穴からも古墳時代後期の遺物が出土していることから、この時期の所産と考えられる。

土坑 1 調査区北部で検出した、円形状の平面形を呈する土坑である。直徑 0.95m、深さ 13 cm をはかる。埋土は 3 層に分層できたが、層位に関係なく大量の遺物が出土した。出土した遺物は器種がわかる大型の破片が多く、図化できたものも多い。

土坑 1 から出土した遺物は、第 24 図に掲載した。1・2 は弥生土器広口壺である。1 は口径 16.3 cm に復元され、残存高は 12.4 cm をはかる。口縁部は外反し、端部は肥厚して三角形状の断面形を呈する。また、その端面は強いナデによって、緩やかに凹む。頸部と体部の境界には、断面三角形状の突帯が貼付けられている。口縁部の内外面にはナデを、頸部外面は縦方向のハケを、内面には斜方向のハケが施される。体部外面には、ハケの後に縦方向のヘラミガキが、内面は縦方向の

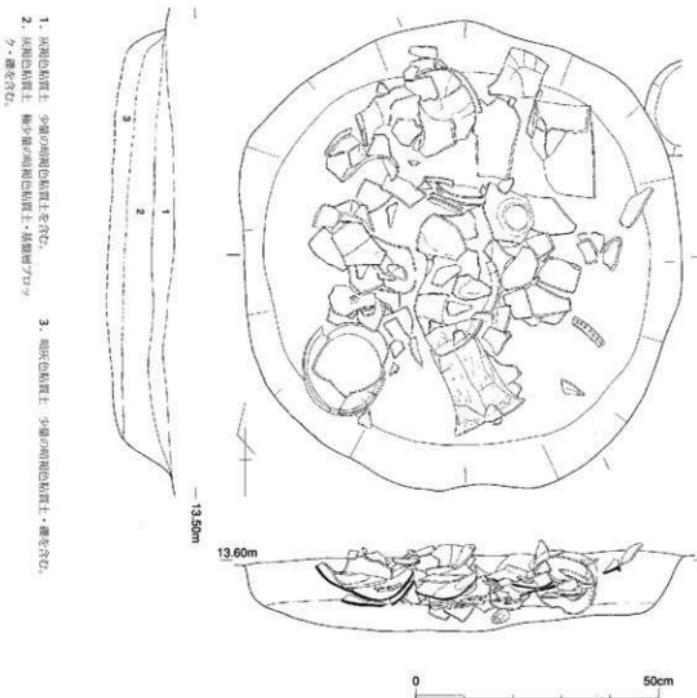
50 m²をはかる。建物 4 と重複するが、柱穴同士が切り合わないため、前後関係は確定できない。建物の主軸方向は、N-54°-E である。

柱穴は 1 辺 70 ~ 90 cm と、その大きさに規格性はあまり認められない。埋土の状況から、使用された柱は 20 cm 前後と推定される。桁行側の柱穴における柱芯の間隔は、2.0 ~ 2.1 m をはかる。

建物 5 のうち、SP155 からは第 37 図 3・5 が、SP776 掘り方から同図 4 が出土した。

3 は、須恵器蓋付壺の蓋である。口径は 9.0 cm

に復元され、残存高 2.0 cm をはかる。天井部の外側には自然軸が付着しているため、調整は確認でき



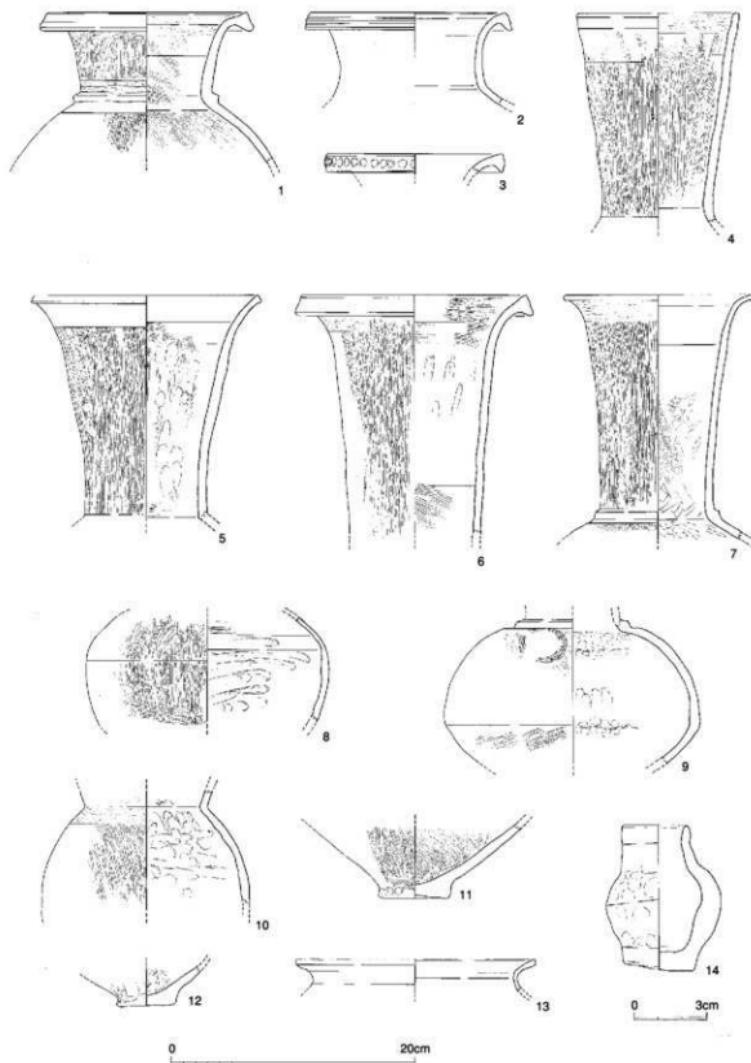
第23図 土坑1平面・断面図（1/10）

ハケが施されている。2は口径 17.4 cm、頸部径 12.0 cm、残存高 7.5 cmをはかる。口縁部は外反しつつ、端部に向かって肥厚し、断面は三角形状を呈する。その端面には、2条の四線文が施されている。風化が著しく、内外面の調整は不明である。

3は、弥生土器広口壺の口縁部である。口径は 14.3 cmに復元され、残存高 1.7 cmをはかる。口縁部は外反しつつ、端部に向かって肥厚し、断面は三角形状を呈する。端部はナデによって平坦に成形され、直径 7 mm前後の円形浮文が貼付けられる。明赤褐色を呈する特徴的な胎土から、生駒西麓からの搬入品と考えられる。

4～7は、長頸壺口頸部である。4は口径 13.6 cm、残存高 17.3 cmをはかる。口縁部は頸部から直線的に立ち上がり、その境界は明瞭ではない。口縁部の内外面には横方向のナデを、頸部の内外面にはハケの後に縦方向のヘラミガキを施す。内面のヘラミガキはやや粗雑である。5は、頸部から口縁部にかけてなだらかに外反しており、部位の境界はあまり明瞭ではない。頸部と体部の境界付近には、列点文状に刻み目を施すようであるが、残存部が限定されているため、あまり明確ではない。口縁部の内外面には横方向のナデを、頸部外面は縦方向のハケの後にヘラミガキを、内面

3. 第1期の遺構と遺物



第24図 土坑1出土遺物 (1~13: 1/4 14: 1/2)

上半部には横方向のハケ、下半部には縦方向のハケを施す。また、体部との境界付近では、内面にヘラケズリの痕跡が認められる。6は口径 18.3 cm、残存高 19.5 cm をはかる。口縁部は外反しつつ、端部に向かって肥厚し、三角形状の断面形を呈する。その側面には強いナデが施され、平坦面を形成する。頸部外面はハケの後に縦方向のヘラミガキを施す。口縁部内面には横方向のヘラミガキが、頸部内面のうち上部と下部には横方向のハケが確認できるが、中位付近は風化しているため不明瞭である。7は、5と似た器形を呈する。口径 15.4 cm、頸部径 9.2 cm、残存高 20.0 cm をはかる。口縁部は外反し、その端面はやや肥厚し、わずかに垂下して平坦な側面を形成する。頸部と体部の境界には、断面三角形状の突帯が貼付けられている。口縁部の内外面には横方向のナデを、頸部外面には縦方向のヘラミガキが、内面には不定方向のハケが施される。また、体部内面には、押圧痕が認められる。

8・9は、弥生土器壺の体部である。8は体部径 19.6 cm、残存高 8.4 cm をはかる。体部は球形を呈し、比較的の肩が張る器形になると想定できる。外面には縦方向のヘラミガキが施されるが、下半部には横方向のミガキが認められる。内面のうち上半部にはハケがみられるが、大部分は横方向のナデが施される。9は頸部径 7.8 cm、体部径 21.2 cm、残存高 12.0 cm をはかる。体部外面のうち、上半部にはハケが施されるものの、下半部にはタタキ痕が残る。また、体部上半には 4 条の櫛状工具で円形状の線刻が描かれているが、その意匠は不明である。頸部との境界には、断面三角形状の突帯を貼付けている。体部内面には押圧が確認できるだけにとどまる。

10は、弥生土器壺の体部である。頸部径 10.0 cm、体部径 17.0 cm、残存高 9.5 cm をはかる。頸部付近の外面には横方向のナデ、それ以下には縦方向のヘラミガキが施される。体部内面の調整は、風化により不明瞭であるが、押圧が確認できる。

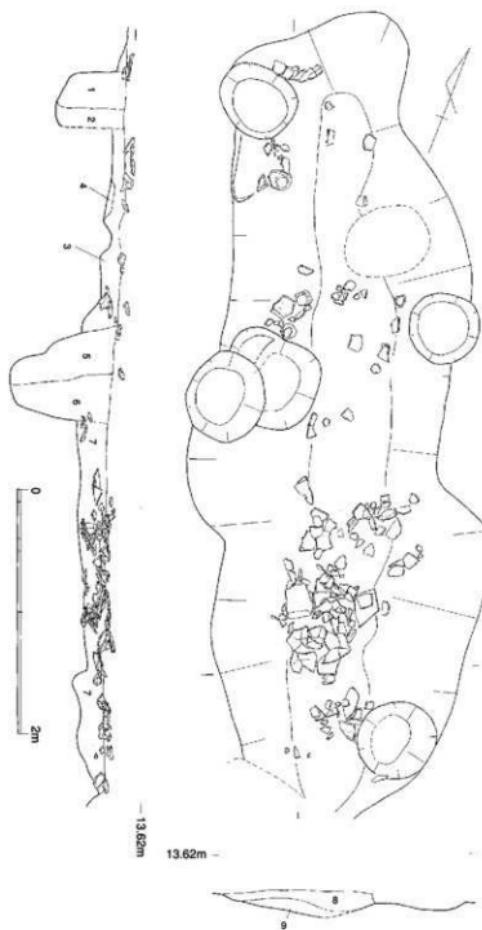
11・12は、弥生土器壺の底部である。11は底部径 6.0 cm、残存高 6.0 cm をはかる。外面は縦方向のヘラミガキ、内面は斜方向のハケが施される。12は底部径 5.0 cm、残存高 3.0 cm をはかる。内外面に、ハケが施される。

13は、土師器壺の口縁部である。口径 19.8 cm に復元され、残存高 2.7 cm をはかる。口縁部は緩やかに外反し、頸部は丸みを帯びる。端部はわずかに肥厚し、その上端面は少しつまみ上げられている。内外面は、ともに横方向のナデが施されている。口径に比べて体部径が大きく、また全体的に器壁が薄く、布留並行期の在地産壺の特徴を有する。他の遺物の時期と大きく異なることから、混入品と考えられる。

14は、弥生土器のミニチュア壺である。口径 2.6 cm、底部径 2.8 cm、器高 6.0 cm をはかる。口頸部はやや内反気味に立ち上がるが、直口壺の器形を呈する。口頸部外面は横方向のナデを、それ以外は押圧を施す。

以上、13のような混入品もあるが、土坑1出土遺物は良好な一括遺物と評価できる。遺物をみると、第IV様式の特徴と言える凹線文や櫛書文はあまり加飾されず、装飾性に乏しい。その一方で、長頸壺が多くみられるなど、第V様式にはない特徴が認められる。これらのことから、土坑1の遺物は第IV様式から第V様式へ移行する過渡的な一群に位置づけられ、いわゆる「第V-0 様式」の範疇に属すると言える。

土坑2 調査区西部で検出した、溝状に掘削された土坑である。南北 6.5m、東西 2.0m、深さ

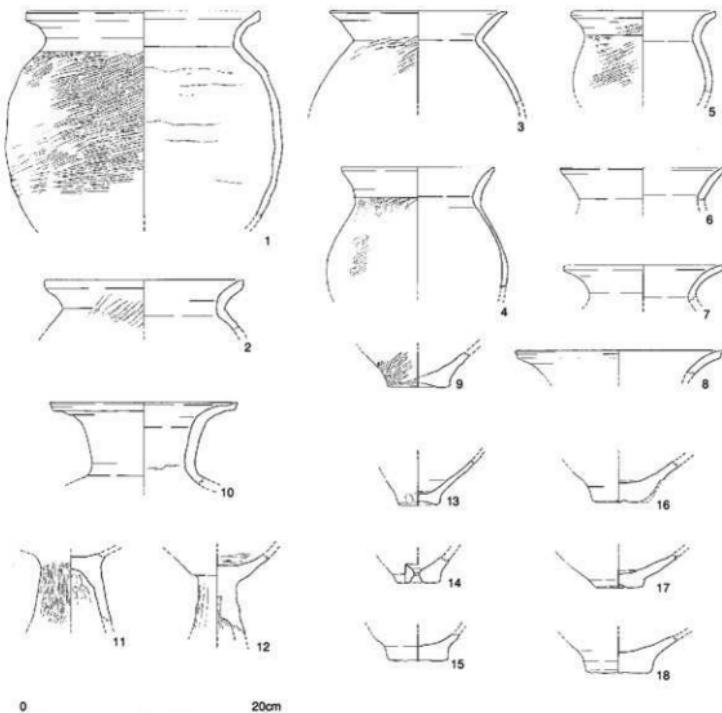


1. 灰褐色砂質土 少量の暗褐色粘質土・基盤層ブロックを含む。
2. 基盤層ブロック
3. 灰褐色粘質土 極少量の暗褐色粘質土を含む。
4. 灰褐色粘質土 極少量の暗褐色粘質土・多量の基盤層ブロックを含む。
5. 灰褐色粘質土 多量の基盤層ブロックを含む。
6. 灰褐色粘質土 多量の基盤層ブロックを含む。
7. 灰褐色粘質土 少量の暗褐色粘質土・極少量の基盤層ブロックを含む。
8. 灰褐色粘質土 極少量の暗褐色粘質土・極少量の基盤層ブロックを含む。
9. 灰褐色粘質土 極少量の暗褐色粘質土・多量の基盤層ブロックを含む。

第25図 土坑2平面・断面図(1/40)

10 cmをはかる。土坑の埋土は2層に区別される。また、土坑の南側を中心とし、弥生土器がまとまって出土した。出土した遺物は、第26図に掲載した。

1～5は、弥生土器甕である。1は、口径19.0 cm、残存高17.0 cmをはかる。口縁部から頸部の内外面には、横方向のナデが丁寧に施され、体部外面はタタキ痕が残る。体部内面の調整は不明である。なお、体部中位に接合痕が確認でき、体部上半と下半部を分割成形したものと言える。2は口径16.0 cmに復元され、残存高4.1 cmをはかる。口縁部の外面は風化しているため、調整は不明であるが、外面の一部にタタキ痕が確認できる。このことから、口縁部から体部にかけて、連続成形したものと言える。3は口径14.4 cmに復元され、残存高7.5 cmをはかる。口縁部の外面は横方向のナデを施すが、体部外面にはタタキ痕が残る。風化により、内面の調整は明確ではない。4は口径12.4 cmに復元され、残存高9.9 cmをはかる。口縁部の内外面はともに横方向のナデを、体部外面はタタキ成形の後に縦方向のハケを粗雑に施す。風化により、体部内面の調整は不明である。4の口縁部は、体部からやや直線的に立ち上がることから、1に比べて新しい様相を呈する。5は、口径14.0 cmに復元され、残存高は6.8 cmをはかる。口縁部の内外面は横方向のナデを施すが、外面



第26図 土坑2出土遺物（1/4）

には成形時のタタキ痕が残る。このことから、口縁部から体部にかけて、連続成形されたことがうかがえる。4と同じく、やや新しい様相を呈する。

6～8は、弥生土器壺の口縁部である。6は口径13.5cmに復元され、残存高2.5cmをはかる。7は口径13.0cmに復元され、残存高は3.0cmをはかる。8は口径17.0cmに復元され、残存高は2.0cmをはかる。これらの内外面は、ともに横方向のナデを施す。

9は弥生土器壺の底部である。底部径5.2cm、残存高3.1cmをはかる。外面にはタタキ痕が残る。内面は風化しているため、調整は不明である。

10は、弥生土器広口壺である。口径15.2cmに復元され、残存高6.8cmをはかる。口縁部は外反し、ほぼ水平に伸びる。口縁端部は、若干上方につまみ上げられるように肥厚する。全体的に風化しており、内外面の調整は不明である。

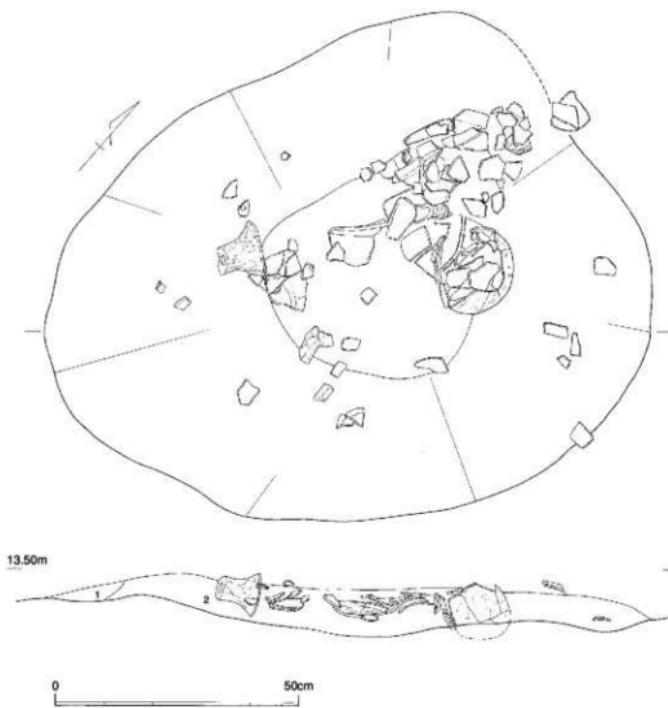
11・12は、弥生土器高杯である。11の脚部は上端で直径5.0cm、残存高6.2cmをはかる。中空の脚部の内面には縦方向のナデが、外面は縦方向のヘラミガキが施される。杯部との接合方法には、接合法が用いられる。12の脚部は、上端部で直径3.0cm、残存高は6.7cmをはかる。脚部は中空で、

3. 第1期の遺構と遺物

内面には絞り目が明瞭に残る。外面の調整は明確ではないが、脚部は面取り状の平坦面が認められる。杯部の底部内面には、不定方向のナデが施される。脚部と杯部の接合方法は判然としない。

13～15は、弥生土器鉢の底部である。13は底部径2.9cm、残存高4.1cmをはかる。体部外面はナデを、底部は押圧を施す。特に、底部の中央付近は、押圧によって凹む。風化のため、内面の調整は不明である。14は底部径4.0cm、残存高2.4cmをはかる。外面にはナデを施すが、内面は風化のため調整は不明である。底部の中央付近に、直径1.2cm前後をはかる円形の穿孔が貫通している。15は底部径5.0cm、残存高2.2cmをはかる。内外面には、ナデを施す。一見して壺の底部にも見えるが、体部への立ち上がり方から鉢と判断した。

16～18は、弥生土器壺あるいは鉢の底部である。16は底部径5.4cm、残存高3.7cmをはかる。内面にはナデを施すが、外面は剥離しているため、調整は不明である。また、底部の中央には、直径0.8cm前後の凹みがある。17は底部径4.0cm、残存高2.8cmをはかる。内外面はともに風化しているため、調整は不明である。底部の中央付近には、直径1.5cm前後の凹みがある。18は底部



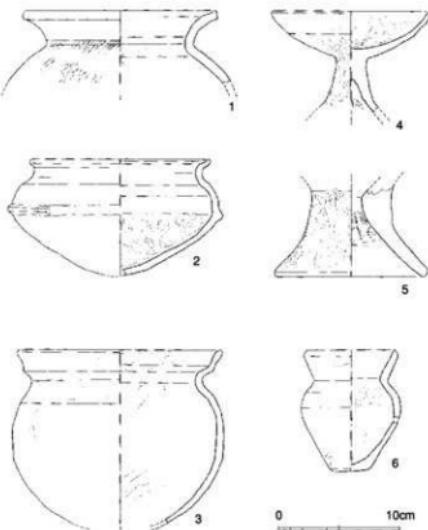
第27図 土坑3平面・断面図（1/10）

径 5.4 cm、残存高 3.0 cm をはかる。外面には横方向のナデが施されるが、内面の調整は不明である。

以上、土坑 2 から出土した遺物のうち、12 は古墳時代前期の可能性も残るが、それ以外は第 VI 様式の範疇に収まると考えられる。

土坑 3 調査区西部において、土坑 2 の南辺と重複する状態で検出した。長軸長 1.25m、短軸長 1.0m、深さ 10 cm をはかる。不整椭円形状の平面形を呈する。掘り方は緩やかに落ち込み、基底面は比較的平坦である。埋土は大きく 1 層にまとめられる。土坑 3 からは、多量の遺物が出土した。これらは、第 28 図に掲載したとおりである。

1 は、弥生土器甕の口頭部である。口径 15.5 cm に復元され、残存高 6.0 cm を



第 28 図 土坑 3 出土遺物 (1/4)

はかる。外反する口縁部の端面はやや上方につまみ上げられ、端部は平坦な側面を形成する。口縁部の内外面は横方向のナデを、体部外面はタタキ痕が残り、内面にはハケが施される。2 は弥生土器手焙り形土器で、口径 14.5 cm、器高 9.5 cm をはかる。受口状の口縁部に破断面が認められないことから、覆部は別に成形されたと考えられる。体部中位には、突帯が貼付けられる。口縁部の外面には横方向のナデが施されるものの、外面下半部の調整は不明である。体部内面のうち、下半部から底部にかけては縦方向・斜方向のハケが施される。残存部分から底部径は相当小さくなることから、尖底気味の形状あるいは丸底を呈すると推定される。3 は、土師器甕である。口縁部は頭部から一端屈折して立ち上がる、いわゆる二重口縁状の形態を呈する。口縁部から体部上半にかけては横方向のナデを、体部外面は縦方向の粗いハケを、底部内面はヘラケズリを施す。体部の形状から、丸底もしくは尖底気味の底部になるとを考えられる。なお、このような器形の甕は在地産では確認できないことから、搬入品と言える。中国地方でみられる二重口縁の甕に類似するが、産地は特定できない。4 は、弥生土器高杯である。中実の脚部に、碗形の杯部からなる。口径 13.0 cm、杯部高 3.6 cm、残存高 8.3 cm をはかる。杯部の口縁部外面に横ナデを、体部外面、脚部外面には縦方向のヘラミガキを施す。脚部の内面には絞り目が認められるものの、風化しているため、調整は明確ではない。5 は弥生土器の脚部であるが、上半部は欠損するため器種は不明である。裾部径 12.6 cm、残存高 7.6 cm をはかる。脚部は中空で、杯部下半との接合部には円盤充填の形跡が認められないことから、接合法の可能性が考えられる。外面は縦方向のヘラミガキ、内面下半部は横方向のナデ、上半部は横方向のハケを短い間隔で施している。6 は弥生土器甕のミニチュア製品で、器高 10.0 cm、口径 7.2 cm、底部径 3.2 cm をはかる。外面のうち底部にタタキ痕が残るもの、ほ

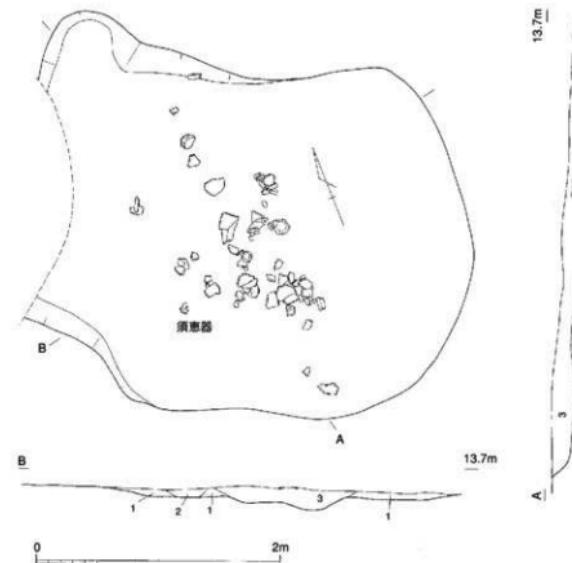
ば全面にナデを施す。内面のうち、口縁部には横方向のナデを、体部以下にはハケが施される。

以上、土坑3から出土した遺物をみると、第V様式から古墳時代前期にわたる時期幅があり、一括性に乏しい。

土坑4 調査区西部で検出した、不整形形状の平面形を呈する土坑である。南北2.8m、東西3.3m以上、深さ15cmをはかる。土坑の西側は搅乱により削平されているため、本来はもう少し西側に広がる。この部分を含めると、東西3.8mに復元される。土坑の掘形は不明瞭で、なだらかに落ち込むことから、自然の落込みと考えられる。

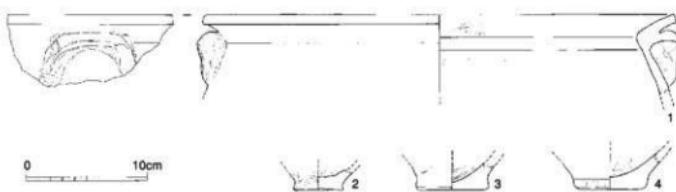
出土した遺物はほとんど弥生土器であるが、須恵器も極少量出土している。これら須恵器は混入品ではなく、古墳時代に掘削された土坑に弥生土器が再堆積した可能性が高いと判断する。

土坑4から出土した遺物は、第30図に掲載した。1は、弥生土器把手付鉢の口頸部である。口



1. 基盤層ブロックに少量の灰褐色粘質土を含む。
2. 灰褐色粘質土
3. 灰褐色粘質土 極少量の基盤層ブロックを含む。

第29図 土坑4平面・断面図（1/40）



第30図 土坑4出土遺物（1/40）

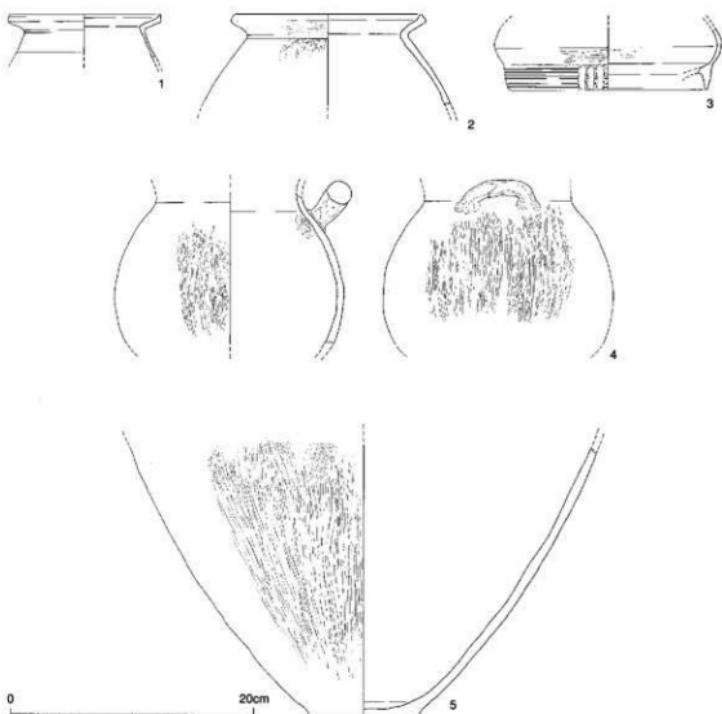


第31図 土坑5平面・断面図(1/20)

径は38.4cmに復元でき、残存高は6.4cmをはかる。口縁部は、屈曲して外方に立ち上がる。頭部には、粘土帶で幅8cm前後の把手を貼付ける。口縁部の内面は横方向のハケの後に、ヘラミガキが施される。体部の内面は、横方向のナデを施す。外面は風化により、調整は不明である。2は、弥生土器鉢の底部である。底部径4.0cm、残存高1.7cmをはかる。底部の外面は押圧を、体部にはハケの後に縦方向のヘラミガキを施す。内面には、ハケが施される。3・4は弥生土器の底部で、壺あるいは鉢と想定される。3は底部径6.0cm、残存高2.2cmをはかる。外面にはナデを、内面には板ナデを施すが、風化しているため鮮明ではない。4は底部径6.0cm、残存高3.0cmをはかる。外面には押圧が、内面には板ナデ痕がわずかに確認できる。なお、これらの遺物はすべて混入品となるため、遺構の時期を反映するものではない。

土坑5 調査区西部で検出した土坑で、不整形状の平面形を呈する。東西長2.0m、南北長1.45m、深さ7cmをはかる。埋土は上下2層に区分され、その層境付近から多量の土器が出土した。なお、遺物は土坑の東側に多く分布する。

1・2は、弥生土器甕の口頭部である。1は口径12.3cmに復元され、残存高3.6cmをはかる。口縁部は水平近くまで屈曲し、端部はつまみ上げられ、その側面には強いナデが施される。口頭部の外面にはナデが施されるものの、内面は剥離しているため調整は不明である。2は口径15.2cmに復元され、残存高7.5cmをはかる。口縁部は斜め方向に立ち上がり、端部はつまみ上げられる。その側面は、やや平坦になる。口縁部の内外面には横方向のナデを、体部外面は縦方向のハケを施す。体部内面の調整は、不明である。



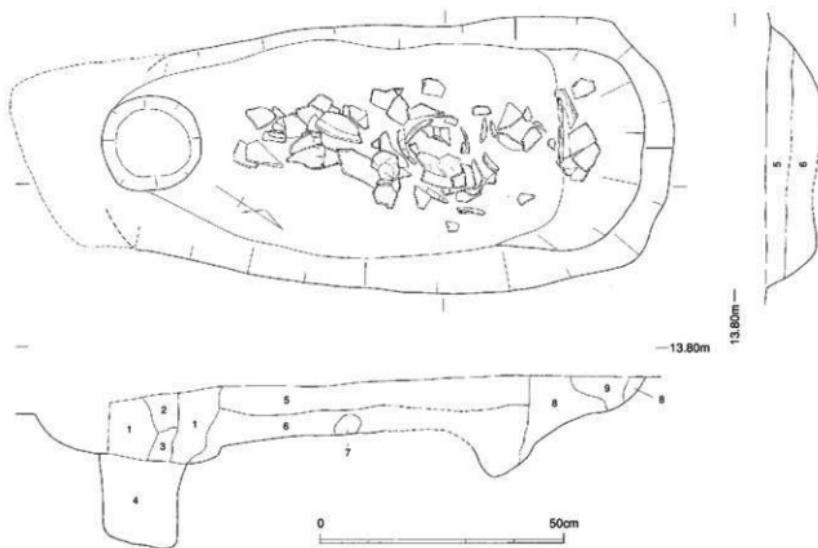
第32図 土坑5出土遺物（1/4）

3は台付無頸壺の可能性も残るが、器台と鉢の複合器種として扱った。鉢部の体部径は18.6cmに復元され、残存高5.0cmをはかる。器台部の口径は17.0cmに復元される。体部下半のところに、器台部の口縁部が接合する形状である。器台部の口縁側面には、4条の四線文が施され、その上面に3条単位で棒状浮文が貼付けられる。体部外面には、横方向のヘラミガキが施される。内面も横方向のヘラミガキが施されると考えられるが、風化しているため判然としない。

4は、弥生土器水差の体部である。体部径は18.8cmに復元され、残存高12.5cmをはかる。肩部には、横方向に把手を取り付けられている。体部外面は縦方向のハケの後に、やや粗雑なヘラミガキを施している。内面は風化しているため調整は不明であるが、全体に押圧痕が認められる。

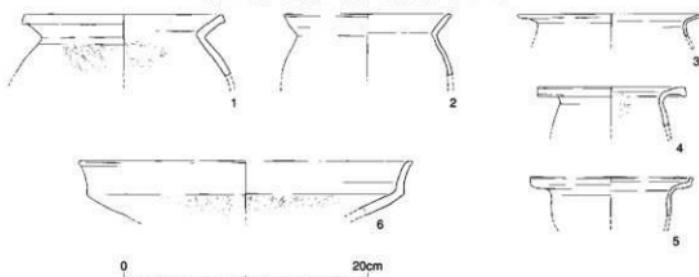
5は、弥生土器壺の体部である。底部径は8.4cm、残存高22cmをはかる。体部外面のうち、上半部は縦方向のハケを、下半部にはヘラミガキが施される。ところで、下半部の下地にはヘラケズリにみられる砂粒の移動痕がある。この痕跡が、ヘラミガキに先立ってヘラケズリを行ったことによるために生じたのか、ヘラミガキを強くかけたためにヘラケズリ状の形跡が残ったものなのかは、判断できない。内面は風化しているため、調整は不明である。

これらの土器は、第IV様式の所産と言える。特に、3は第IV様式後半に見られることから、土坑



1. 明灰褐色粘質土 極少量の基盤層ブロックを含む。
2. 暗褐色粘質土 極少量の基盤層ブロック・少量の暗褐色粘質土を含む。
3. 暗褐色粘質土 多量の基盤層ブロックを含む。
4. 暗褐色粘質土 少量の基盤層ブロックを含む。
5. 明灰褐色粘質土 極少量の基盤層ブロック・少量の暗褐色粘質土を含む。
6. 暗褐色粘質土
7. 暗褐色粘質土
8. 明灰褐色粘質土
9. 明灰褐色粘質土 多量の基盤層ブロックを含む。

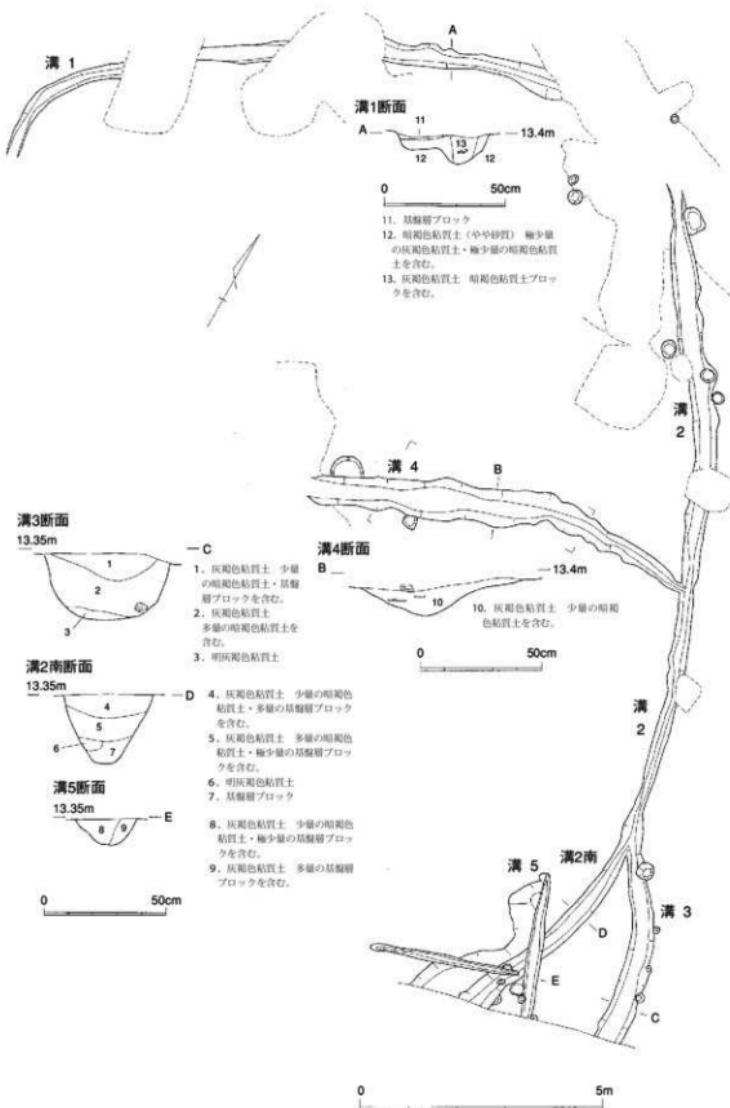
第33図 土坑6平面・断面図（1/10）



第34図 土坑6出土遺物（1/4）

5の時期もこの時期に求められる。

土坑6 調査区西部で検出した隅丸長方形状の平面形を呈する土坑で、南北長1.34m、東西長0.55m、深さ10cmをかる。土坑の小口部は、基底面から一段深く掘り込まれている。長軸方向における土層の堆積状況を観察すると、小口部分には縱方向に基盤層ブロックを含む明灰褐色粘質土（土層1・2・8・9）が堆積している。また、小口部にはさまれた土坑内部は上下2層に区分できる埋土がほぼ水平に堆積している。土坑の横断面をみると、上下2層に区分されるだけにとど



第35図 溝1～5平面・断面図 (平面図: 1/100 断面図: 1/20)

まる。このように、土層断面の特徴から、木棺墓になる可能性が考えられる。しかし、出土した遺物には時期幅があり、供獻品とはならない。このことから、廃棄土坑として扱うこととした。

なお、土坑上層から多量の土器が出土したが、これらは第34図に掲載した。

1・2は弥生土器裏で、体部径が口径より大きい器形のものである。1の口径は16.2cmに復元され、残存高5.0cmをはかる。口縁部の内外面には横方向のナデを施すが、特に端部の側面は強いナデで平坦面を形成する。体部外面は縦方向のハケを、内面には横方向のハケを施す。2の口径は13.4cmに復元され、残存高5.0cmをはかる。口縁部外面には横方向のナデを施す。風化により、体部の調整は不明である。外方に屈折する口縁部の端部は、やや肥厚する。3～5は弥生土器裏のうち、体部径が口径を超えないものである。3の口径は15.2cmに復元され、残存高2.2cmをはかる。風化により、内外面の調整は不明である。口縁部は、ほぼ水平に屈曲する。器壁は、土器裏と間違えるくらい、非常に薄い。4の口縁部は12.2cmに復元され、残存高3.2cmをはかる。口縁部は水平近くまで屈曲し、また端部にむかって肥厚する。端部は、ナデによって幅広い側面を形成する。体部外面の調整は、風化のため不明である。5の口径は13.2cm、残存高3.2cmをはかる。口縁部はほぼ水平に屈曲し、端部は受け口状に立ち上がる。その側面には、強いナデが施される。体部外面の調整は、風化により不明である。

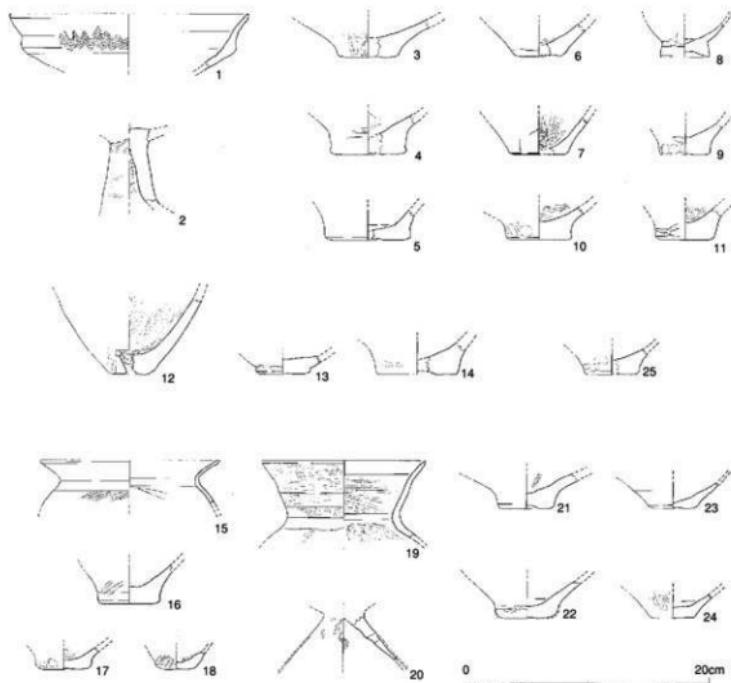
6は弥生土器高杯の杯部で、皿状の器形を呈する。口径は26.0cmに復元され、残存高4.4cmをはかる。口縁部はやや外反気味に立ち上がり、その外面には横方向のナデが施される。底部の外面は、ともにヘラミガキが放射状に施される。

3～5は第VI様式、6は第V様式頃となる。このほかに、水平口縁の高杯も出土していることから、土坑6は長い期間にわたって機能したと考えられる。

溝1～4 調査区西部で検出した、4条の溝である。これらは屈曲したり、分岐しているが、明確な重複関係は確認できないことから、同時に埋没した一連の遺構として扱う。また、溝4の西側は攪乱によって著しく削平されているが、南にむかって屈曲する可能性が高く、溝1～4によって平面「日」の字状を呈する二つの区画を形成すると考えられる。なお、溝1の埋土には、再掘削の形跡を示す堆積状況が確認されている。

溝1は幅0.3～0.4m、深さ15cmをはかる。溝2は、北端部で幅0.3m、深さ20～25cm、南端部で幅0.55m、深さ25～30cmをはかる。溝3は幅0.55m、深さ25～30cmをはかる。溝4は、西端部で幅0.6m、深さ5cm、中央部で幅0.6m、深さ10～15cm、合流部となる東端では幅0.15m、深さ5cmをはかる。検出部分における溝1・2の全長は、南北約20m、東西14mをはかる。溝の断面形と埋土は断面の位置で異なるが、「U」字形の断面形状を呈し、堆積土は概ね3層に区分されることを標準とする。上層は褐灰色粘質土で、溝が埋め戻された後に堆積したものと考えられる。中層には基盤層ブロックが多く含み、人為的な埋戻土となる。下層には溝機能時に堆積した明褐灰色粘質土が認められる。特に、中層と下層の層境部からは、弥生土器の破片が多く出土した。これらの遺物は第36図に掲載したとおりである。

溝2出土遺物 1は、弥生土器高杯の杯部である。口径19.6cmに復元され、残存高は5.5cmをはかる。体部は平坦な底部から屈曲して内反気味に立ち上がり、皿状の形態を呈する。風化により、内外面の調整は不明瞭である。体部中位に、櫛描きによる波状文が描かれる。



第36図 溝2～5出土遺物（1/4）

2は、弥生土器高杯の脚部である。接合部付近における脚部径は3.0cm前後、残存高6.0cmをはかる。杯部とは、挿入付加法で接合される。外面には斜方向のハケが施され、内面には絞り目が残る。

3～6は、弥生土器壺の底部である。3は底部径5.0cmに復元され、残存高3.1cmをはかる。外面は縦方向のヘラミガキを施す。風化のため、内面の調整は不明である。4は底部径6.4cm、残存高3.4cmをはかる。外面は縦方向のハケ、内面は斜方向のハケを施す。5は底部径7.0cm、残存高2.5cmをはかる。風化のため、内外面の調整は不明である。6は、弥生土器壺底部である。底部径3.8cm、残存高2.7cmをはかる。風化により、内外面の調整は不明であるが、内面に押圧痕がわずかに認められる。

7は、弥生土器壺または鉢の底部である。底部径5.0cmに復元され、残存高2.9cmをはかる。外面には縦方向のナデを、内面には縦方向のハケを施す。8は、弥生土器鉢の底部である。底部径4.2cm、残存高2.8cmをはかる。底部は、押圧により中央が凹む一方で、外周部が張り出して高台状の形態を呈する。また、底部内面も、押圧によって中央付近が一段凹む。風化により、内外面の調整は不明であるが、一部に押圧痕が確認できる。9は、弥生土器壺あるいは鉢の底部である。底部径4.2cm、残存高2.6cmをはかる。底部外面のうち下部は押圧を、上部にはタタキ痕が残る。内

面の調整は不明である。

これらの中には、時期の詳細を特定できるだけの特徴を持った遺物は見られないが、概ね第VI様式の所産と言える。

溝2南出土遺物 溝2のうち、溝3が分岐する地点から南側から出土した遺物は、その北側とは区別し溝2南として扱った。10は、弥生土器鉢底部である。底部径は5.4cmに復元され、残存高2.7cmをはかる。外面は押圧、内面にはヘラミガキが施される。11は、弥生土器甕あるいは鉢の底部である。底部径5.0cm、残存高2.7cmをはかる。外面にはタタキ痕が残り、内面には不定方向のハケが施される。これらの遺物は第VI様式の所産となる。もちろん、これらの遺物で遺構の時期は決定しにくいが、溝2と同じ時期の所産としても問題はないだろう。

溝3出土遺物 12は、弥生土器鉢である。底部径3.3cm、残存高6.3cmをはかる。体部は、やや内反気味に立ち上がる。体部外面は縦方向のハケを、内面には縦方向の板ナデを、底部内面には押圧を施す。また、底部中央付近に穿孔がある。13・14は、弥生土器甕の底部である。13の底部径は4.6cm、残存高1.5cmをはかる。風化のため、内外面の調整は不明である。球脛状の体部形になると推定される。14の底部径は6.6cmに復元され、残存高は2.7cmをはかる。外面にはヘラミガキが施される。内面は風化により、調整は不明である。

溝4出土遺物 15は、土師器甕の口頸部である。口径は14.6cmに復元され、残存高3.6cmをはかる。頸部は「く」の字状に屈曲し、口縁部は直線的に立ち上がる。口縁部の内外面には横方向のナデを、体部の内面には横方向のハケを施す。また、体部の外面にはタタキ痕が残る。16は弥生土器甕の底部と考えられるが、鉢の可能性も残る。底部径5.0cm、残存高3.1cmをはかる。外面にはタタキ痕が残る。内面は風化しており、調整は不明である。

17・18は、弥生土器鉢の底部と考えられる。17は底部径4.5cm、残存高1.8cmをはかる。内外面は、ともに押圧痕がみられる。18は底部径3.0cm、残存高1.7cmをはかる。外面にはタタキ痕がみられるが、内面は風化しており、調整は不明である。

19は、弥生土器直口甕の口頸部である。口径は13.4cmに復元され、残存高7.7cmをはかる。口縁部は、体部からやや直線的に立ち上がる。口縁部から頸部にかけて横方向のナデを、頸部の内面には横方向のナデを、外面のうち下部には縦方向のハケを施す。体部の内外面には、縦方向のハケが施される。

20は、弥生土器器台の脚部である。裾部端は欠損するものの、裾部径は9.8cm前後に復元できる。残存高は4.0cmをはかる。脚部の中位には、円形の穿孔が4方向に施される。内外面は、ともに風化しているが、外面のうち上半部はハケの後に縦方向のヘラミガキが施される。

21～24は、弥生土器甕または鉢の底部である。21は底部径4.5cmに復元され、残存高4.5cmをはかる。底部内は押圧により凹む。22は底部径5.0cmに復元され、残存高3.3cmをはかる。風化により、内外面の調整は不明である。23は底部径4.0cm、残存高2.3cmをはかる。風化により、内外面の調整は不明である。24は底部径3.6cm、残存高2.1cmをはかる。外面には縦方向のハケを施すが、内面は風化しており調整は不明である。

以上、これらの遺物は第VI様式の所産と言えるが、時期の詳細までは明確にできない。このうち、11は布留式土器に並行する在地產土師器となるが、これは溝上層の遺物と考えられる。溝1～4

の埋没時期の下限は、第VI様式に求められよう。

ところで、溝1～4とよく似た断面「U」字形になる溝は、曾根遺跡の各調査区と原田遺跡第1次調査区でも見られる。原田遺跡第1次調査区で行った珪藻分析では、溝の最下層で採取された珪藻のうち陸生珪藻（主に *Hantzschia amphioxys*）が最も多く、一部に好流性種（主に *Surirella ovata*）が優先するところがあると報告された。このことから、當時の溝は乾燥状態にあって、一時的に流水する環境が復元される。よって、これらの溝は、雨水を排水するために掘削されたと考えられる。また、この種の溝は曾根遺跡に限らず、穂積遺跡や服部遺跡の同じ時期の集落でも確認されているので、この時期の集落における特徴的な遺構と言える。

溝 5 調査区西部で検出した幅0.3m、深さ10cmの溝で、溝2を削平する。検出部分で、南北3mをはかる。溝の断面形状や堆積土は、先の溝1～4と大きく変わらない。溝5から出土した遺物は少ないが、第36図25が出土している。

25は弥生土器の底部であるが、残存部分が少ないため、器種は特定できない。底部径は4.6cmに復元され、残存高2.1cmをはかる。外面には押圧痕がみられるものの、風化により調整は明確ではない。

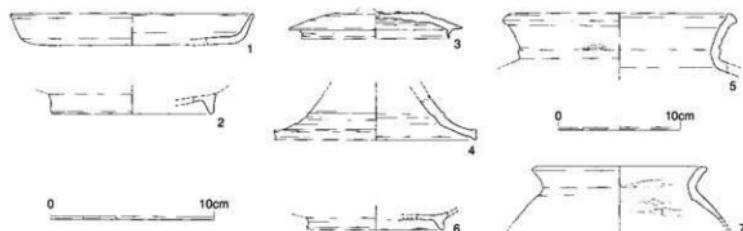
4. 第2期の遺構と遺物

建物7 調査区北部で検出した建物で、ほぼ同じ主軸方向の建物8が南西3mのところに位置する。梁行3間（3.6m）、桁行3間（5.0m）で、建築面積は18m²をはかる。総柱建物と考えられるが、建物の中央付近は攪乱で破壊されているため、確定できない。建物の主軸方向は、N-63°-Eである。

柱穴は、1辺0.6～1.0mの方形あるいは円形と、その大きさや平面形状に規格性は認められない。また、埋土の状況から、使用された柱は20～30cm前後と言える。桁行側の柱穴における柱芯の間隔は1.55～1.65m、梁行は1.0～1.2mをはかる。柱穴のうちSP14・16には、柱を据える前に礫を敷き詰めている。

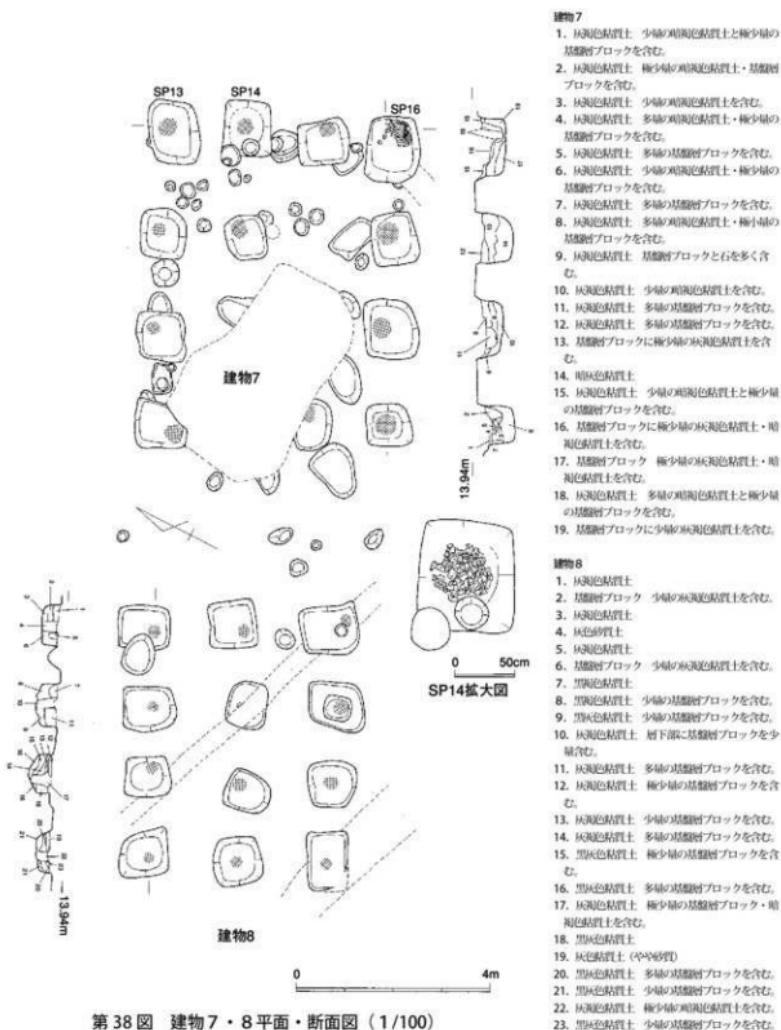
建物7のうち、SP24の掘り方からは第37図1が、SP13の掘り方からは同図2が出土している。

1は、土師器皿である。口径は15.0cmに復元され、器高1.9cmをはかる。口縁部は横方向のナデを、底部には不定方向のナデを施す。口縁端部は、肥厚し丸味を帯びる。9世紀前半までの所産である。



第37図 建物5・7・16出土遺物（1～4・6：1/3 5・7：1/4）

1・2は建物7（1:SP24 2:SP13） 3～5は建物5（3・5:SP155 4:SP776） 6・7は建物16(SP280)



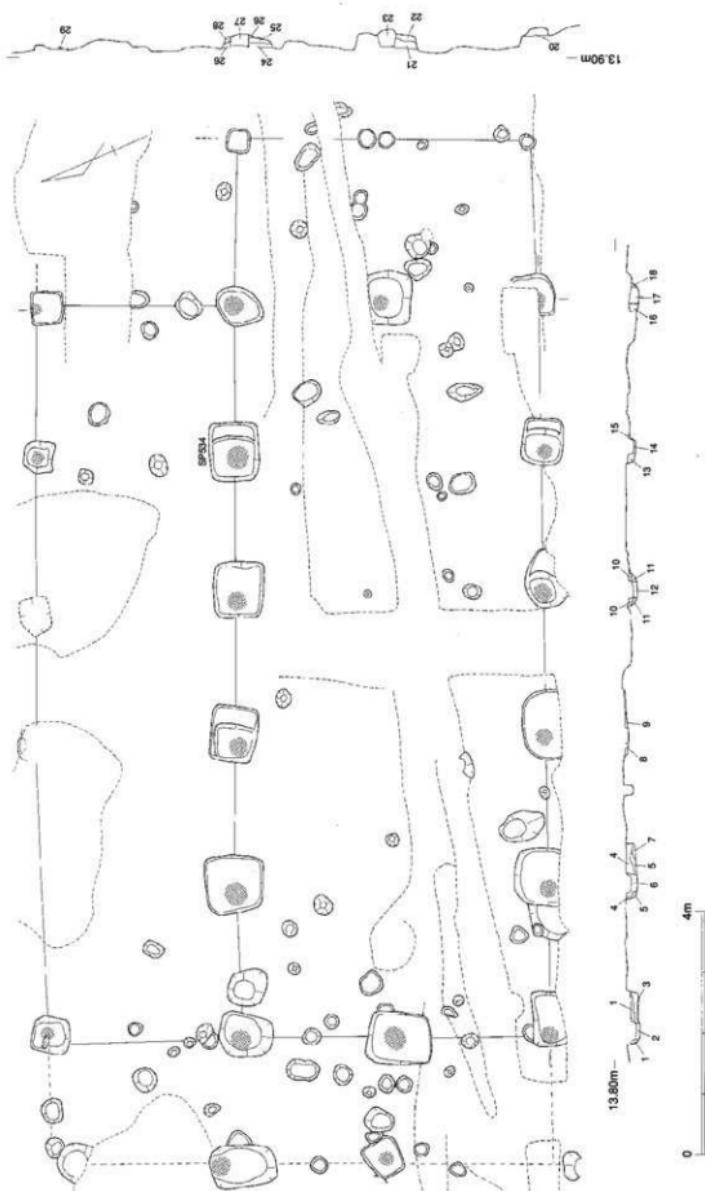
第38図 建物7・8平面・断面図（1/100）

2は、土師器碗の高台である。高台径は10.0cmに復元され、残存高は1.2cmをはかる。調整は明確ではないが、しっかりととした形状の高台となることから、10世紀以降と考えられる。

これ以外に、建物7の柱穴からは、黒色土器A類の破片が出土している。

建物8 調査区北部で検出した側柱建物で、ほぼ同じ主軸方向の建物7が北東3mのところに位置する。梁行2間(3.0m)、桁行3間(3.8m)で、建築面積は11.4m²をはかる。建物の主軸方

4. 第2期の遺構と遺物



第39図 建物9平面・断面図 (1/80)

1. 両側色粘土質土（やや砂質）少量の基礎層ブロック・少量の暗褐色粘土質土・暗褐色粘土質土を含む。
2. 両側色粘土質土 多量の基礎層ブロックを含む。
3. 両側色粘土質土
4. 両側色粘土質土 少量の基礎層ブロック・少量の暗褐色粘土質土を含む。
5. 両側色粘土質土 多量の暗褐色粘土質土・少量の基礎層ブロックを多く含む。
6. 両側色粘土質土 灰色灰質土を含む。
7. 両側色粘土質土 多量の基礎層ブロック・多量の暗褐色粘土質土・多量の基礎層ブロックを含む。
8. 両側色粘土質土 少量の暗褐色粘土質土・少量の基礎層ブロックを含む。
9. にごり・褐色の質土 基礎層ブロックを含む。
10. 両側色粘土質土 少量の基礎層ブロックを含む。
11. 両側色粘土質土 多量の基礎層ブロックを含む。
12. 両側色粘土質土
13. 両側色粘土質土 少量の基礎層ブロックを含む。
14. 両側色粘土質土
15. 両側色粘土質土 少量の基礎層ブロックを含む。
16. 両側色粘土質土 多量の基礎層ブロックを含む。
17. 両側色粘土質土 極少量の基礎層ブロック・少量の暗褐色粘土質土を含む。
18. 両側色粘土質土 少量の基礎層ブロック・暗褐色粘土質土を含む。
19. 両側色粘土質土 多量の基礎層ブロックを行なむ。
20. 両側色粘土質土 多量の基礎層ブロックを含む。
21. 両側色粘土質土 少量の基礎層ブロック・少量の暗褐色粘土質土を含む。
22. 両側色粘土質土 多量の基礎層ブロック・少量の暗褐色粘土質土を含む。
23. 両側色粘土質土 少量の暗褐色粘土質土を含む。
24. 両側色粘土質土 少量の基礎層ブロックを行なむ。
25. 両側色粘土質土 多量の基礎層ブロックを含む。
26. 両側色粘土質土 少量の基礎層ブロックを含む。
27. 両側色粘土質土 少量の基礎層ブロック・暗褐色粘土質土を含む。基礎層ブロックは他の外周に多い。
28. 両側色粘土質土 少量の基礎層ブロックを含む。
29. 両側色粘土質土 少量の基礎層ブロックを行なむ。

第39図 建物9土層注記

向は、N-64°-Eである。柱穴は方形状の平面形を呈し、

1辺0.7mをはかる。また、埋土の状況から、使用された柱は10~20cmで、規則性は認められない。桁行側の柱穴における柱芯の間隔は1.2~1.3m、梁行では1.5~1.6mをはかる。

なお、図化できた遺物は弥生土器と須恵器だけであったが、柱穴からは黒色土器A類の破片が出土していることから、9世紀以降の所産となる。

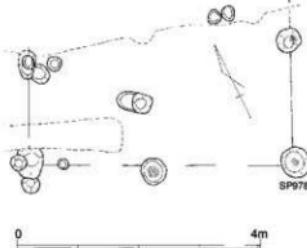
建物9 調査区北部で検出した梁行2間(5.0m)、桁行5間(12.0m)の身舎に、北側と東側に庇を持つ2面

庇建物である。北側の庇は幅3.1m、東側は2.7mをはかり、この部分を含めると、梁行8.1m、桁行14.7mとなる。身舎部分の建築面積は60m²で、庇部分を含めると119m²となる。なお、建物の東に位置する柱穴から、第39図に示すように庇が復元できる可能性もあるが、柱芯の通りがずれるので建物を構成する柱穴には加えなかった。

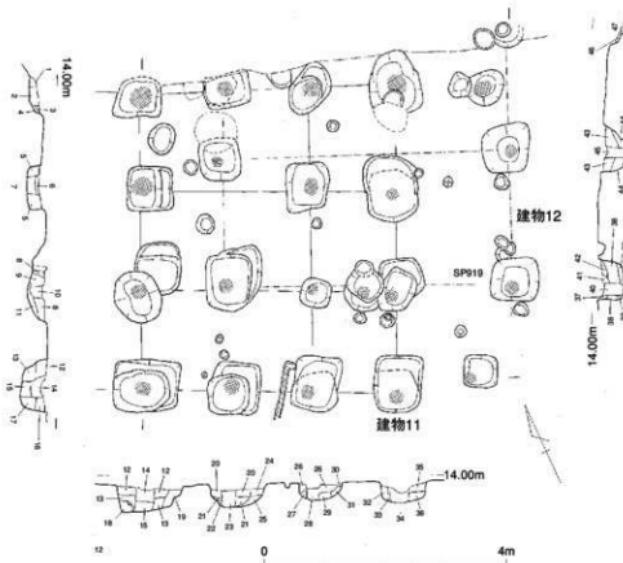
身舎部分の柱穴は1辺0.9m前後をはかり、方形状の平面形を呈する。また、埋土の状況から、使用された柱の直径は30~40cmと言える。桁行・梁行いずれの柱穴も柱芯の間隔は2.4~2.5mで、極めて精密に施工されている。一方、北面の庇に伴う柱穴は1辺0.6m、東面は0.4mの方形状の平面形を呈するように、庇側の柱穴は小さい。建物の主軸方向は、E-13°-Sである。

建物9のうちSP534の柱痕部分から、第43図に掲載した遺物が出土した。1は、土師器皿の口縁部である。口径17.7cmに復元され、残存高は1.1cmをはかる。端部内面には、沈線が施される。いわゆる、都城系の土師器皿である。2は、須恵器蓋の口縁部である。口径17.7cm、残存高1.5cmをはかる。その形態から環Bに伴うと考えられ、7世紀末に遡る。なお、他の柱穴から10世紀前半に下る遺物も出土しているので、これらは混入品と言える。

建物10 調査区北部で検出した梁行2間4.4m、桁行1間以上(2.0m以上)の側柱建物である。検出部分で建築面積8.8m²をはかるが、北側は調査区外に伸びると推測でき、これ以上の規模になる。建物の主軸方向はN-17°-Eで、建物9・11とほぼ同じである。しかし、柱穴は直径40~45cmの円形状の平面形を呈し、埋土の状況から使用された柱の直径は20cm前後で、建物9・11とは大きく異なる。建物10は、建物9~13と同じ群を構成するが、その規模、構造から補助的な家屋と考えられる。



第40図 建物10平面図(1/80)



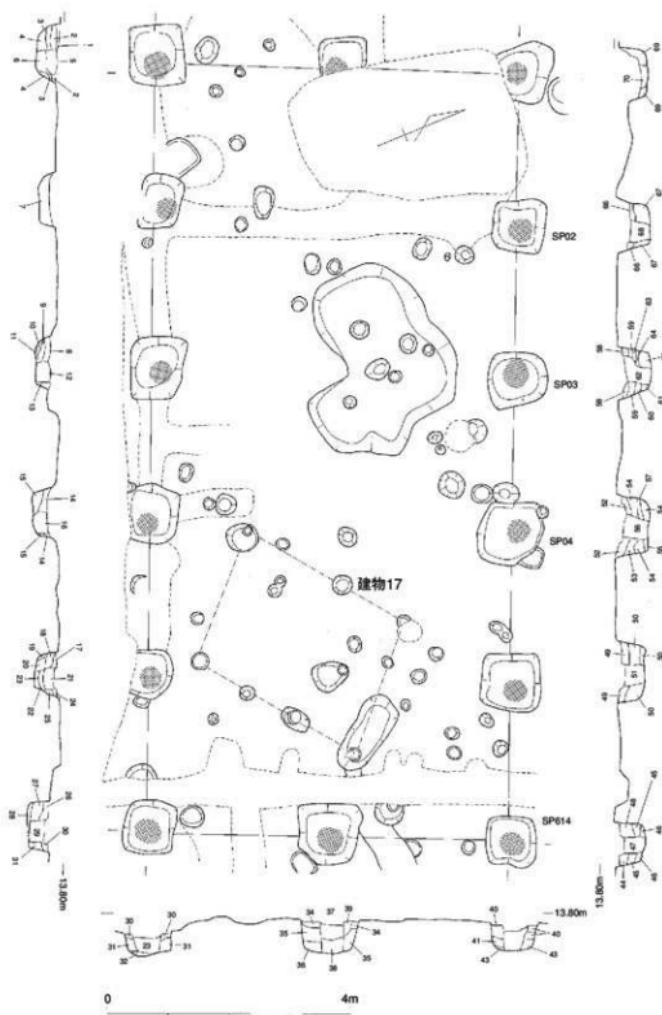
建物 11

1. 基礎壁ブロック 幾何学 磚合土 少量の須恵器灰土
2. 須恵器灰土 多量の須恵器灰土・少量基盤層ブロック
3. 须恵器灰土 少量の須恵器灰土・基礎壁ブロックを含む。
4. 须恵器灰土 少量の須恵器灰土・少量の基盤層ブロックを含む。
5. 须恵器灰土 少量の須恵器灰土・基礎壁ブロックを含む。
6. 须恵器灰土
7. 须恵器灰土 多量の須恵器灰土・少量の基盤層ブロックを含む。
8. 须恵器灰土 少量の基礎壁ブロックを含む。
9. 须恵器灰土 極少量の須恵器灰土を含む。
10. 须恵器灰土 少量の須恵器灰土・少量の基盤層ブロックを含む。
11. 须恵器灰土 少量の基礎層ブロックを含む。
12. 须恵器灰土 少量の須恵器灰土・少量の磚を含む。
13. 须恵器灰土 少量の須恵器灰土・多量の磚を含む。
14. 须恵器灰土 少量の須恵器灰土を作成。
15. 须恵器灰土 多量の須恵器灰土を含む。
16. 须恵器灰土 極少量の須恵器灰土・少量の基礎層ブロックを含む。
17. 须恵器灰土 少量の須恵器灰土・少量の基盤層ブロック・多量の磚を含む。
18. 须恵器灰土 少量の須恵器灰土・少量の基礎層ブロックを含む。多量の石・磚を含む。
19. 须恵器灰土 多量の基礎層ブロック・多量の磚を含む。
20. 须恵器灰土 须恵器灰土を作成。
21. 须恵器灰土 多量の須恵器灰土を含む。23層と24層間に、須恵器灰土が僅量に堆積する。
22. 须恵器灰土 多量の須恵器灰土を作成。
23. 须恵器灰土 少量の基礎層ブロックを含む。
24. 须恵器灰土 少量の基礎層ブロックを作成。
25. 基盤層ブロックに少量の須恵器灰土を作成。
26. 须恵器灰土 少量の須恵器灰土・極少量の基礎層ブロックを作成。
27. 须恵器灰土 基盤層ブロックを作成。
28. 须恵器灰土 多量の須恵器灰土を作成。
29. 须恵器灰土 少量の基礎層ブロックを作成。
30. 须恵器灰土 少量の須恵器灰土・極少量の基礎層ブロックを作成。
31. 须恵器灰土 極少量の須恵器灰土・少量の基礎層ブロックを作成。
32. 须恵器灰土 須恵器灰土・極少量の基礎層ブロックを作成。
33. 须恵器灰土
34. 须恵器灰土 多量の須恵器灰土・極少量の基礎層ブロックを作成。
35. 须恵器灰土 少量の須恵器灰土・少量の基礎層ブロックを作成。
36. 须恵器灰土 須恵器灰土を作成。
37. 须恵器灰土 少量の須恵器灰土・多量の基礎層ブロックを作成。
38. 须恵器灰土 少量の須恵器灰土・基礎層ブロックを作成。
39. 须恵器灰土 須恵器灰土・少量の基礎層ブロックを作成。
40. 须恵器灰土 多量の須恵器灰土・少量の基礎層ブロックを作成。
41. 须恵器灰土 少量の須恵器灰土・少量の基礎層ブロックを作成。
42. 须恵器灰土 少量の須恵器灰土を作成。
43. 须恵器灰土 少量の須恵器灰土・基礎層ブロック・多量の磚を作成。
44. 须恵器灰土 須恵器灰土・多量の基礎層ブロックを作成。
45. 须恵器灰土 多量の須恵器灰土を作成。
46. 须恵器灰土 須恵器灰土・基礎層ブロックを作成。
47. 须恵器灰土 多量の須恵器灰土を作成。
48. 基盤層ブロックに少量の須恵器灰土を作成。

第 41 図 建物 11・12 平面・断面図 (1/80)

第 43 図 3 は、SP978 から出土したものである。3 は、須恵器脚部で裾部径 14.2 cm、残存高 4.2 cm をはかる。古墳時代の所産となるが、これ以外に 8 世紀以降と考えられる土師器片も出土していることから、3 は混入品と言える。

建物 11 調査区北部で検出した南北 3 間 (4.8m)、東西 3 間 (4.2m) の総柱建物で、建築面積 20.2 m² をはかる。柱芯の間隔は南北で 1.4m 前後、東西で 1.2m 前後をはかる。建物の主軸方向は、



第42図 建物13・17平面・断面図(1/80)

4. 第2期の遺構と遺物

1. 暗赤色粘土質土 (やや砂質) 基礎層ブロック・少量の暗赤色粘土質土を含む。
2. 暗赤色粘土質土 (やや砂質) 基礎層ブロック・少量の暗赤色粘土質土を含む。
3. 暗赤色粘土質土 (やや砂質) 基礎層ブロック・暗赤色粘土質土を含む。
4. 暗赤色粘土質土 (やや砂質) 基礎層ブロックを含む。
5. 暗赤色粘土質土 (やや砂質) 基礎層ブロックを含む。
6. 暗赤色粘土質土 (やや砂質) 多量の暗赤色粘土質土を含む。
7. 暗赤色粘土質土 (やや砂質) 暗赤色粘土質土・少量の基礎層ブロック・暗赤色粘土質土を含む。層下段には、基礎層ブロック(やや砂質)。
8. 暗赤色粘土質土 (やや砂質) 暗赤色粘土質土・少量の暗赤色粘土質土を含む。
9. 暗赤色粘土質土 (やや砂質) 暗赤色粘土質土・基盤層ブロックを含む。
10. 暗赤色粘土質土 (やや砂質) 暗赤色粘土質土・礫を含む。
11. 暗赤色粘土質土 基礎層ブロックを含む。
12. 暗赤色粘土質土 (やや砂質) 暗赤色粘土質土・少量の暗赤色粘土質土を含む。
13. 暗赤色粘土質土 (やや砂質) 暗赤色粘土質土・少量の暗赤色粘土質土・基礎層ブロックを含む。
14. 暗赤色粘土質土 (やや砂質) 暗赤色粘土質土・多量の基礎層ブロック・少量の暗赤色粘土質土を含む。
15. 暗赤色粘土質土 (やや砂質) 稽留土・少量の暗赤色粘土質土・少量の暗赤色粘土質土を含む。
16. 暗赤色粘土質土 (やや砂質) 暗赤色粘土質土・少量の暗赤色粘土質土・明褐色シルト・ロックを含む。
17. 暗赤色粘土質土 (やや砂質) 暗赤色粘土質土・多量の基礎層ブロック・少量の暗赤色粘土質土を含む。
18. 暗赤色粘土質土 (やや砂質) 少量の暗赤色粘土質土を含む。
19. 暗赤色粘土質土 (やや砂質) 暗赤色粘土質土・多量の基礎層ブロック・少量の暗赤色粘土質土を含む。
20. 暗赤色粘土質土 (やや砂質) 暗赤色粘土質土・多量の基礎層ブロック・少量の暗赤色粘土質土を含む。
21. 暗赤色粘土質土 (やや砂質) 暗赤色粘土質土・少量の暗赤色粘土質土・基礎層ブロックを含む。
22. 暗赤色粘土質土 (やや砂質) 暗赤色粘土質土・少量の暗赤色粘土質土・多量の基礎層ブロックを含む。
23. 暗赤色 粘土質土 (やや砂質) 暗赤色粘土質土・極少量の暗赤色粘土質土・多量の基礎層ブロックを含む。礫を伴う。
24. 暗赤色粘土質土 (やや砂質) 暗赤色粘土質土を含む。
25. 暗赤色粘土質土 (やや砂質) 暗赤色粘土質土・多量の暗赤色粘土質土・基礎層ブロックを含む。
26. 明褐色粘土質土 (やや砂質) 暗赤色粘土質土・基礎層ブロック・少量の暗赤色粘土質土を含む。
27. オリーブ褐色粘土質土 (やや砂質) 基礎層ブロックを含む。
28. 基礎層ブロックに極少量の暗赤色粘土質土 (やや砂質) を含む。
29. 明褐色粘土質土 (やや砂質) 暗赤色粘土質土・少量の暗赤色粘土質土を含む。
30. 明褐色粘土質土 (やや砂質) 暗赤色粘土質土・基礎層ブロック・少量の暗赤色粘土質土を含む。
31. 暗赤色粘土質土 (やや砂質) 基礎層ブロックを含む。
32. 基礎層ブロックに少量の暗赤色粘土質土 (やや砂質) を含む。
33. 明褐色粘土質土 (やや砂質) 暗赤色粘土質土・少量の暗赤色粘土質土を含む。
34. 黒褐色粘土質土 (やや砂質) 暗赤色粘土質土・少量の暗赤色粘土質土を含む。
35. オリーブ褐色粘土質土 (やや砂質) 暗赤色粘土質土・多量の基礎層ブロック・少量の暗赤色粘土質土を含む。
36. オリーブ褐色粘土質土 (やや砂質) 暗赤色粘土質土・多量の基礎層ブロック・少量の暗赤色粘土質土を含む。
37. 暗赤色粘土質土 (やや砂質) 暗赤色粘土質土・少量の暗赤色粘土質土・基礎層ブロックを含む。
38. 黑褐色粘土質土 (やや砂質) 暗赤色粘土質土・少量の暗赤色粘土質土・基础層ブロックを含む。
39. 暗赤色粘土質土 (やや砂質) 基礎層ブロック・少量の暗赤色粘土質土・少量の暗赤色粘土質土を含む。
40. 暗赤色粘土質土 (やや砂質) 暗赤色粘土質土・基礎層ブロック・少量の暗赤色粘土質土を含む。
41. 暗赤色粘土質土 (やや砂質) 暗赤色粘土質土・基礎層ブロック・少量の暗赤色粘土質土を含む。
42. 暗赤色粘土質土 (やや砂質) 暗赤色粘土質土・基礎層ブロック・少量の暗赤色粘土質土を含む。
43. 暗赤色粘土質土 (やや砂質) 暗赤色粘土質土・基礎層ブロック・少量の暗赤色粘土質土を含む。
44. 暗赤色粘土質土 (やや砂質) 暗赤色粘土質土・基礎層ブロック・少量の暗赤色粘土質土を含む。
45. 暗赤色粘土質土 (やや砂質) 暗赤色粘土質土・基礎層ブロック・少量の暗赤色粘土質土を含む。
46. 暗赤色粘土質土 (やや砂質) 暗赤色粘土質土・基礎層ブロック・少量の暗赤色粘土質土を含む。
47. 暗赤色粘土質土 (やや砂質) 基礎層ブロック・暗赤色粘土質土を含む。
48. 暗赤色粘土質土 (やや砂質) 暗赤色粘土質土・基礎層ブロック・少量の暗赤色粘土質土を含む。
49. 暗赤色 粘土質土 (やや砂質) 暗赤色粘土質土・基礎層ブロック・少量の暗赤色粘土質土を含む。
50. 暗赤色粘土質土 (やや砂質) 暗赤色粘土質土・基礎層ブロック・少量の暗赤色粘土質土を含む。
51. 暗赤色粘土質土 (やや砂質) 暗赤色粘土質土・少量の暗赤色粘土質土を含む。
52. 暗赤色粘土質土 (やや砂質) 暗赤色粘土質土・少量の暗赤色粘土質土を含む。
53. 暗赤色粘土質土 (やや砂質) 暗赤色粘土質土・少量の暗赤色粘土質土・基礎層ブロックを含む。
54. 暗赤色 粘土質土 (やや砂質) 暗赤色粘土質土・暗赤色粘土質土・基礎層ブロックを含む。
55. 基礎層ブロックに少量の暗赤色粘土質土 (やや砂質) を含む。
56. 暗赤色粘土質土 (やや砂質) 暗赤色粘土質土・少量の暗赤色粘土質土・基礎層ブロックを含む。
57. 基礎層ブロックに黄褐色粘土質土 (やや砂質) を含む。
58. 黑褐色粘土質土 (やや砂質) 稽留土・基礎層ブロックを含む。
59. 暗赤色粘土質土 (やや砂質) 基礎層ブロック・暗赤色粘土質土を含む。
60. 暗赤色粘土質土 (やや砂質) 少量の暗赤色粘土質土を含む。
61. 暗赤色粘土質土 (やや砂質) 少量の暗赤色粘土質土を含む。
62. 暗赤色粘土質土 (やや砂質) 暗赤色粘土質土・少量の暗赤色粘土質土・基礎層ブロックを含む。
63. 暗赤色粘土質土 (やや砂質) 基礎層ブロック・灰褐色粘土質土を含む。
64. 暗赤色粘土質土 (やや砂質) 基礎層ブロック・少量の暗赤色粘土質土を含む。
65. 赤褐色粘土質土 基礎層ブロック・少量の暗赤色粘土質土・基礎層ブロック・少量の暗赤色粘土質土を含む。
66. 灰褐色粘土質土 (やや砂質) 土壌灰岩片を含む。
67. 暗赤色粘土質土 (やや砂質) 暗赤色粘土質土・少量の暗赤色粘土質土・基礎層ブロックを含む。
68. 暗赤色粘土質土 (やや砂質) 暗赤色粘土質土・少量の暗赤色粘土質土・少量の暗赤色粘土質土を含む。
69. 暗赤色粘土質土 (やや砂質) 暗赤色粘土質土・少量の暗赤色粘土質土・少量の暗赤色粘土質土・基礎層ブロックを含む。
70. 暗赤色粘土質土 (やや砂質) 暗赤色粘土質土・極少量の暗赤色粘土質土を含む。

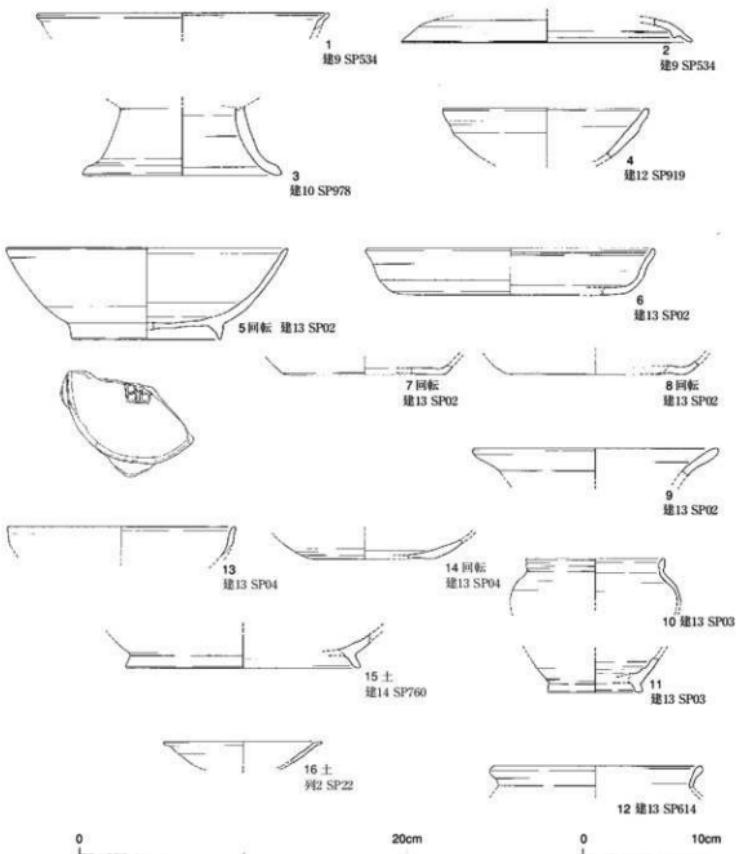
第42図 建物13土層注記

N-16°-Eである。柱穴は方形状の平面形を呈し、1辺0.7m前後をはかる。また、埋土の状況から、使用された柱の直径は20~30cmと言える。

柱穴のうち、南側と東側の列のものは重複しており、この部分の柱穴は差し替えられたか、あるいはほぼ同じ位置で建て替えが行われたと考えられる。また、建物11は建物12と重複するが、東柱の重複関係から建物11が建物12に先行する。

建物12 調査区北部で検出した梁行2間(4.7m)、桁行2間(4.7m)以上の側柱建物で、検出部分における建築面積は22.1m²をはかる。柱芯の間隔は梁行で2.2~2.5m、桁行で1.25~2.0mと規則性に欠ける。建物の主軸方向は、N-16°-Eである。柱穴は、方形状の平面形を呈し、1辺0.8m前後をはかる。また、埋土の状況から、使用された柱は直径20cm前後と言える。建物12は建物11と重複するが、東柱の重複関係から建物12は後に建てられたことが判明している。

4は、建物12のうちSP919の柱痕から出土したものである。4は土器師碗で、口径12.6cmに復元され、残存高3.0cmをはかる。内外面には、横方向のナデを施す。口径が小さく、小型の碗と



第43図 建物9・10～14・柱穴列2出土遺物（9～12：1/4 そのほか：1/3）

なる。10世紀頃の所産と考えられる。

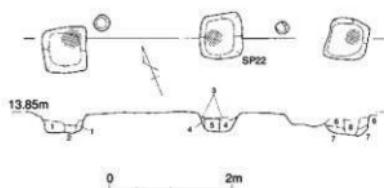
建物13 調査区北部で検出した梁行2間（6.0m）、桁行5間（12.6m）の側柱建物で、建築面積は75.6m²をはかる。柱芯の間隔は梁行で2.3～3.0m、桁行で2.4～2.8mと規則性に欠ける。建物の主軸方向は、N-13°-Eである。柱穴は、1辺1.0m前後をはかり、方形状の平面形を呈する。また、埋土の状況から、使用された柱の直径は30cm前後と言える。建物の南には、塀の可能性がある柱穴列2を伴う。

建物13のうち、SP2掘り方からは第43図5・9、柱痕からは同図6・7、また出土層位が不明である同図8が出土した。SP3掘り方からは同図14、同じく柱痕からは同図11、また出土位置が不明である同図10が出土した。SP4掘り方からは同図13が、SP614の柱痕からは同図12

が出土した。

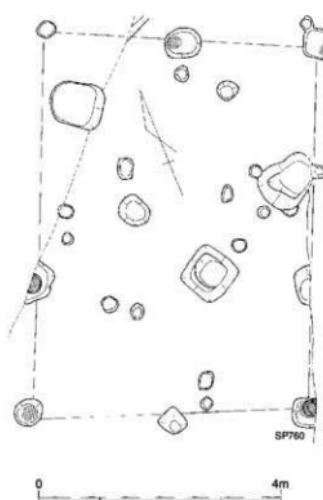
5は、回転台土師器碗である。口径17.0cm、高台径9.2cm、器高5.6cmをはかる。体部内面は横方向のナデを、見込みには板状工具で不定方向のナデを施す。また底部外面には回転ヘラケズリが施され、そのあとに高台が貼付けられる。高台内には、文字らしき線刻が刻まれている。生産地などの詳細は不明であるため、高台の形状から10世紀の所産と推定するだけにとどまる。6は土師器皿で、口径は17.4cmに復元され、器高2.9cmをはかる。口縁部の内外面は横方向のナデが、

また口縁端部の内側には沈線が施される。底部には、手づくね成形後の調整は認められない。いわゆる都城系の土師器であり、混入品と言える。



1. 基盤ブロックに灰褐色粘土を含む。
2. 灰色粘土(やや砂質) 灰褐色粘土・少量の青褐色粘土ブロックを含む。
3. 灰色粘土(やや砂質) 灰褐色粘土・少量の青褐色粘土ブロックを含む。
4. 基盤ブロック(少量) 灰褐色粘土・青褐色粘土を含む。
5. 青褐色粘土(やや砂質) 灰褐色粘土・少量の青褐色粘土を含む。
6. 明る黄色粘土(やや砂質) 灰褐色粘土・基盤ブロック・少量の青褐色粘土を含む。
7. 明る黄色粘土(やや砂質) 灰褐色粘土・多量の基盤ブロック・少量の青褐色粘土を含む。
8. 明る黄色粘土(やや砂質) 灰褐色粘土・少量の青褐色粘土を含む。肩下部に明褐色粘土が確認される。

第44図 柱穴列2平面・断面図（1/80）



第45図 建物14平面図（1/80）

7・8は、回転台土師器壺の底部である。7の底部径は9.8cmに復元され、残存高0.6cmをはかる。底部外面には、ヘラ切り痕らしき痕跡が認められる。8の底部径は11.0cmに復元され、残存高0.9cmをはかる。体部の内外面には回転ナデが施され、底部外面は回転糸切りの痕跡が認められる。

9は、須恵器壺の口縁部である。口径20.0cm、残存高2.5cmをはかる。内外面は、ともに回転ナデで仕上げられる。10は須恵器短頸壺で、

口径は8.4cmに復元され、残存高2.6cmをはかるとおり、小型の部類に属する。内外面はともに回転ナデを施し、平滑に仕上げられ、器壁も2mm前後と薄い。肩が張った器形で、9世紀後半の所産と言える。11は、須恵器壺の底部である。高台径は7.7cmに復元され、残存高3.0cmをはかる。内外面はともに回転ナデを施すが、内面は起伏に富む。高台は、底部外周に貼付けられる。12は、須恵器短頸壺の口縁部である。口径は17.4cmに復元され、残存高2.0cmをはかる。内外面はともに回転ナデを施し、口縁端部は玉縁状に肥厚する。

13の土師器皿は、口径13.8cmに復元され、残存高1.6cmをはかる。内外面は、ともに横方向のナデを施し、端部はやや外反する。いわゆる都城系の土師器と言える。14は、回転台土師器壺の底部である。底部径は7.4cmに復元され、残存高2.2cmをはかる。体部外面は、回転ヘラケズリを施す。底部内面は不明瞭である

が、ヘラミガキで仕上げた可能性もある。底部外面には、回転台系切りの痕跡が認められる。体部は、やや内反気味に立ち上がる。10世紀の所産と考えられる。

これらの遺物をみると、柱穴掘り方から10世紀の遺物が多く出土するとおり、建物13の建築時期は10世紀と考える。

柱穴列2 建物13の南側2.4mのところで検出された、3基の柱穴からなる柱穴列で、全長4.6mをはかる。柱穴列の南側は擾乱されているため、柱穴の存否は確認できないが、建物になる可能性は乏しいと考えられる。柱穴列の主軸方向はE-14°-Sで、建物13と平行する。柱穴は、直径65cm前後をはかる円形状の平面形を呈する。埋土の状況から、使用された柱の直径は20~25cm前後と考えられる。列2のうちSP22の掘り方から、第43図16が出土した。16は土師器皿で口径9.8cm、残存高1.4cmをはかる。口縁部はほぼ水平近くに屈曲し、端部は上方につまみ上げられる。いわゆる「て」の字状口縁の形態を呈する。10世紀後半の所産と言える。なお、これ以外にも、10世紀前後の黒色土器が出土している。

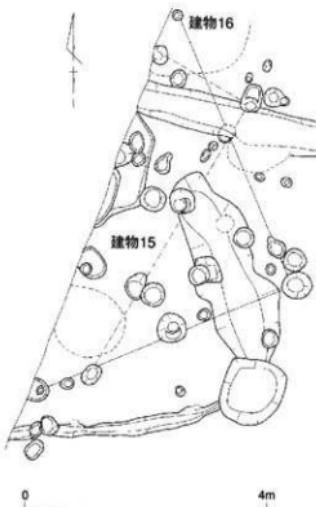
建物14 調査区東部で検出した梁行2間(3.4m)、桁行3間(4.45m)の側柱建物で、建築面積15.1m²をはかる。建物の主軸方向は、N-14°-Eである。柱芯の間隔は梁行で2.5m前後、桁行で2.1m前後をはかる。柱穴は1辺0.4~0.5mをはかり、隅丸方形状の平面形を呈する。また、埋土の状況から、使用された柱の直径は20cm前後と言える。四隅の柱穴は、他の柱穴より12cm前後深い。

建物14のうち、SP740から第43図15が出土している。15は土師器碗の高台部である。高台径14.4cmに復元され、器高2.05cmをはかる。風化により、調整は不明である。高台はやや外側に開く形状を呈し、その形状から10世紀頃の所産と考えられる。

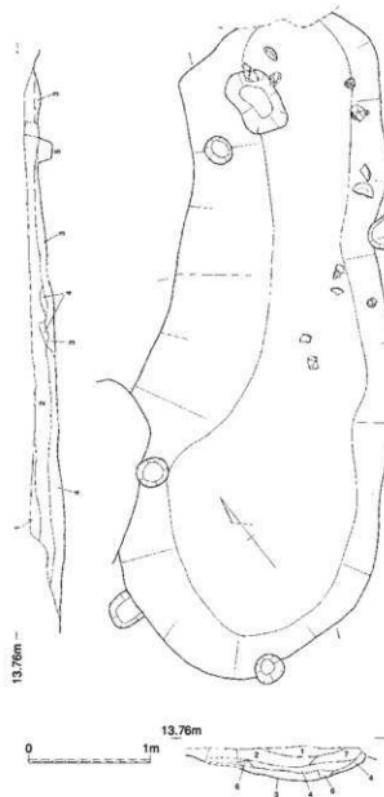
建物14の主軸方向は建物9~13と同じであることから、これらの建物と同じ時期の所産と考える。ただし、建物14は大型建物群の南限を区切ると考えられる溝6の南に位置することから、同じ建物群を構成するものではなく、その周辺に展開する別の建物群と位置付けられる。

建物15 調査区西部で検出した桁行4間(6.7m)、梁行1間以上(1.7m以上)の側柱建物と考えられる建物である。建物の西側は調査区外に広がるが、検出部分から建築面積は11.4m²以上になると推定できる。建物の主軸方向は、N-22°-Eである。柱芯の間隔は、桁行で1.6~1.8mと規則性にかける。柱穴は1辺0.35~0.45mをはかり、隅丸方形状の平面形を呈する。また、埋土の状況から、使用された柱の直径は15~20cmと言える。柱穴から黒色土器A類の破片が出土していることから、10世紀頃の所産となる可能性がある。

建物16 東側で2間以上(4.8m以上)、南側で2間以上(4.5m以上)となる掘立柱建物であ



第46図 建物15・16平面図(1/80)



1. 單調色粘質土 (やや6例)
2. 單調色粘質土 (やや6例) 單調色粘質土ブロックを含む。
3. 灰色粘質土 多量の基礎骨ブロックを含む。
4. 單調色粘質土 炭化物を含む。
5. 基礎骨ブロックのみ調色粘質土を含む。
6. 單調色粘質土 炭化物を含む。
7. 單調色粘質土

第47図 土坑7平面・断面図(1/40)

柱穴からなる柱穴列で、全長3.3mをはかる。柱穴列の南側は調査区外になるため、建物の可能性も残る。柱穴列の主軸方向はE-0°-Sである。柱穴は、一辺40~55cmをはかり、方形状の平面形を呈する。埋土の状況から、使用された柱の直径は17~25cmと言える。柱穴から黒色土器A類の破片が出土していることから、9~10世紀頃の所産となる可能性がある。

土坑7 調査区東部で検出した、不整橢円形の平面形を呈する土坑である。長軸長5.5m、幅2.0m、深さ0.25mをはかる。N-44°-Eを主軸とする。堆積土には、基盤層が多く含まれると共に、炭化物が多く堆積する中層からは土器が比較的まとまって出土した。この層を基準に、出土した遺

る。建物の西側は調査区外に広がると考えられ、検出部分から建築面積は21.6m²以上になると推定される。建物の主軸方向は、N-57°-Eである。柱穴は直径0.5mをはかり、円形状の平面形を呈する。また、埋土の状況や柱痕の痕跡から、使用された柱の直径は20cm前後と言える。東辺の柱穴は、他の遺構や擾乱によって削平されており、残存状態はあまり良好ではない。

建物16のうち、SP280から第37図6・7が出土した。6は、黒色土器A類碗の高台である。高台径8.2cmに復元され、残存高1.0cmをはかる。高台部は横方向のナデを、底部内面にはヘラミガキが施される。10世紀の所産と考えられる。7は、土師器甕である。口径は13.5cmに復元され、残存高4.4cmをはかる。口縁部は外反気味に立ち上がり、体部は球胴形を呈すると推定される。口縁部外面は横方向のナデを、内面は板状工具で横方向のナデを施す。器壁は剥離しているため、体部外側の調整は不明である。胎土は褐色を呈し、他地域産と想定される。

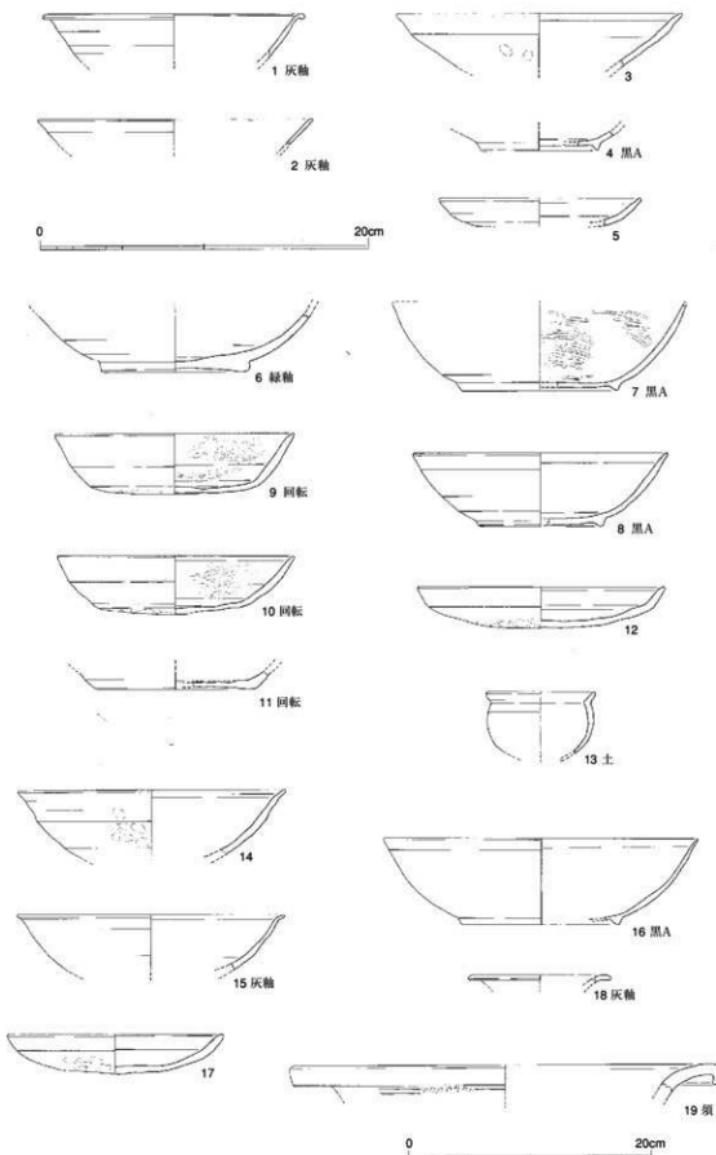
建物17 調査区北部で検出した建物ではあるが、柱芯の間隔は不規則で、芯通りも悪い上、柱穴の規模・形状も共通していないなどの問題はあるが、建物として扱った。

梁行1間(2.3m)、桁行3間(3.0m)の側柱建物で、建築面積は6.9m²をはかる。建物の主軸方向は、N-16°-Eである。

柱穴列3 調査区南西端で検出した3基の

柱穴からなる柱穴列で、全長3.3mをはかる。柱穴列の南側は調査区外になるため、建物の可能性も残る。柱穴列の主軸方向はE-0°-Sである。柱穴は、一辺40~55cmをはかり、方形状の平面形を呈する。埋土の状況から、使用された柱の直径は17~25cmと言える。柱穴から黒色土器A類の破片が出土していることから、9~10世紀頃の所産となる可能性がある。

土坑7 調査区東部で検出した、不整橢円形の平面形を呈する土坑である。長軸長5.5m、幅2.0m、深さ0.25mをはかる。N-44°-Eを主軸とする。堆積土には、基盤層が多く含まれると共に、炭化物が多く堆積する中層からは土器が比較的まとまって出土した。この層を基準に、出土した遺



第48図 土坑7出土遺物 (1~17: 1/3 18・19: 1/4)

物は3層にわけて第48図に掲載した。1～5は上層、6～13は中層、14～19は下層から出土した。

上層遺物 1・2は、灰釉陶器碗である。1は口径15.4cmに復元され、残存高2.4cmをはかる。口縁端部は水平近くまで屈曲し、玉縁状に肥厚する。器壁は3mm前後と薄い。2は口径16.6cmに復元され、残存高1.7cmをはかる。口縁部は、体部から直線的に伸びる。器壁は2mm前後と薄い。残存部が少なく判然としないが、黒窯90号窯式と考えられる。

3は、土師器碗である。口径は17.2cmに復元され、残存高3.3cmをはかる。口縁部の内外面には横方向のナデ、体部の内面は不定方向のナデを施し、外面には押圧痕が残る。体部は、直線的に立ち上がる。4は、黒色土器A類碗の底部である。高台径は7.4cmに復元され、残存高1.2cmをはかる。風化により、内外面の調整は不明である。底部には断面三角形状の高台が貼付けられる。

5は、土師器皿である。口径12.4cmに復元され、残存高2.1cmをはかる。残存高から、器高は2.5cm程度と推定される。口縁部の内外面に、横方向のナデを施す。

中層遺物 6は京都産の綠釉陶器碗で、胎土は軟質である。高台径は9.1cm、残存高3.6cmをはかる。円盤状の削り出し高台と、全面に施釉することを特徴とする。内面には、かろうじてヘラミガキが見られる。9世紀後半の所産である。

7・8は、黒色土器A類碗である。7の高台径は9.6cmに復元され、残存高5.3cmをはかる。残存部分から口径は18cm程度、器高5.5cm前後と推定できる。环型の器形を呈し、底部には断面三角形の高台が貼付けられる。内面にはヘラミガキが、外面のうち口縁部には横方向のナデが施される。風化のため、体部外面の調整は不明である。8は、口径15.4cm、高台径8.2cmに復元され、器高4.5cmをはかる。風化により内外面の調整は不明である。环型の器形を呈し、やや丸みを帯びた底部に、少し幅のある高台が貼付けられている。

9～11は、回転台上師器環である。9は口径14.4cm、底部径10.0cmに復元され、器高3.7cmをはかる。口縁部から体部は、横方向のナデを「の」の字状に施す。底部外面には、押圧痕がある。底部に体部が接合されて、成形されたと考えられる。10は口径14.4cm、底部径9.4cmに復元され、器高3.6cmをはかる。調整等は9とほぼ共通するが、見込み部分には不定方向のナデが施される。11の底部径は9.8cmに復元され、器高1.0cmをはかる。底部外面はナデを施し、切り離し痕を丁寧に消している。体部の外面には、回転ナデが確認できる。

9・10は、一見して手づくり成形のように見えるが、このような器形は手づくり成形技法で作られたものではない。また、胎土も硬質であることから、回転台成形後に手づくり技法で調整したと考えられる。同種の回転台上師器は、曾根遺跡第5次調査区の井戸下層遺物にもみられ、9はこれらと法量・器形が共通することから、同じ時期の所産と言える。一方、10は底部から体部へ緩やかに立ち上がり、口径に対する底部径の比率が小さいことから、曾根遺跡第5次調査のものより新しいと言える。よって、9は9世紀末～10世紀初め、10は10世紀前半の所産と言える。

12は、土師器皿である。口径は15.0cmに復元され、器高2.5cmをはかる。口縁部は横方向のナデを施し、底部外面には押圧痕がみられる。明らかに、手づくり成形によるものである。

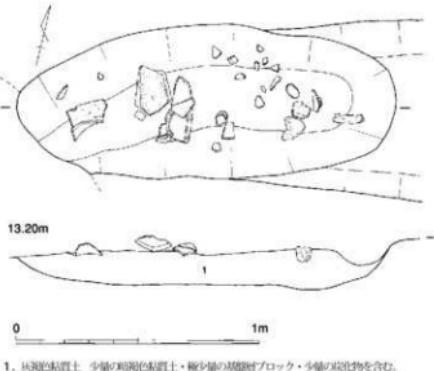
13は、土師器ミニチュア壺である。口径は6.6cmに復元され、残存高3.8cmをはかる。口縁部は横方向のナデを、体部内外面には丁寧なナデを施す。

下層遺物 14は、土師器碗である。口径は16.4cmに復元され、残存高4.2cmをはかる。口縁部

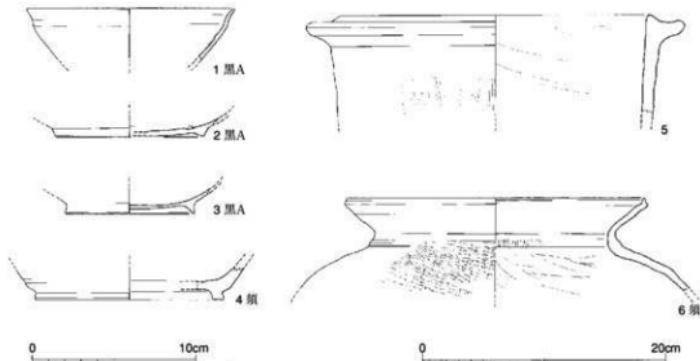
から体部内面は横方向のナデを施し、体部外面には押圧痕が残る。15は、灰釉陶器碗である。口径は16.2cmに復元され、残存高3.5cmをはかる。口縁端部は外反し、器壁は3mm前後と薄い。黒窯90号窯式に比定でき、9世紀後半の所産となる。16は、黒色土器A類碗である。口径19.4cm、高台径9.6cmに復元され、器高5.3cmをはかる。風化により、内外面の調整は不明である。环型の器形を呈し、底部には断面三角形状の高台が貼付けられている。17は、土器皿である。口径は13.0cmに復元され、器高2.5cmをはかる。口縁部には横方向のナデを、底部内面には不定方向のナデを施し、底部外面には押圧痕が残る。

18は、灰釉陶器小型壺の口縁部と考えられる。残存部分が少ないため、器種の詳細は明確にはできない。口径は8.8cmに復元でき、残存高0.5cmをはかる。口縁部には、横方向のナデが施される。19は、須恵器壺の口縁部である。口径は35.4cmに復元され、残存高1.7cmをはかる。口縁端部は垂下し、幅広い側面を形成する。口縁部から頸部にかけて回転ナデが施されるが、頸部の一部にはタタキ痕が残る。

以上、土坑7の遺物を3層に区分したが、このうち中層は9世紀後半から10世紀前半、下層は9世紀後半の所産となる。また、上層は9世紀後半から10世紀の遺物が混在するが、10世紀後半に下る可能性はない。このように、土坑7は9世紀後半から10世紀前半の幅で機能したと推定でき、溝6に先行すると言える。



第49図 土坑8平面・断面図（1/20）

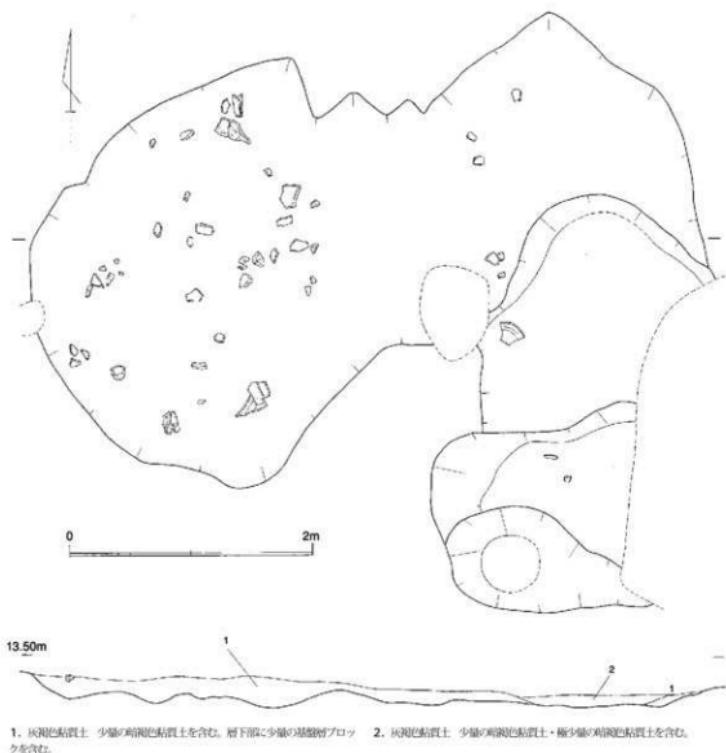


第50図 土坑8出土遺物（1～4：1/3 5・6：1/4）

土坑8 調査区西部において、溝7と重複する状態で検出した。東西長3.1m、南北長1.2m、深さ20cmをはかる楕円形状の平面形を呈する土坑である。土坑の主軸方向はN-73°-Eであり、溝7と同じ方向を主軸とする。埋土には特に大きな特徴はないが、上層に遺物が多く含まれる。

土坑8からは、第50図の遺物が出土した。1～3は黒色土器A類碗である。1は口径12.4cm、残存高3.4cmをはかる。口縁部外面には横方向のナデを、内面はヘラミガキを施す。体部外面は剥離しているため、調整は不明である。やや内反気味の体部から、口縁部が外反気味に立ち上がる碗状の器形を呈する。剥離した分を含めて、器壁は薄い。2の高台径は8.0cmに復元され、残存高1.3cmをはかる。底部には、断面三角形状の高台を貼付ける。風化により、内外面の調整は明確ではない。3は高台径8.0cmに復元され、残存高1.4cmをはかる。風化により、内外面の調整は明確ではない。底部には、断面三角形状を呈するしっかりとした高台を貼付ける。

4は、須恵器環Bの底部である。高台径11.6cm、残存高2.0cmをはかる。体部から底部にかけ回転ナデを施した後、底部外周からやや内側のところに断面四角形状の高台を貼付ける。見込み



第51図 土坑9平面・断面図（1/40）

は、一定方向のナデで仕上げる。混入品の可能性がある。

5は、土師器羽釜である。口径は25.4cmに復元され、残存高8.3cmをはかる。口縁端部の直下に鈴を貼付け、その上面は受け部状に凹む。口縁部から鈴にかけては横方向のナデを、体部外面には縦方向のハケを、内面には横方向に板状工具でナデを施す。

6は、須恵器甕の口頸部である。口径24.4cm、残存高7.8cmをはかる。口縁部から頸部にかけては横方向のナデを、体部内面には板状工具によるナデを施すが、頸部内面の一部に当て具痕が残る。体部外面には、格子目状のタタキ痕が残る。口縁端部はつまみ上げられ、断面は三角形状に肥厚する。

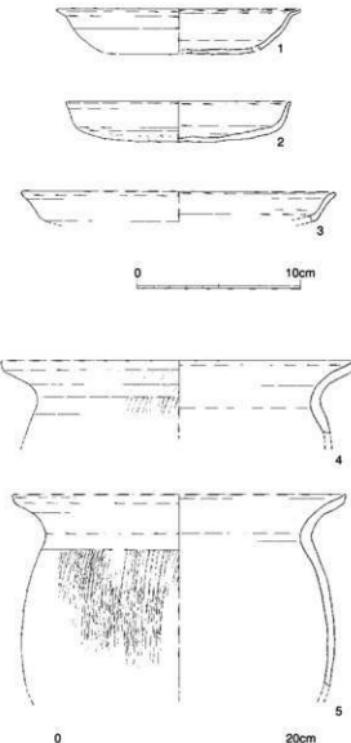
以上、黒色土器からみて、土坑8の時期は10世紀前半を中心とするが、摂津型羽釜(5)の時期次第で、これより新しくなる可能性もある。ところで、土坑8は8世紀から10世紀に機能した溝7の中に掘削されており、また主軸方向も同じであることから、これに関連すると考えられる。

土坑9 調査区北部において、建物13と重複

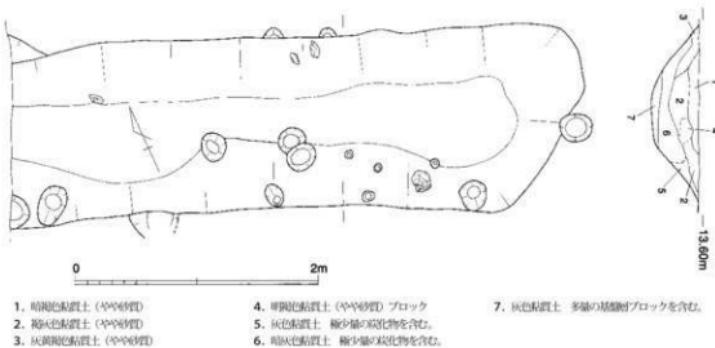
する状態で検出した。東西5.5m、南北2~3m、深さ10cm前後をはかる不整形状の土坑である。検出面からなだらかに落ち込むことから、人為的な遺構とは考えにくい。埋土中から、遺物が多く出土した。

土坑9からは、第52図の遺物が出土した。1は、京都系土師器皿である。口径は15.0cmに復元され、器高2.8cmをはかる。口縁部は水平方向に屈曲し、端部はつまみ上げられる。いわゆる「て」の字状の形態を呈する。器壁の厚さは、2~3mmと薄い。口縁部は横方向のナデを施し、底部外面には押圧痕がみられる。2は、在地産の土師器皿である。平坦な底部から、口縁部が直立する。口縁部の内外面は、横方向のナデを施す。底部の外面には、押圧痕がみられる。3は、いわゆる都城系の土師器皿である。口径19.4cmに復元され、残存高1.9cmをはかる。口縁部の内外面は、横方向のナデを施す。また、端部内面には、沈線が巡らされる。

4・5は、土師器甕である。4は口径29.4cmに復元され、残存高6.1cmをはかる。調整等の特徴は、後に述べる5と同じである。5は口径27.4cmに復元され、残存高15.8cmをはかる。口縁部は外反し、端部の側面は強いナデが施され、上端はつき上がるよう伸びる。口縁部外面には横方向のナデを、体部外面には縦方向のハケが施され



第52図 土坑9出土遺物
(1~3: 1/3 4・5: 1/4)



第53図 溝6平面・断面図 (1/40)

る。内面は風化しているため、調整は不明である。

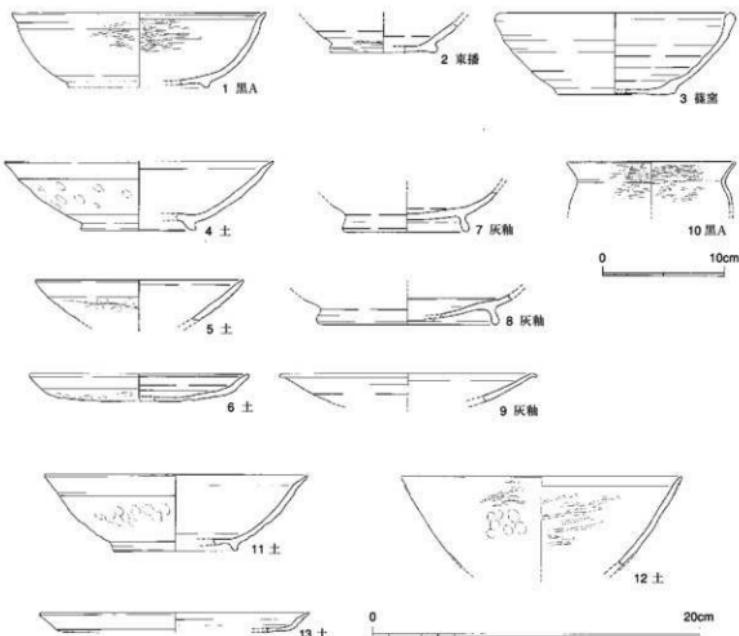
これらの遺物で時期が明確に比定できるものは限定されるが、1は10世紀前半となる。このことから、土坑9は大型建物群に伴う遺構となる可能性がある。

溝6 調査区西部の北端付近で検出した。幅1.1m、深さ0.4m前後をはかる。溝は、調査区の西端から4.7mのところで途絶することから、水路として機能した可能性はない。また、溝の方向は、調査区北部に展開する建物9～13の主軸方向と同じである。土坑の埋土は4層に区分でき、このうち上層と中層の層境から、比較的まとまった量の遺物が出土した。なお、調査時に溝6と土坑7を同じ遺構として扱ったため、土坑7の遺物が混入している可能性がある。

出土した遺物は、第54図に掲載した。最上層から出土した遺物（最上層出土遺物）は1～3で、上層と中層の層境部分のもの（上層出土遺物）は4～10、下層から最下層のもの（下層出土遺物）は11～14である。

最上層出土遺物 1は、黒色土器A類碗である。口径は13.8cm、高台径は8.6cmに復元され、器高4.6cmをはかる。口縁部の内面にはス線が施され、端部はやや外反する。底部には、断面台形状を呈する高台が貼付けられる。口縁部外面には横方向のナデを、内面および体部外面には横方向のヘラミガキを施す。2は、東播系須恵器碗の底部である。底部径6.5cmに復元され、残存高1.8cmをはかる。やや扁平な円盤状高台は、体部下端から下にむかって拡張される。底部外面には、糸切り痕が残る。3は、篠窯産須恵器鉢である。口径18.7cm、底部径10.0cmに復元され、器高6.6cmをはかる。器壁は7mm前後と分厚く、玉縁状に肥厚した口縁部との境界は不明瞭になっている。体部内外面および底部内面は、回転ナデが施される。底部外面は、糸切り後にその痕跡を板状工具ですり消している。これらの遺物は、11世紀前半の所産である。

上層出土遺物 4・5は、土師器碗である。4の口径は16.4cm、高台径は7.0cmに復元され、器高4.3cmをはかる。口縁部には強いナデを、内面には横方向のナデを施すが、体部外面には押圧痕が残る。底部外周からやや内側のところに、断面台形状の高台が貼付けられる。5の口径は12.8cmに復元され、残存高2.5cmをはかる。口縁部から内面は横方向のナデが施されるものの、体部外面には押圧痕と粘土紐の接合部が残る。6は、土師器皿である。口径は13.4cmに復元され、



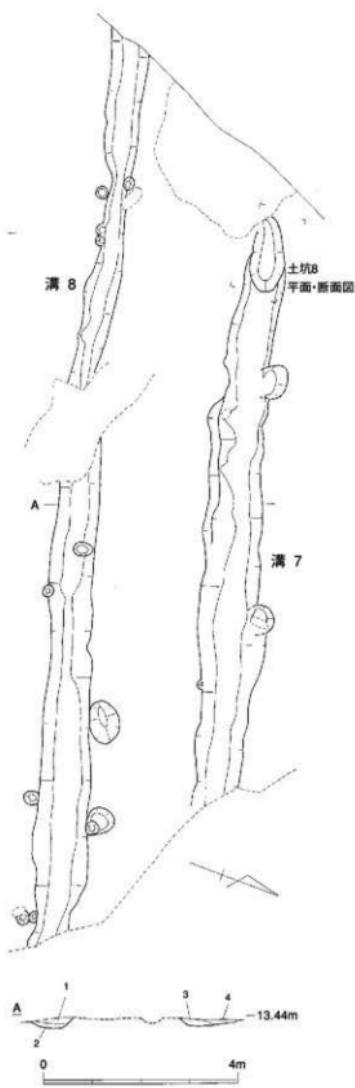
第54図 溝6出土遺物（3・10：1/4 それ以外：1/3）

器高 1.75 cm をはかる。口縁部から体部にかけて、横方向のナデを施す。底部の内面もナデと考えられるが、風化しているため、その方向は判然としない。底部外面には、押圧痕が残る。

7・8は、灰釉陶器碗の底部である。7は高台径 7.6 cm に復元され、残存高 2.6 cm をはかる。底部内面には、釉薬が付着する。調整は明確ではないが、回転ナデを施したと考えられる。高台はナデにより、丸みを帯びる。底部外面には、付け掛けの痕跡がみられることから、折戸 53号窯式に比定できる。8の高台径は 11.2 cm に復元され、残存高 1.9 cm をはかる。底部にはナデによって内反気味に仕上げられた高台が貼付けられる。底部内面には、重ね焼き時の痕跡が確認できる。残存部分が少ないとから、施釉方法は確認できないが、8と同じく折戸 53号窯式と考えられる。9は、灰釉陶器皿である。口径は 15.2 cm に復元され、残存高 1.7 cm をはかる。釉薬は剥離しているため、施釉方法は確認できない。口縁端部は水平近くまで屈折するが、肥厚しない。口縁部付近の器壁は、厚さ 2 mm 程度と非常に薄い。外面には、回転ナデが施される。

10は、黒色土器 A類の甕である。口径は 13.6 cm に復元され、残存高 3.6 cm をはかる。内外面は、横方向のヘラミガキを施す。口縁部は、やや外反気味に立ち上がる。口縁部・体部の器壁は 2 mm 前後と薄く、また均質に仕上げられている。

これらの遺物のうち、特に 7・8は 10世紀前半に比定できる。また 9は、やや古い様相を示す



1. 从褐色粘土 少量の暗褐色粘土を含む。
2. 从褐色粘土 少量の暗褐色粘土・微少量の基盤層ブロックを含む。
3. 从褐色粘土 多量の基盤層ブロックを含む。
4. 从褐色粘土 少量の暗褐色粘土・基盤層ブロック・極少量の暗褐色粘土などを含む。

第55図 溝7・8平面・断面図 (1/100)

ことから、混入品の可能性もある。

下層出土遺物 11・12は、土師器碗である。11の口径は16.0cm、高台径は7.6cmに復元され、器高4.8cmをはかる。体部内面から口縁部は横方向のナデを、底部内面には不定方向のナデが施される。体部外面には、押圧痕が残る。底部には断面台形状の高台がしっかりと貼付けられる。12の口径は17.2cmに復元され、残存高5.7cmをはかるため、鉢の可能性もある。口縁部の内面には横方向のナデが、体部は横方向のヘラミガキが施される。13は、土師器皿である。口径は16.6cmに復元され、器高1.2cmをはかる。口縁部付近は横方向のナデを施すが、底部の調整は不明である。

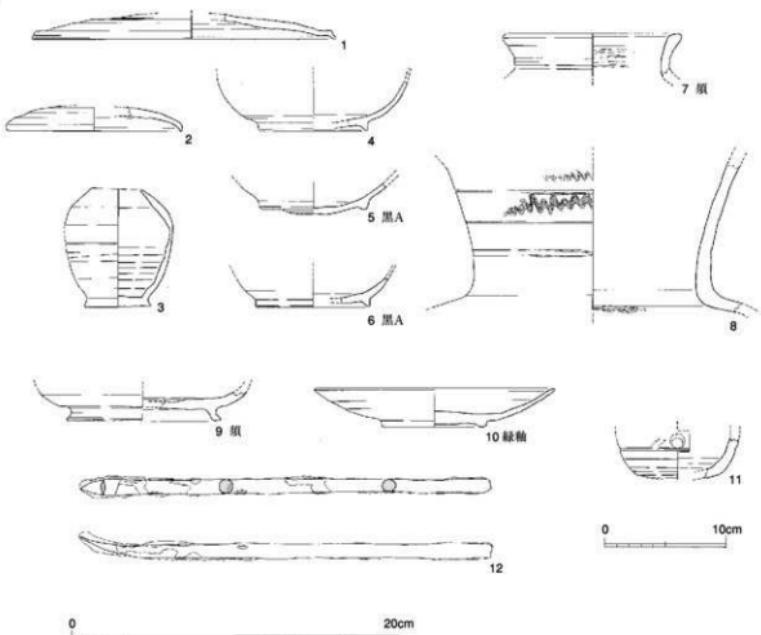
これらの遺物に時期を特定できるものはないが、11の形態は4と大きく変わらないので、それほど時期差があるようには考えにくい。

以上、溝6から出土した遺物をみると、最上層出土遺物は11世紀前半であり、溝6の廃絶はこの時期に求められる。また、上層・下層遺物にはあまり時期差ではなく、このうち上層は10世紀前半となる。一方、先行する土坑7は9世紀後半から10世紀前半までなので、これが埋没して間もない時期に溝6は掘削されたと考えられる。

ところで、溝6は大型建物群と主軸方向を同じくし、その南限を区切る位置にあることから、建物群を区画する機能があったと考えられる。また10世紀前半に掘削され、11世紀前半に継続する点についても、大型建物群の時期と大きく変わらないことから、一連の遺構として位置付けられる。

溝7・8 溝7と溝8は、調査区東部で検出した。南西から北東に向かって、2.2m程度の間隔を保つて直線的に並走する。

溝7は幅1m前後、深さ0.2m前後、溝8は幅1.1m前後、深さ15cm前後をはかる。溝7・8はともにN-73°-Eであるが、これは建物1・4・5・14・15の主軸方向と平行する。よって、大型建物出現以前の建物と溝7・8は、相互に影響を与える



第56図 溝7・8出土遺物（1～6・9・10・12：1/3 7・8・11：1/4）

関係にあったと想定できる。

溝7出土遺物 溝7からは、第56図1～8が出土した。1・2は、須恵器壺Bの蓋である。1は口径13.8cmに復元され、残存高1.5cmをはかる。天井部外面は回転ヘラケズリを、それ以外は回転ナデを施す。口縁端部は垂下し、その側面は強いナデによってやや凹む。2の口径は10.8cm、残存高1.4cmをはかる。口縁端部は垂下するように肥厚し、その側面は平坦に成形される。内外面は、ともに回転ナデを施す。

3は、須恵器小型壺である。体部上端の器壁は極めて薄く、また上端は平坦面を形成することから、無頸壺となる可能性がある。底部径4.0cm、残存高7.3cmをはかる。体部の内外面には回転ナデを施し、底部外面には回転糸切り痕が見える。

4は、土師器碗である。高台径は6.8cmに復元され、残存高3.1cmをはかる。底部には、断面三角形状を呈する高めの高台が貼付けられている。体部は内反するように立ち上がり、碗状の器形を呈する。なお、風化により、内外面の調整は不明である。

5・6は、黒色土器A類碗である。5の底部径は6.8cmに復元され、残存高2.0cmをはかる。断面台形状を呈する高台を、丸みを帯びた底部外周に貼付けるが、高台の疊付けは底部中央より高いところにあって接地しない。6は高台径6.8cmに復元され、残存高1.8cmをはかる。高台径が小さ

く、底部は内反気味に立ち上がることから、碗状の器形と推定される。風化のため、内外面の調整は明確ではない。

7は、須恵器壺の口頸部である。口径 14.4 cm に復元され、残存高 3.5 cm をはかる。口縁部は外反し、端部に向かって次第に肥厚する。上端面はナデによって平坦に仕上げられる。口縁部から頸部外面は回転ナデ、頸部内面はヘラケズリを施す。8は、須恵器壺の頸部である。頸部下端で直径 20 cm に復元され、残存高 12.0 cm をはかる。頸部内外面には回転ナデで器壁を整えた後に、外面には沈線を 2.5 cm 間隔に 3 条、その間に波状文を施す。体部内面には當て具痕が残る。8は、明らかに古墳時代の所産となる。

ところで、4～6は 10世紀後半、1・2は 8～9世紀前半となる。また 3は 9世紀後半と考えられることから、溝 7の遺物は 8～10世紀と時期幅がある。これらの中には、8のように明らかに混入品と考えられる遺物もあるが、溝が機能した期間は相当長いと言える。

溝 8 出土遺物 溝 8からは、第 56 図 9～12 が出土した。9は須恵器壺 B の底部である。高台径は 9.4 cm に復元され、残存高 2.0 cm をはかる。底部内面と体部外面に、回転ナデを施す。外側へ開く形状の高台が、底部外周からやや内側のところに貼付けられる。8世紀までの所産と言える。

10は、綠釉陶器皿である。軟質の胎土で、京都の製品と言える。口径 14.8 cm に復元され、底部径 6.4 cm、器高 2.4 cm をはかる。円盤状高台の内側を削り、高台を形成する。底部内面にはヘラミガキを、体部の内外面は回転ナデを施す。全面に施釉されており、9世紀末～10世紀初頭の所産と言える。

11は、須恵器壺である。残存高 3.2 cm をはかる。体部中位に注口用の穿孔がある。その左右には列点文が施される。外面のうち体部上半は回転ナデ、下半には回転ヘラケズリを施す。内面は回転ナデである。古墳時代後期の所産であり、混入品と考えられる。

12は、鉈である。全長 25.3 cm、幅 1.2 cm 前後をはかる。脛部の断面は円形状に、先端部は三角形状を呈し、先端は若干反り返る。

溝 8も、8世紀から 10世紀初までの時期幅があるとおり、溝 7と溝 8はほぼ同じ期間に機能したことが確認できる。

以上のとおり、溝 7・8は 8～10世紀の長期にわたって並存する。これらの溝の方向は、第1期の建物の主軸方向と同じであり、一定の関係が考えられる。また、溝 7・8は一定の間隔を保つて並走することから、これらが道路の両端に掘削された側溝と解釈でき、その間の空間は道路状遺構と考えてよい。なお、溝 7・8からなる道路状遺構は、10世紀後半まで機能する。このことから、建物 9～13 からなる大型建物群が出現した後も、しばらく利用されたと言える。

その他の遺構 今回の調査では柱穴を多く検出したが、報告したとおり掘立柱建物に復元できたものは少ない。また、これ以外に竪穴住居なども存在したと考えられるが、壁溝や炉は確認できず、確認は得られなかった。しかし、当報告において復元できなかった建物が、将来復元される可能性はあるので、ここでは、柱穴出土遺物について、特に図化できたものを掲載した。今後、新たに建物などが復元できた場合に、参考にされたい。

柱穴出土遺物 柱穴から出土した遺物は、第 57 図に掲載した。弥生土器広口壺の口頸部と考えられる 1は、SP245 から出土した。口径 13.6 cm に復元され、残存高 3.1 cm をはかる。内外面は、

ともに横方向のヘラミガキを施す。

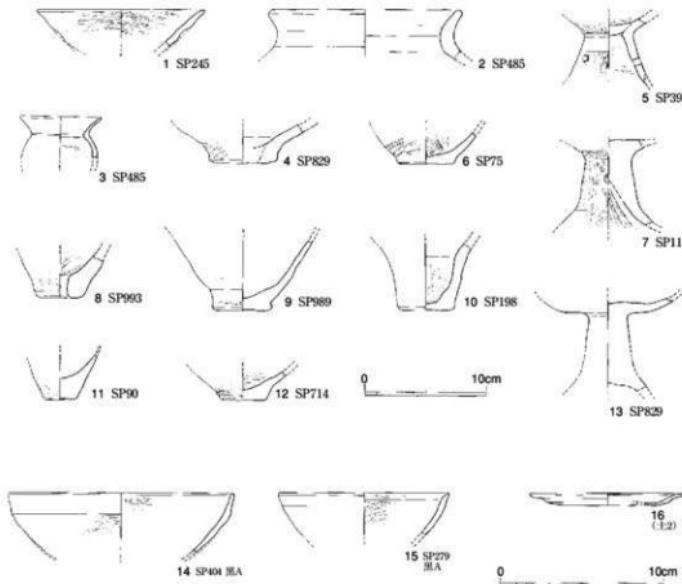
2はSP485の掘り方、3もSP485から出土した。2は弥生土器短頸壺の口縁部で、口径は15.0 cmに復元できる。風化により、内外面の調整は不明である。弥生時代終末期の所産と考えられる。3は弥生土器窯のミニチュア製品で、口径6.4 cmに復元され、残存高3.4 cmをはかる。風化のため、内外面とも調整は不明である。

4は、SP289の柱痕から出土した弥生土器窯の底部である。底部径5.6 cm、残存高3.2 cmをはかる。球胴形の体部から突出するように、底部がつく。底部外面には、タタキ痕が残る。内面の調整は、不明である。弥生時代終末期の所産と言える。

5は、SP397の掘り方から出土した弥生土器高杯の脚部である。脚部上端は直径4.0 cm、残存高5.4 cmをはかる。杯部と脚部は連続成形したあと、杯部底部に円盤が充填される。脚部上位には穿孔がある。外面のうち、杯部には綫方向のヘラミガキが、杯部底部の下端から脚部の上端にかけては横方向のナデが、脚部には綫方向のハケが施される。内面のうち、杯部底部にはヘラミガキが施される。脚部の内面には工具痕がみられるものの、風化により調整は不明である。弥生時代後期の所産と言える。

6は、SP75の柱痕から出土した弥生土器鉢の底部である。底部径4.6 cm、残存高2.7 cmをはかる。外面にはタタキ痕が残り、内面は不定方向のハケが施される。弥生時代終末期の所産と言える。

7は、SP111から出土した弥生土器高杯の脚部である。脚部上端の直径は3.8 cm、残存高7.1 cm



第57図 柱穴出土遺物（1～13：1/4 14～16：1/3）

をはかる。中空の脚部であるが、杯部との接合方法は不明である。外面は縦方向のヘラミガキが施され、内面には絞り目が残る。弥生時代終末期頃の所産と考えられる。

8は、SP993から出土した弥生土器小型鉢の底部である。外面には押圧痕が残るもの、ナデが施される。底部内面にはハケが、また中央には直径8mm程度の穿孔が貫通している。

9は、SP989から出土した弥生土器鉢である。底部径5.0cm、残存高5.8cmをはかる。風化により、内外面の調整は不明である。弥生時代終末期の所産と言える。

10は、SP198から出土した弥生土器小型鉢である。底部径4.2cm、残存高4.6cmをはかる。外面の調整は不明で、内面には縦方向のナデを施す。筒状の体部の上端が、外方へ聞くように立ち上がりて口縁部を形成する。弥生時代終末期の所産と言える。

11は、SP90から出土した弥生土器小型鉢の底部である。底部径2.6cm、残存高3.6cmをはかる。体部外面には押圧痕がみられるものの、風化により調整は不明である。弥生時代終末期頃の所産と言える。

12は、SP714掘り方から出土した弥生土器鉢の底部である。底部径4.0cm、残存高2.4cmをはかる。外面には押圧痕が残り、内面には板状工具によるナデが不規則に施される。弥生時代終末期の所産と言える。

13は、SP829の柱痕から出土した土師器高杯で、皿状の杯部になると推定される。脚部上端の直径は3.2cm、残存高7.7cmをはかる。中実の脚部で、接合方法は確認できない。風化により、調整は不明である。時期は判然としない。

14は、SP404から出土した黒色土器A類碗である。口径は13.8cmに復元され、残存高3.6cmをはかる。体部内外面には横方向のヘラミガキが、口縁部外面には横方向のナデが施される。10世紀後半の所産と考えられる。

15は、SP279から出土した黒色土器A類碗である。口径は10.4cmに復元され、残存高3.6cmをはかる。内面には不定方向のヘラミガキが、口縁部外面には横方向のナデが施され、端部はやや外反する。10世紀後半から11世紀前半の所産と考えられる。

16の土師器皿は土坑2から出土したものであるが、土坑2は弥生時代の遺構となることから、その上面から掘削された柱穴に伴うと判断した。口径9.6cmに復元され、器高0.7cmをはかる。ほぼ水平方向にのびる口縁の端部は上方につまみ上げられ、いわゆる「て」の字状口縁の形態を呈する。風化しているとは言え、器壁の厚さは1~2mmと極めて薄い。11世紀前半の所産と考えられる。

第IV章 まとめ

当報告は、発掘調査が実施されてから20年ほど経過しており、その間に曾根遺跡では11次にわたる発掘調査と多数の確認調査が行われている。ここでは、それらの調査成果をふまえつつ、第1次調査について総括することにしたい。

1. 遺構の変遷

今回の発掘調査では、弥生時代から平安時代にいたる各時期の遺構を検出した。これらの遺構は2期に大別して報告したが、ここでも弥生時代から奈良時代にかけての時期を第1期、平安時代を第2期として、それぞれの時期における遺構の動向を述べることにする。

(1) 第1期の遺構

弥生時代中期 この時期の遺構としては、竪穴住居2・土坑2・土坑5・土坑6が挙げられる。竪穴住居2や土坑2の厳密な時期は特定できないが、土坑5・土坑6は第IV様式後半に比定できる。このうち、竪穴住居2の主軸方向は後に出現する道路状遺構である溝7・8の方向と概ね一致するように、当調査区における第1期の竪穴住居・掘立柱建物は、N-45°~68°-Eの方向に建てられるものが多い。その基準を何に求めたのかはわからないが、集落が出現したときから住居や建物などの主軸方向に大きな変化がなかったことは注意しておきたい。

ところで、当遺跡では弥生時代中期でも第III様式に遡る遺構・遺物がないことから、今のところ集落の出現は第IV様式に求められる。当市域における弥生時代の集落を概観すると、第I様式に集落が出現するのは小曾根遺跡や勝部遺跡といった平野部の遺跡が中心であり、段丘上に本格的な集落が出現するのは第II様式になる。段丘上に展開する集落としては、豊中台地上の新免遺跡と待兼山丘陵から派生する低位段丘上の螢池北遺跡（宮ノ前遺跡）が、最も早い遺跡とされる。

そのうち、当遺跡北方に位置する新免遺跡では、第IV様式の時期に集落域が急激に拡大すると共に、近隣の本町遺跡や岡町北遺跡において、新たな集落が出現することが知られている。当遺跡における集落も同じ時期に出現することから、母村から独立した新たな集落と考えられる。ただし、当遺跡は新免遺跡から離れているため、母村となる集落は特定できない。

なお、この近辺では、最低位段丘に展開する原田遺跡や段丘裾野に近い沖積地に展開する豊島北遺跡でも、後期までに集落が出現する。このことから、豊中市域の段丘上やその裾野では、弥生時代中期後半に小集落の分立が盛んに行われたと言える。

弥生時代後期～終末期 この時期の遺構としては、竪穴住居1・土坑1・土坑3・溝1～4が挙げられる。また、建物1・2も、この時期の所産となる可能性がある。土坑6は、この時期に埋没したと



第58図 弥生時代中期の遺構



第59図 弥生時代後期～終末期の遺構



第60図 古墳時代後期～終末期の遺構

考えられる。

このうち、土坑1は第V-0様式に比定されるが、豊中市内におけるこの時期の一括資料は少なく、当事例はこの地域における弥生土器の編年を行うにあたって、指標の一つになるだろう。

ところで、当調査区における遺構は、出現期にあたる第IV様式に比べて、それほど増加していないようにみえる。しかし、第6次調査区では第V様式後半の竪穴住居2棟が検出され、また終末期の遺構は遺跡全体に分布するように、第1期の集落は弥生時代終末期に盛期を迎える。

当遺跡の周辺をみると、先の本町遺跡や岡町北遺跡でも集落域が著しく拡大する。また、沖積地に立地する穂積遺跡や上津島遺跡、利倉西遺跡などにおいて新たに集落が出現するとおり、豊中市南部一帯も急速に発展する。これに対して、新免遺跡では集落域が把握にくくなり、また蛍池北遺跡は廃絶する可能性があるなど、中期に盛行した遺跡（集落）と分村として出現した集落では、その後の展開が大きく異なる。

古墳時代前期～中期 建物1・土坑1がこの時期の所産になる可能性はあるものの、判然としない。

このように、この時期の遺構はほとんどみられない。しかし、いくつかの土坑からはこの時期の遺物が出土しており、弥生時代に出現した集落は廃絶したわけではない。第6次調査区では布留式古層の遺構が検出され、段丘西部に派生する舌状丘陵に位置する原田遺跡第1次調査区でも、庄内式新相～布留式古相の遺物が多量に廃棄された竪穴住居が確認されている。よって、この時期に集落が過疎化したことは否めないものの、奈良時代まで継続することは、他の調査区における遺構から追跡できる。

古墳時代後期～終末期 この時期の遺構としては、建物3～5・柱穴列1が挙げられる。また、柱穴1も、この時期の所産と考えられる。このうち、建物3の主軸方向は他の建物と異なるが、建物4・5は溝7・8と近く、集落における建物の主軸方向は、この時期も踏襲されている。

6世紀後半～末に継続する建物4・5は、大型の柱穴からなる掘立柱建物であるが、これ以外に柱穴1のような特異な遺構を伴うことから、この建物群が集落において特殊な存在であった可能性は考えられよう。

なお、第5次調査区ではこの時期の竪穴住居がみられ、第3次調査区では多数の掘立柱建物が確認されている。当調査区における遺構はあまり多くないが、この時期には再びまとまりのある集落になると想定される。

(2) 第2期の遺構

当調査区では、10世紀でも建物7・8のように從来と同じく、N-45°~68°-Eを主軸方向とする建物群が展開している。建物7・8は倉庫と推定できることから、この北側には主屋となる建物が存在した可能性がある。ただし、この建物群は、後に述べる超大型建物群の成立までに廃絶するとおり、その存続期間は短いと考えられる。

また、溝7・8には10世紀後半以降の遺物が含まれていないことから、この時期に道路状遺構も機能しなくなったと推定される。

一方、8世紀末には遺跡北部の第8次調査区（建物2・3）や第5次調査区（建物2）において、N-10°~20°-Eを主軸とする建物群が展開はじめた。また、第5次調査区では8世紀末から9世紀前半の都城系土師器が廃棄された大型土坑が、3基ほど検出されている。これらのことから、超大型建物群に先行する官衙的な建物群が、この時期に当調査区の北方において出現すると考えられる。ただし、この段階の建物の柱穴は、普通の集落における建物と同じ大きさであり、配置や周辺の遺構、出土遺物以外に目立った特徴は認められない。

10世紀前半になると、当調査区の建物9~13をはじめとする大型建物が、東西に整然と建ち並ぶように、8世紀末に出現した建物群は郡衙遺跡にも匹敵する超大型建物群へと大きく変わる。また、建物群の範囲は大きく拡大し、これに伴って建物7・8も廃絶すると考えられる。これらの建物の柱穴は1辺0.7m~1.0mと一際大きく、使われた柱も20cm~30cmと普通のものと比べて一段と太い。また、建物の主軸方向はその周辺に展開する建物14も含めて、N-15°~17°-Eに統一されている。さらに、建物11のように倉庫となる建物もあり、これが特殊な建物群となることは間違いない。このような建物は、第5次調査区や第8次調査区でも確認されている。このことから、第1次調査区で確認された建物は、超大型建物群の一部にすぎないことは明らかである。

2. 超大型建物群について

(1) 超大型建物群の推定範囲

それでは、この建物群はどの程度の範囲に展開したのだろうか。まず、建物群と同じ方向に掘削された溝6より南側では、傑出した規模・構造の建物が検出されていない。また、溝6は10世紀から11世紀前半まで機能するとおり、超大型建物群の継続期間とほぼ一致する。これらのことか



第61図 第2期前半の遺構



第62図 第2期後半の遺構

2. 超大型建物群について

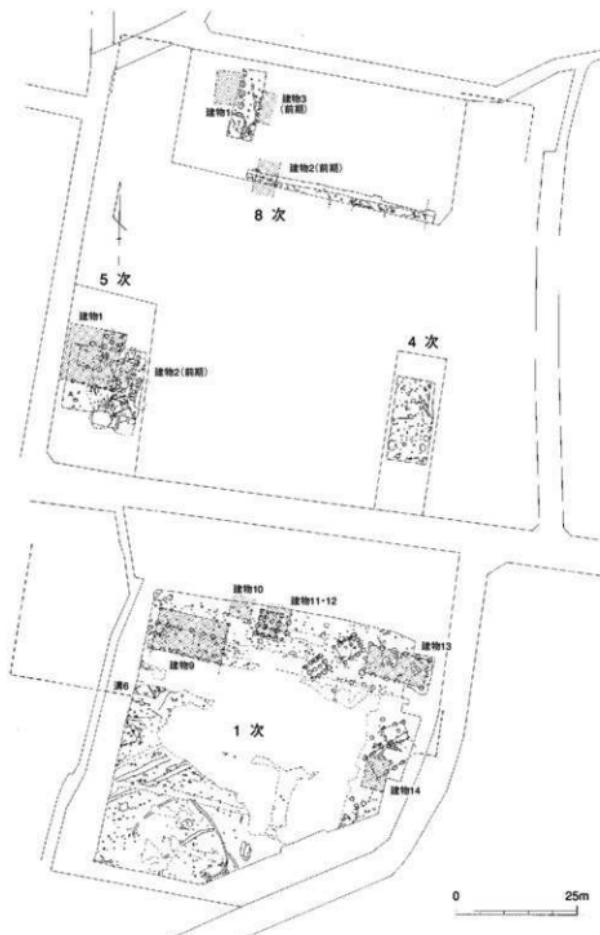
建物	主軸方向	時期	構造	そのほか（時期決定根拠など）
建物 1	N - 68° - E	弥生時代終末期～古墳時代前期	総柱建物	出土遺物は少なく、時期は推定。
建物 2	E - 1° - N	弥生時代終末期	側柱建物	出土遺物無し・構造から推定。
建物 3	N - 68° - E	7世紀前半	側柱建物	出土遺物・破片
建物 4	N - 66° - E	6世紀後半	側柱建物	出土遺物は少なく、時期は推定。
建物 5	N - 54° - E	6世紀末	側柱建物	遺物から。
建物 6	N - 54° - E	不明	不明	遺構の状態不良
建物 7	N - 63° - E	先 10世紀	不明（総柱？）	出土遺物は少ない。
建物 8	N - 64° - E	先 9～10世紀	総柱建物	柱穴掘り方の出土遺物。
建物 9	E - 13° - S	大 10世紀前半	2面庇付建物	遺物から。
建物 10	N - 17° - E	大 8世紀以降	側柱建物	遺物から。
建物 11	N - 16° - E	大 10世紀頃	総柱建物	遺構の重複関係。
建物 12	N - 16° - E	大 10世紀	側柱建物	柱痕の出土遺物から。
建物 13	N - 13° - E	大 10世紀前半	側柱建物	柱穴掘り方の出土遺物。
建物 14	N - 14° - E	周 10世紀	側柱建物	遺物から。
建物 15	N - 22° - E	周 10世紀頃	不明（側柱）	遺物から。
建物 16	N - 57° - E	周 10世紀頃	不明（側柱）	遺物から。
建物 17	N - 16° - E	不明	側柱建物	
柱穴列 1	E - 15° - N	古墳時代後期以降		遺物から。
柱穴列 2	E - 14° - S	○ 10世紀後半		遺物から。
柱穴列 3	E - 0° - S	周 9～10世紀		出土遺物は少ない。

第1表 据立柱建物一覧

大＊大型建物群 周＊大型建物群の周辺に展開する建物 先＊大型建物群の先行し、関係が想定される建物ら、溝6は建物群の南限を区画するために掘削されたと考えられる。一方、その北側については、第8次調査で南北3間の総柱建物と考えられる建物（8次建物1）が検出されていることから、この調査区まで広がることは確実である。しかし、それより北方の地域では、本格的な発掘調査があり行われていないので、北限を特定することは困難である。ただし、第8次調査の北50mにある第10・11次調査ではこの種の大型建物は検出されず、その上、同じ時期の一般的な建物が確認されていることから、建物群の範囲は南北130m以上、180m未満になることは確実である。なお、第8次調査区建物1は、第5次調査区建物1よりも東側に位置する。官衙的建物群の配置形態を考慮すると、第8次調査区建物1が超大型建物群の北限となる可能性もある。この場合、この建物群の南北長は、140m程度になる。

一方、東端については、第1次調査区建物13の東側で2基の柱穴が検出されており、この柱穴も超大型建物群を構成する建物に帰属する可能性がある。しかし、曾根遺跡が立地する舌状丘陵の頂部から東側の斜面にいたる地域では、まだこの種の建物は確認されていないので、東端は第1次調査区から大きく広がるとは考えにくい。また、西端も第5次調査区から西側の第3・6・7次調査区やそれ以外の確認調査で、この種の建物は検出されていない。このことから、超大型建物群の西端が第5次調査区から西方へ大きく広がる可能性は乏しいと判断できる。第5次調査区建物1から第1次調査区建物13までの距離は82mであるが、それより大きく広がらないと推定できるところから、東西長は約100mとなる。

このように、曾根遺跡の超大型建物群の範囲は、少なくとも南北140m・東西100m程度になる。



第63図 超大型建物群の範囲（1/1000）

(2) 超大型建物群の性格

当遺跡における平安時代の建物群は、既往の発掘調査で確認されている大型建物群の規模を遥かに越える。よって、ここでは、この建物群を特に超大型建物群と呼んでいる。この超大型建物群は、発見された当初から豪族の居館や寺院、官衙などの可能性が指摘されてきた。しかし、その性格を決定するだけの手がかりは、第1次調査では得られなかった。このあと、各地で発掘調査が進み、官衙遺跡やそれ以外の大型建物群などの実態も判明するようになってきた。ここでは、先に提示さ

れた各説について、類例などの検討を通して考えることにする。

豪族居館説 この時期の大型建物群で全体像が判明する事例としては、大阪府松原市に所在する池内遺跡^①が挙げられる。この建物群は、9世紀後半から11世紀前半にかけて継続する。その規模は南北40m程度、東西70mをはかる。建物群は、大型の総柱建物（主屋）と桁行の長い建物（脇殿または作業施設）、極小規模の掘立柱建物という3種類の建物によって構成される。特に、家族の居住区と推定される主屋の西面に広場を設け、その広場を囲むように桁行の長い建物が配置される形態に大きな特徴が見出される。さらに、その周囲には、極小規模の建物などが展開しており、隸属民の存在も示唆する。広場を中心とする配置は、一見して官衙的配置にも類似するが、特定の家族が居住する主屋と作業空間に分離された空間配置という点で、官衙やその関連施設とは明らかに異なる形態と言えるだろう。なお、この建物群からは瑪瑙製の鏡が出土するとおり、官人出自の田堵層と推定される。また、当遺跡は畿内における大型建物群の指標になる可能性がある。

ところで、この建物群の中心となる主屋は、一つの家族が同居できるだけの規模を有する総柱建物である。また、この建物群は、集落を形成しないまま単独で展開する。このことから、その居住者は完結した一つの家族（単婚家族）を構成すると推定できる。この種の大型建物群は、和泉以外の畿内とその近郊にある一部の地域（近江南部など）において9世紀に出現するが、それらはすべて単独で展開している。よって、この時期の大型建物群とは、完結した単婚家族によって構成された經營体と考えられている。

これに対して曾根遺跡の超大型建物群は、面積にして池内遺跡の4倍以上もあるとおり、その巨しさは畿内で一般的にみられる大型建物群と比較しても歴然としている。また、池内遺跡の場合、主屋に家族が居住すると推定できるが、曾根遺跡の場合はそうした主屋級の建物が多くあり、一つの家族が居住するような機能は考えにくい。しかも、構成する建物は倉庫とそれ以外に区分できるが、多様な構造の大型建物について、それぞれの機能を推定することはできない。このように、曾根遺跡の超大型建物群が、池内遺跡のような単なる居宅にならないことは明確である。

その一方で、畿内外の地域では様々な大型建物群が確認されているが、その性格は十分に解明されていない。また、地方官衙には多様な施設があり、官衙関連施設と推定される建物群の形態も異なるとされる^②。よって、豪族居館と想定されている建物群でも、国・郡庁以外の官衙関連遺跡になる可能性がある。加えて、古墳時代の豪族居館が、9世紀に存続するという事例も聞かないでの、10～11世紀に豪族という階層が実在したのか、考古学的に確かめる必要もある。

参考までに、京都府久御山町に所在する佐山遺跡^③は、「政所」と墨書きされた灰釉陶器から、古代の莊園施設が11世紀後半に居館化すると考えられている。三重県津市に所在する雲出嶋貞遺跡^④でも多量の綠釉陶器が出土しているが、これをもとに古代に遡る豪族居館とは評価されていない。このように、中世の居館の中には古代に遡る系譜を有するものもあるが、それが古代豪族の居館にならないことは明確である。

以上から、西日本では10世紀から11世紀前半にかけて、居館と言えるような建物群は確認できず、在地領主の先行形態とされる地方の豪族層についても実在するのか、非常に疑わしくなってきた。よって、曾根遺跡を豪族居館とする説は採用できない。

寺院 次に考えられるのが、寺院の可能性である。しかし、この時期の寺院でも曾根遺跡の規

模となれば、瓦葺きの本堂などを中心とする規格的な伽藍配置があつて当然と言えるが、曾根遺跡の超大型建物の配置にはそうした特徴が全く見られない。しかも、金寺山廃寺に限らず、市内では古代寺院に伴うと考えられる遺物が出土する遺跡は、島田遺跡第1次調査区（重郭文軒平瓦・奈良三彩小壺）・豊島北遺跡4次調査区（瓦多数）・北条遺跡6次調査区（瓦若干・円面鏡）と少くない。このことは、豊中市内の古代寺院において、瓦葺きの建物が普通に存在した可能性を示す。これに対して曾根遺跡で出土した瓦は極めて少なく、瓦葺きの建物は極少数にとどまると考えられる。よって、曾根遺跡の超大型建物群を、寺院に比定する根拠は全くない。

官衙または関連施設 最後に残る官衙施設の可能性であるが、これも施設の性格を特定するとなると極めて難しい問題が浮上する。

大型建物が中央の空白地を囲むように、逆「コ」字あるいは「ロ」字状に整然と建ち並ぶと想定できることから、曾根遺跡の超大型建物群にみる建物配置の形態は官衙的配置と言える。しかしその一方で、官衙あるいはその関連施設によくみられる桁行5間以上の建物は、これまで一棟も確認されていない。また、郡庁のような左右対称の建物配置となる可能性も乏しい。

さらに、規格的な建物配置を指標とする郡庁を含む郡衙は10世紀には作られなくなり、10世紀後半に継続するものは珍しいという。こうした郡庁の規模は1辺54m程度を標準とし、100mを超える事例はこれまで発見されていない^②。これに対して曾根遺跡の超大型建物群は、10世紀前半のうちに出現し、溝6や第5次調査区井戸1から11世紀前半に継続する可能性が高い。さらに、その規模は郡庁の標準的な規模を遥かに超え、むしろ郡衙・正倉の規模に匹敵する。このように形態的にも、時期的にも、曾根遺跡が郡庁となる可能性はない。

一方、倉庫と推定できる総柱建物は、これまで3棟（建物11・12、8次建物1）が確認され、その規模は3間四方で共通すると想定できる。しかし、群としてまとまりがなく、また建築面積も20m²程度と小さいので、正倉にならないことは明らかである。

これ以外に末端官衙や官衙補完施設といった可能性もあるが、その規模からこれらにも比定できない。また、当地域には近都牧の一つとして『延喜式』に記された豊嶋牧や、藤原氏の私牧である垂水牧があり、このような牧に関わる施設とも考えられなくもない。しかし、垂水西牧（櫻坂郷）の本庄部分とされる「牧内」の分布範囲と当遺跡の位置は大きく離れることから、その可能性は否定される。また、豊嶋牧の位置が特定されていないことから、曾根遺跡に関連付ける根拠はない。

ところで、郡庁を中心とする郡衙が10世紀には作られなくなる傾向があるからといって、それによって郡衙などの地方支配のための施設になくなつたとは言えない点は留意する必要がある。それは、郡衙の廃止に伴つて国衙が郡や郷を直接支配したのではなく、地方の支配は郡郷司に引き継がれるとされるからである。それでは、郡郷司がどのような施設において地方支配を行つたのか。私宅を拠点としたのか、それとも別に新たな施設を作つたのか、そこが今後の問題になるだろう。このとき、郡郷司がどのように機能したのかも含めて、考古学的に吟味する必要がある。

また、先に豪族の居館とされたものの中には、官衙施設となる可能性も指摘されている^③。そうした建物群のうち10世紀に出現するものがあるのか、またそれらの建物群の特徴についても検討する必要性が残されている。

超大型建物群が廃絶する時期は、11世紀前半になる可能性があることを指摘した。この時期は、

2. 超大型建物群について

いわゆる寛徳～延久の莊園整理令が発令され、畿内では領域型莊園が多く出現した時期にあたる。領域型莊園の立莊に伴い、中世的集落と莊内流通拠点が編成されるが、曾根遺跡においても同じ時期に六車(原田)莊に比定できる中世的集落が出現する^{※5}。つまり、領域型莊園が立莊される前夜に、曾根遺跡の超大型建物群は廃絶するのである。そこに、この建物群の性格や歴史的意義を知る手がかりがあるように考えられる。

以上、曾根遺跡第1次調査の成果について、その後に行われた11次の調査成果をふまえて検討した。その上で、曾根遺跡の超大型建物群の性格は決定できないなど、多くの課題が残されている。よって、今後とも周辺の開発では、遺跡の保護に留意する必要があることを提言する。

【註】

※1 財團法人 大阪府文化財センター『池内遺跡』2010年

※2 独立行政法人 文化財研究所 奈良文化財研究所『古代の官衙遺跡II 遺物・遺跡編』2004年

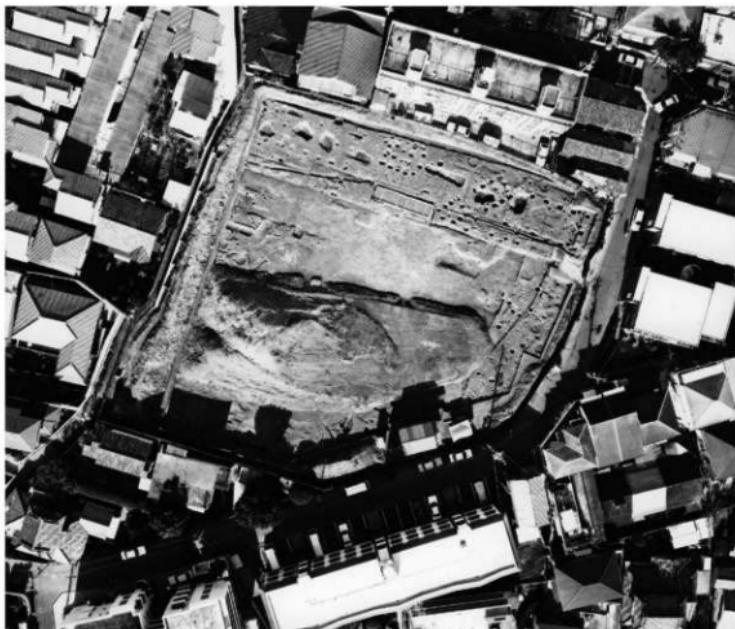
※3 財團法人 京都府埋蔵文化財調査研究センター『佐山遺跡』2003年

※4 三重県埋蔵文化財センター『嶋坂II』2000年

※5 橘田 正徳「11世紀後半における集落編成からみた領域型莊園の成立」『古文化談叢 第64集』

2010年

図 版



(1) 調査区全景



(2) 調査区全景（東部）

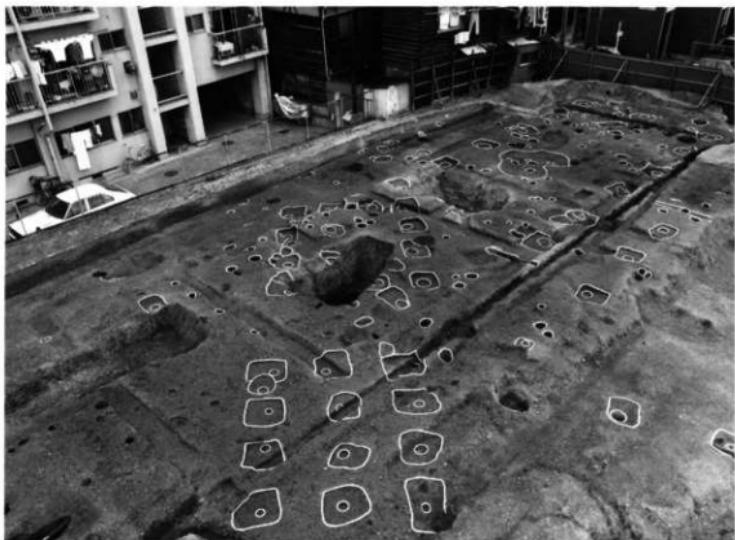
図版2



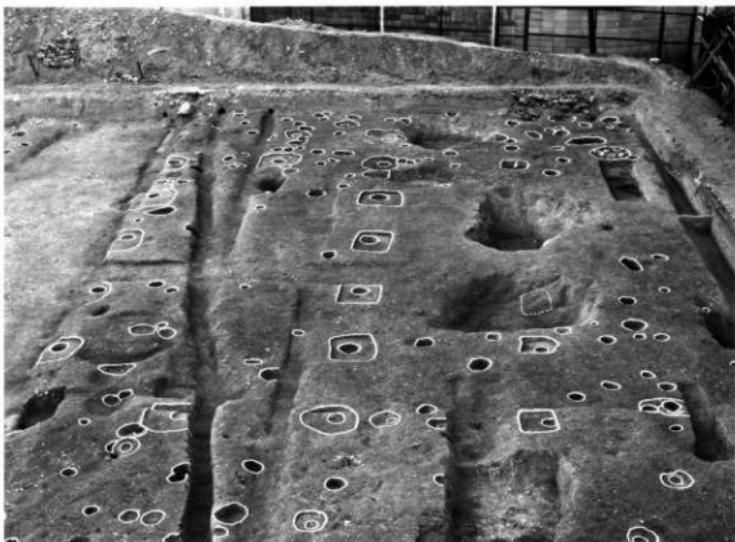
(1) 調査区全景（西部北側）



(2) 調査区全景（西部南側）

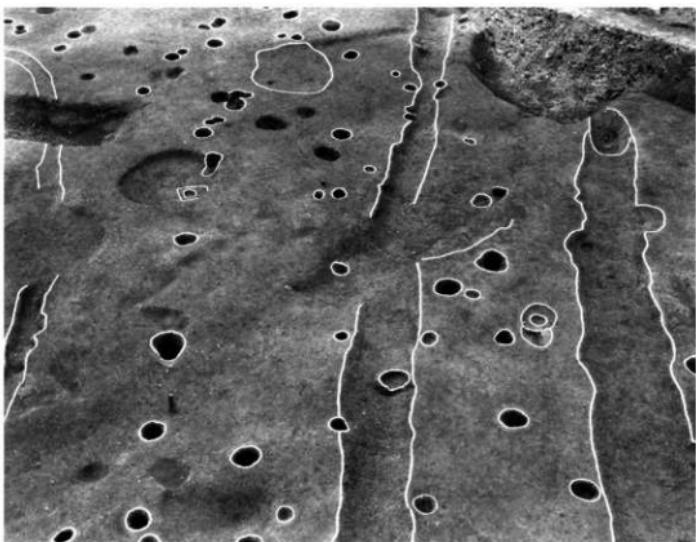


(1) 調査区全景（北部東側）



(2) 調査区全景（北部西側）

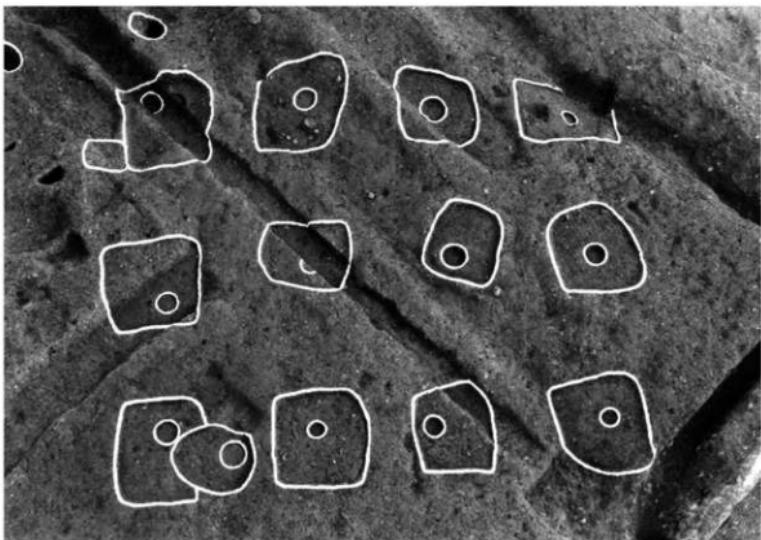
図版 4



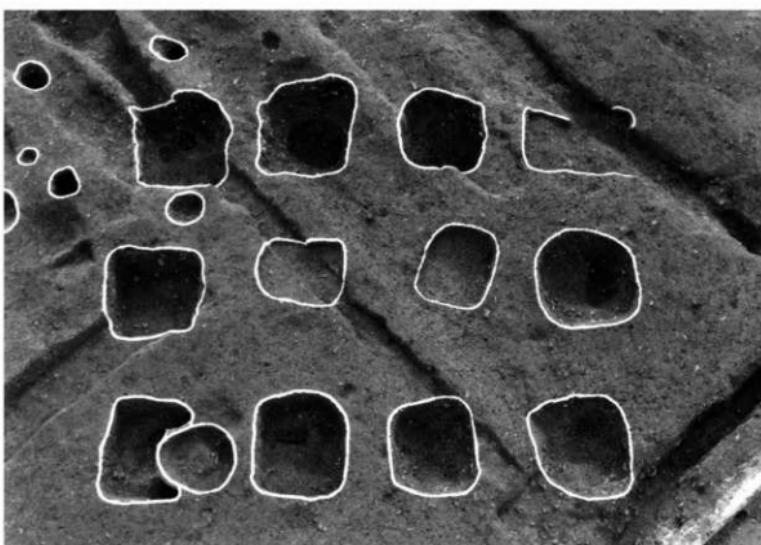
(1) 建物 1 全景



(2) 建物 4・5 全景



(1) 建物 8 柱痕検出状況



(2) 建物 8 全景

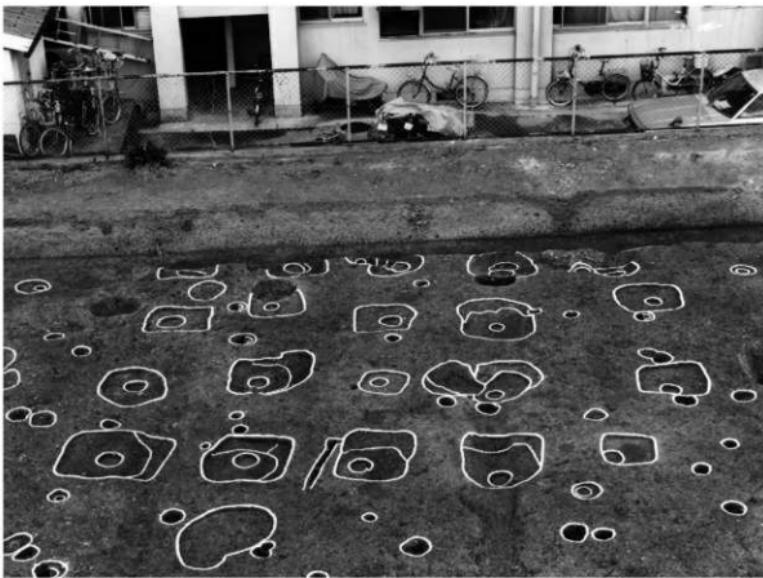
図版 6



(1) 建物 7・8 全景



(2) 建物 9 全景



(1) 建物 11・12 柱痕検出状況



(2) 建物 11・12 全景

図版 8



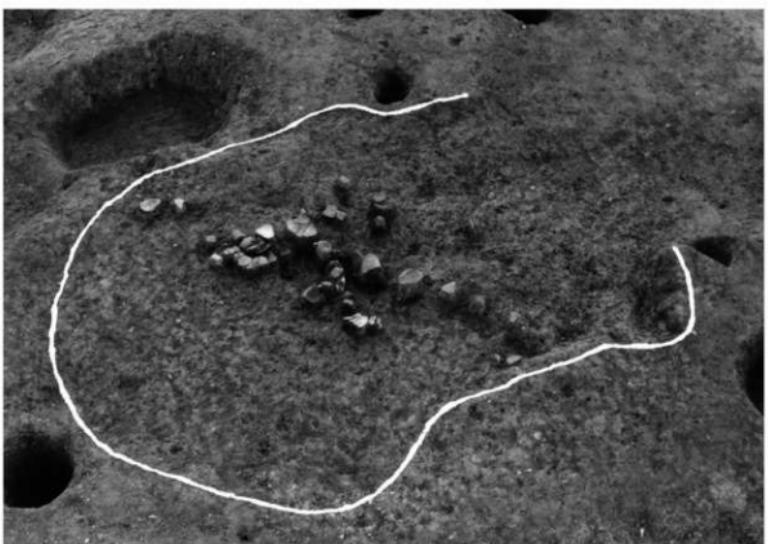
(1) 土坑1遺物出土状況



(2) 土坑2遺物出土状況

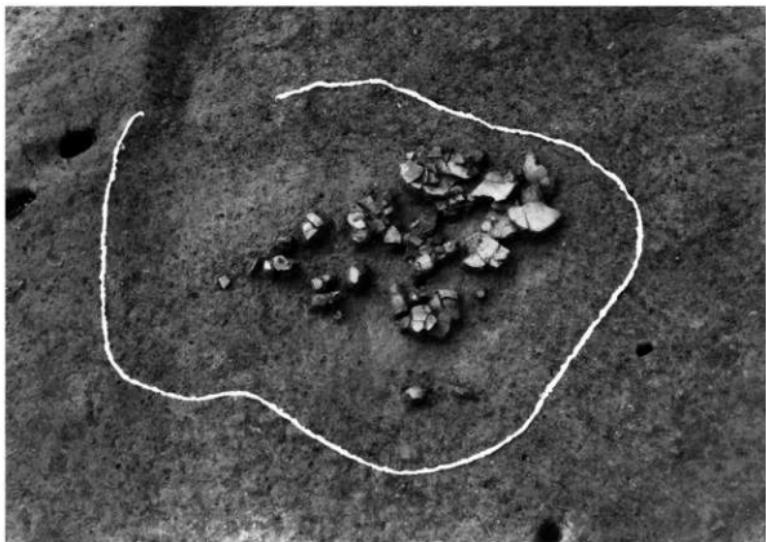


(1) 土坑3遺物出土状況

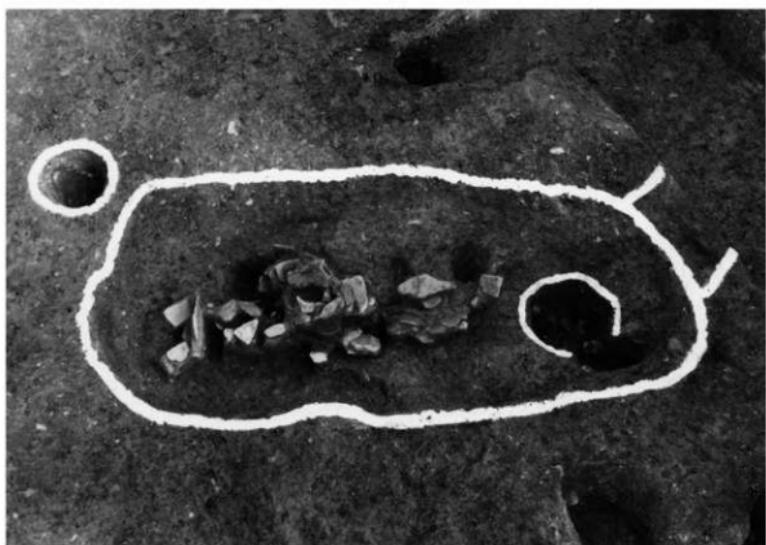


(2) 土坑4遺物出土状況

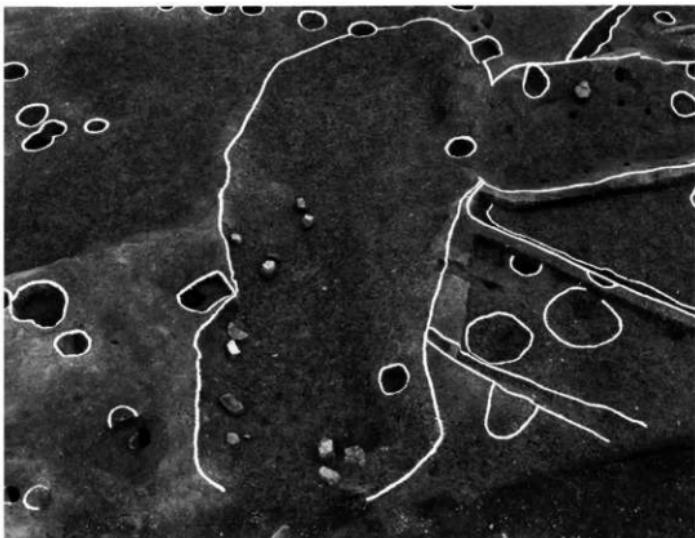
図版 10



(1) 土坑5 遺物出土状況



(2) 土坑6 遺物出土状況



(1) 土坑7 遺物出土状況



(2) 土坑8 遺物出土状況

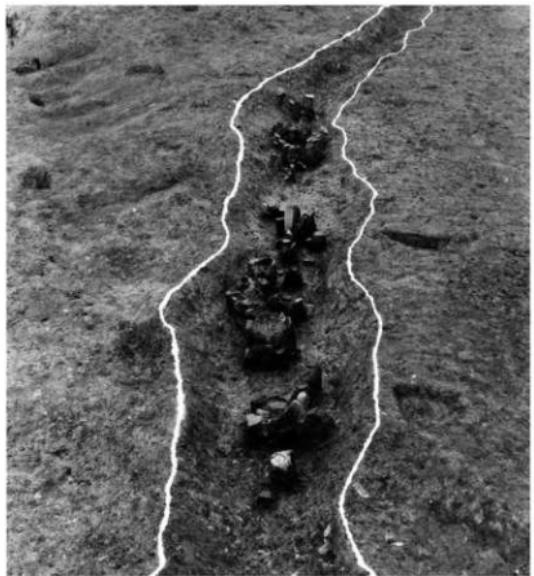
図版 12



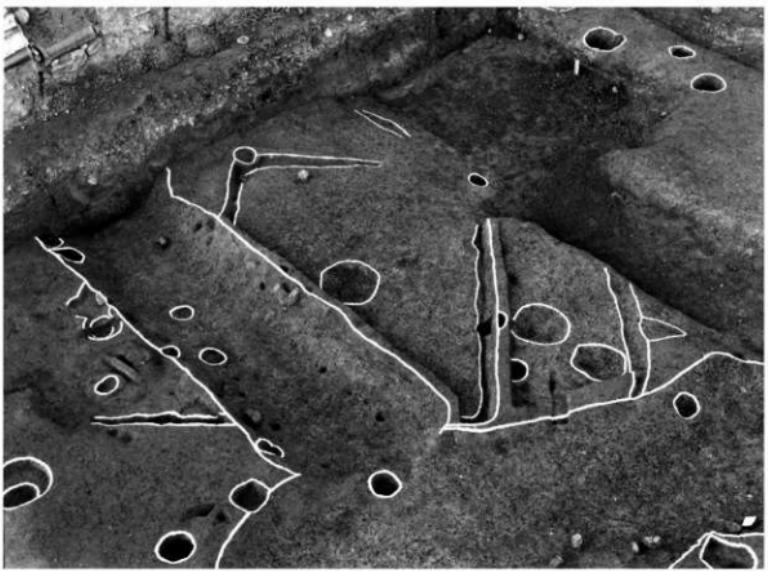
(1) 溝 1 ~ 4 全景



(2) 溝 2・3・5



(1) 溝4 遺物出土状況



(2) 溝6・竪穴住居1 全景1